

百

湘

年

南

誌

蹴



球



石川滋彦「湘南サッカー 半世紀を経て」記念誌表紙 1981 年 墨画・紙本 個人蔵

百年のボール

庭にどっかりすわる

伝説のガンブチ岩瀬二郎

丸いボールが

石のように重く見えるのは

百年の時間のせいだ

画・石川滋彦（二回生）—— 第7章 296 ページ
ガンブチの同期生だ

湘南蹴球百年誌



湘南蹴球百年誌 目次

第2章

国破れた翌年、 全国を制覇

優勝キャプテンがOBコーチとして率いる……………	38
二日がかりの決勝戦ついに力尽きる……………	40
ビルマから神戸へ、神戸から湘南へ……………	44
全国選手権大会代表権をはじめて獲得……………	49
不穏な世相のなか年間総得点百十一・失点八……………	58
三年半の戦火に焼き尽くされたもの……………	64
青空と校庭と解放感、水を得た魚となる……………	69
球を蹴り二十六年蹴り復た蹴る……………	72

第1章

ポケ猿さん、 ア式蹴球を伝授

手品のような足技の新任教師がやってきた……………	10
初代校長が重きをおいた戸外運動の団体競技……………	12
日本サッカー代表チームの海外遠征での初得点……………	16
屈辱の0-9から惜敗の0-1へ……………	21
新人を勧誘し五ヶ年計画そして東大生コーチ……………	24
東京日日新聞の豆記事「新進湘南勝つ」……………	28

第3章

英語教師として、 ガンブチ帰る

学制改革により神奈川県立湘南高等学校……………	86
不戦勝を潔しとせず、待って戦い、敗れる……………	88
湘南中学にとって公式戦ラストゲーム……………	94
OBたちは大舞台で活躍する……………	96
創部もない硬式野球部が全国を制した……………	98
物は不足していたが心は豊かだった……………	100
夏の合宿後見違えるほど強くなるのが湘南サッカー……………	103
名選手たちのふしぎな縁の巡り合わせ……………	107
あの雨でボルトシステムが機能しなかった……………	110
いつかはなんとかする、いまは雌伏の時代……………	113
浦高定期戦が始まった翌年、校舎焼ける……………	115
マッチをくわえ煙草で火をつけたガンブチ……………	118

第4章

鈴木中監督の 二十余年間

サッカー狂校長が熱く動いた……………	128
お引き受けした以上私のチームを作ります……………	132
日本サッカー育ての親ドイツのクラマー……………	137
正しいことを身につくまで繰り返す……………	140
しのぎを削ったライバル鎌倉学園高……………	142
県予選決勝戦でいつか見た悪夢の再現……………	144
関東制覇とガンブチのパチンコ……………	148
伏兵・頭脳の湘南一回戦で散る……………	151
史上初の女子マネージャー誕生……………	155
メキシコ五輪の銅メダルそして大学紛争……………	158
相工大附属高が名選手を輩出……………	160
神奈川県選抜選手を国体に送り出す……………	164
惜しまれて湘南の巨星墜つ……………	166
高校百校新設計画サッカー地図に変化……………	170
指導陣に新しいスタッフ……………	174

二十三年ぶりに



全国の舞台へ

初のOB教員藤塚久雄監督が誕生……………	186
来年は体育祭準備からできるだけ逃れよう……………	198
熱中症患者のうわごと「国立に行くぞ」……………	191
横浜ニッ沢球技場に大歓声があがる……………	193
週刊プレイボーイにも記事「名門校のトトカルチョ」……………	195
藤沢市内のホテルで壮行会が開かれる……………	198
選手権一回戦をPK戦で制す……………	200
強風の吹く日ベスト8の夢断たれる……………	202
昭和天皇が皇居吹上御所で崩御……………	205
校舎改築が正式に決定される……………	206
グラウンド難民は流浪の旅をつづける……………	209
長く語り継がれる「ドーハの悲劇」……………	211
自校のグラウンドで一度も練習できなかった世代……………	214
十二年間の藤塚体制にピリオド……………	217

スペイン遠征



はじまる

新監督に清水好郎が就任……………	226
私立高の躍進が顕著になる……………	229
スペインへの遠征計画が発案される……………	232
困難をクリアしてビルバオへ……………	236
十一年間の清水時代は第三回遠征をもって終える……………	241
ユース年代のU18リーグシステム……………	244
平成の閉幕から次の時代へと……………	247
恒例の事業として定着したスペイン遠征……………	251
それぞれが自らの大きな財産として……………	253
東大ア式蹴球部に選手輩出の復活……………	255
グラウンド一世紀、変わるもの・変わらぬもの……………	256
思いも寄らないバンデミック……………	261

OBの風景



OB会……………	272
OBチーム……………	274
活躍フィールド……………	277
日本のサッカー界で……………	277
多彩なビジネスの世界で……………	284
初代OB会長は法曹界で……………	287
政官界でも……………	288
学者も幅広く……………	292
表現者として……………	295
スポーツドクターたち……………	300
県サッカー協会、OB会……………	303

巻末データ



湘南サッカー部 年表……………	306
湘南サッカー部 戦歴……………	316
湘南サッカー部 名簿……………	326
歴代部員……………	326
歴代指導教諭……………	334



ポケ猿さん、 ア式蹴球を伝授

大正十（一九二一）年～昭和五（一九三〇）年



手品のような足技の 新任教師がやってきた

春の午後である。遠く揚げ雲雀の声が聞こえている。その校庭で、湘南中学の第二回生・岩渕二郎は新任数学教師の後藤基胤にふしぎな足技を見せられた。ボールが足に吸いつくようであり、足がボールを射撃するようでもある。まるで手品を見せられる思いで岩渕少年は目をまるくした。

「そうか、これこそが英国のアソシエーションフットボールというものか」

大正十三（一九二四）年のことである。年のはじめ、前年の九月に起きた関東大震災のため延期されていた皇太子裕仁親王（昭和天皇）と久邇宮良子女王の成婚式が

行われた。世は大正デモクラシーという自由主義の思潮が広まっていた時代である。

後藤基胤は小柄だった。その身体が鞠のようにくるくる動くさまは、まるで早送りの映像を見るようだった。しかも、足元にボールはぴつたりと服従している。

「ぼくはこういう小さい身体だから、まわりから与えられたニックネームはね、ポケットモンキーなのだよ」

新任数学教師はおだやかな笑顔でそう言った。すぐにうちとけた生徒たちは敬愛をこめて「ポケさん」、あるいはもっと親しみを含んで「ポケ猿さん」と呼び、急速に新任教師を慕っていく。そのなかのひとり、明治四十二（一九〇九）年生まれ、昭和五十五（一九八〇）年に、享年七十一で惜しまれながら他界した湘南中学二回生岩渕二郎は、

「蹴球院殿快足得点居士」

という戒名を生前に自ら決めておいたほどのサッカー人生だったが、そもそのみなもととはといえば、まさにその春の午後、ポケ猿さんの足技を目の当たりにした衝撃ということになる。そしてそれは同時に、「湘南サッカー」の淵源ともつながっているのだ。

初代校長が重きをおいた 戸外運動の団体競技

県立としては神奈川県下六番目の旧制中等学校・湘南中学が開校されたのは、大正十（一九二一）年である。この地域には海軍高級士官の子弟が多く、設置が早くから望まれていたという背景があった。初代校長には新潟県長岡女子師範学校（現・新潟大学教育学部）の校長を務めていた赤木愛太郎が赴任した。赤木は新しい職場環境で意気に燃えた。県立はすでに五校、私立も多く、いわば後発である。「売りどころ」を明確にしなければならない。細かいことを言わず、こころざしは太く、だ。ということだ、

「日本一の学校」

を教育目標に掲げる。そのためにはソフトとハードの充実だ。ソフトは、よい教師。東京に近いという地の利を生かして、積極的に招聘していく。ハードは、施設つまり校舎と運動場である。ソフト面ですぐに実行に移すべく赤木は東京から音楽、美術、文学、考古学のスペシャリストを招く。「智」と「徳」の充実だ。そしてその二要素と同等に「体」にも優れた、いわば三位一体のバランスがとれた生徒の育成をめざした。「体」の充実として文部省の奨励する武技（剣道・柔道）を尊重したが、それ以上に「戸外運動の団体競技」に力を入れるという方針を打ち出した。まさにそこに赤木の教育理念の特色のひとつが示されていたといえよう。「青空のもとで友との連携」こそ学ぶところ多し、である。

戸外運動の団体競技ということであれば、まず挙げられるのはベースボールだ。明治五（一八七二）年にアメリカ人教師が第一大学区第一番中学（のちの東京大学）で生徒に初めて野球を教えたという一説のあるこの競技は、近代文学に大きな足跡を残した正岡子規が熱愛するなど、急速に広まった。プロが生まれるまではまだ間があったから、もっぱら学生野球が主流だ。大正四（一九一五）年には現在の高校野球

の前身である中等学校野球大会も開催され、いつそう熱は高まっていた。

ところが戸外運動の団体競技に重きをおいた湘南中学初代校長であるのに、そうした風潮のなかで野球には傾くことなく、なかなかその方針を変えなかった（硬式球部創設に踏み切ったのは戦後に退職する二年前）。なぜか。ひとつにはハード面の理由があったとされる。グラウンドである。

開校直後に関東大震災が発生し、校舎も運動場も建設に難航した。しかも校地はゆるやかな起伏をもつ丘である。校舎を建て、運動場を拓く、というのはこのままの地形ではむずかしい。そこで東南の丘を切り崩し、その土砂を西北に運び整地して校舎を建てるというプランとなった。運動場は土砂を移動し低くなった土地に拓くが、限りある条件から縦百六十四メートル、横七十三メートルというかなりの長方形である。

「これでは野球はむりだな」

赤木は判断したとされる。

それがグラウンド不備説。だが、それだけではなかった、むしろ「野球過熱」の副作用的な時代背景も大きかったのではないか、と見る向きもある。

大正末にはすでにブームともいえる人気スポーツとなった野球、その象徴ともいえるのは早慶戦だった。両校の応援団が小競り合いを繰り返す、不穏な空気が広がった。メディアはこれを批判した。学生の本分である学業をおろそかにし、なんたることか。第一高等学校校長の新渡戸稲造が、

「（野球とは）ベースを盗もうなどと目を配り神経を鋭くする遊びであり、米国人には適するが、英国人や独逸人には到底受け入れられない。（野球は）賤技なり、剛勇の気なし」

といった過激な（やや偏屈な）見解を新聞紙上に発表するに至った。英文で書かれた著書『武士道』が世界的にも高く評価されているその思想家の影響力は小さくなかった。新設中学の先頭に立つ初代校長としては看過できない。グラウンドのハード面もさることながら、これが赤木を野球から遠ざけたという推論の一説である。

いずれにしろ、初代校長は生徒たちに野球を奨励しなかった。かわりに奨励したのは英国のスポーツ、蹴球だった。人気沸騰の野球をあえて排したところがいかにも信念の選択めいて、

「湘南の校技はサッカー」

との定説へとつながったとみられるが、創立直後の記録『湘南十周年史』にその語は見当たらない。「日本一の学校」を標榜する初代校長として、校技に指定するかどうかの決め事ではなく、これから発展する新鮮な学生スポーツを広めたい一心というところが大きかったのではないか。

日本サッカー代表チームの 海外遠征での初得点

明治六（一八七三）年、英国のダグラス少佐以下三十余名の海軍軍人が築地の海軍兵学校寮に指導に来ていた。そのときに兵法とともにサッカーを教えたのが日本サッカーの起り点とされる。ロンドンとその近郊のクラブの代表によってフットボー

ル協会（FA）が組織されてから十年後のことだ。やがて、日英同盟が締結された明治三十五（一九〇二）年以後、英国人教師の指導もあって日本にサッカーが次第に植えられていく。

その日本サッカーが初めて臨んだ国際試合は東京芝浦の埋立地に設けられた仮設グラウンドでの第三回極東選手権大会である。大正六（一九一七）年のことだ。相手は中華民国、結果は0・5の惨敗だったが、それをきっかけに名古屋や大阪でも大会が開かれていき、大日本蹴球協会（日本サッカー協会の前身）が創立されたのは大正十（一九二一）年である。まさに神奈川県に湘南中学が新設されたその年だ。同年秋に、初めての全日本選手権大会も開催された。

こうした草創期の日本サッカーは完全なる学生スポーツであり、中心となったのは東京高等師範学校だった。初の国際大会、第三回極東選手権大会の出場メンバーも同校の選手たちだった。

師範学校とは明治初期から第二次大戦後の教育改革まで存続した教員養成機関である。フランスのエコール・ノルマルに由来する。明治四（一八七一）年に創設された文部省は教育制度も西洋化を図った。むろん体育教育も重要な位置を占める。海



外から指導者を招いて設けられたのが、生理学や解剖学も含めて総合的に体育を取り上げる教師養成機関「体操伝習所」だ。フットボールも科目に含まれていたこの体操伝習所を吸収したのが東京高等師範学校ということになる。したがって同校には早くから蹴球部がつくられ、対外試合や指導、そしてサッカー関係の外国書籍の翻訳などを行なっていた。いわば伝道者である。同校の卒業生を通じて日本にサッカーが広まったといってまちがいない。

湘南中学二回生の岩渕二郎が、はじめて目にしたその足技に目をまろくした新任数学教師、後藤基胤、ニックネーム・ポケ猿さんはまさにその東京高等師範学校の出身だった。初代校長の「野球ではなく蹴球」の意思は、この招聘が雄弁に語っているといえるだろう。

後藤は東京高等師範の蹴球部のキャプテンであり、日本サッカー草分け時代の日本代表選手だった。先述のように、日本初のサッカー国際試合は大正六(一九一七)年の第三回極東選手権大会だったが、後藤はそのときの選手ではない。その四年後、すなわち湘南中学が創立された年の五月、上海で開催された第五回極東選手権大

会から代表に選出された選手だ。この日本代表チームは史上初の海外遠征にも旅立った。戦ったのは二試合である。対フィリピン戦で1・3、対中華民国戦で0・4といずれも敗れた。が、その両試合ともにFWとしてフル出場した後藤選手は、対フィリピン戦でゴールネットを揺らしている。

「相手ゴールキーパーのミスキックを奪った後藤基胤選手が先制ゴールを決め……」と『日本サッカー史』にも記録されているように、キーパーのチョンボをすばしこく得点につなげたところは俊敏なポケットモンキーの面目躍如といえよう。このゴールが真正正銘、日本サッカー代表チーム海外遠征における初得点、金字塔である。

赤木校長の招きで数学教師として湘南中学に赴任した後藤だったが、すぐに強力な蹴球部を作り上げ、ビッグチームに仕立てあげた、というわけではなかった。部の本格的な活動は、下地をつくった後藤が一年三ヶ月後に湘南中学から去ったあとのこととなる。だが、短い期間に生徒たちに与えた英国の新しいスポーツ文化の、そのカルチャーショックは計り知れなかった。

「先生は休み時間や放課後、校庭でボールを扱って見せてくださいました。手を絶対に使わずに、みごとな技をご披露くださいました。たちまち全校生徒(一回生から



四回生）たちは先生の妙技に魅せられていました」

と証言するのは、のちに本格的に活動を始める湘南サッカー部の主将も務めた三回生中村正義である。

「まだ、部という形態はできていませんでしたが、球を蹴るグループが校庭のあちこちに出現し始めました」

湘南サッカーの萌芽だ。

「ア式蹴球」

という語は、ポケ猿さんのまぶしい存在と相まって、胸をわくわくさせる新分野を予感させたにちがいない。

一八六三年、日本では江戸末期にロンドンで発足したフットボール協会（FA）、そのアソシエーションで確立された競技という意で、ア式蹴球。フットボールの名で兄弟でもあるラグビーとの線引きがまだ曖昧だった競技、すなわち「サッカー」を定義し、規定した語といえるだろう。

屈辱の0・9から 惜敗の0・1へ

「後藤先生から、サッカーについては白紙の私どもに、実技と理論を教えていただくことになりました。私はしばらく傍観者で自分なりに球を追ひ、一瞬足でとどめ蹴っているうちに、グループの一員になりたいと思うようになりました。そして、息切れもせずボールをドリブルし、パスし、パスを受けキックする楽しみを味わうようになりました。一人だけの時は、長いコンクリートのスタンドの壁にたたきつけては、跳ね返ってくるボールを蹴るという時間も楽しいものでした」

先述の中村正義の証言だ。

湘南サッカー部の創部は学校創立とほぼ同時ということになる。第一回生の蹴球



部のメンバーの一人が、のちに最高裁判事を七年務めた天野武一（初代OB会会長）である。が、当初は現代の感覚という部活動とは隔たりがあった。この競技の実態についてよく分からず、しかしおおいに関心があった生徒たちが放課後、思い思いにボールを蹴っていたというのが実情だろう。そこへ、満を持してポケ猿さんの登場だった。

「私よりも一級下の岩渕二郎君たちは、教室でも運動場でもこの先生から教えを受けた最初の代でした」

と天野が回想するように、後藤の薫陶をじかに受けたのは二回生以降だった。練習らしい練習が始まる。他校相手に練習試合なども実現する。生徒のなかで中心となったのは岩渕だった。

正式にチームを結成し、公式戦に参戦したのを事実上の湘南サッカーのスタートとするなら、それは大正十四（一九二五）年の秋である。すでに後藤は学習院初等科に転勤になっており、率いる教師は箱根駅伝のランナーでもあった金持嘉一に引き継がれていた。記念すべき初めての公式戦は、横浜第三中学校（現・横浜緑ヶ丘高校）

のグラウンドで開催された第一回県下中等学校ア式蹴球大会だ。結果はさんざんだった。初戦の相手は神奈川県の中学校蹴球部というもののパイオニアだった横浜第二中学校（現・横浜翠風高校）、激しい雨のあとでグラウンドは泥濘である。そうしたコンディションでありながら相手に面白いようにボールを回され、終わってみれば0・9の屈辱の大敗。あっけなく初戦敗退である。

「慥然としたね」

そのチームのキャプテンを務めた岩渕が、後年そう洩らしたように、完膚なきまでの叩きのめされ方であったが、それがバネになった。放課後集まってくるメンバーたちの誰ひとり辞めると言い出さなかった。

翌年、大正十五（一九二六）年には神奈川県中等学校ア式蹴球連盟が組織され、第一回の県下中学リーグ戦が開かれた。参加校は、鎌倉師範、浅野中学、横浜二中、関東学院、横浜三中、神奈川工業、鎌倉中学（現・鎌倉学園）、そして湘南中学の八校である。湘南は粘り強い守備と、岩渕選手を中心とした果敢な攻めによって確実に勝利をおさめていく。リーグ戦上位二校の決勝戦となった。相手はまたしても横浜二中である。健闘むなしく敗れたが、スコアは0・1の惜敗だ。胸を張っていい準

優勝であった。

新人を勧誘し五ヶ年計画 そして東大生コーチ

その年の暮れ、大正天皇が崩御。二十五歳の皇太子が第二百二十四代の天皇として践祚し、新元号は昭和と改まった。「激動の」とのちに形容される昭和時代の幕開けである。

県下リーグ戦準優勝を境に、湘南サッカーはステージをひとつ上げることになった。選手の意識に大きな変化が生まれたのだ。六回生藤田得利はこう回想する。

「入学早々の授業の休み時間に、ひとりの先輩が教室にやってきました」

真っ黒に日焼けし、鼻も目も唇もすべて大きい、いかつい顔の男だった。身体も岩のような、おっかない岩渕二郎である。学年でいえば五年生の猛者であった彼は、身をすくめる後輩たちを前にして響きわたる胴間声でこう言った。

「このなかに小学校で足の速かった者、運動選手だった者はいるか。いたら、みんな蹴球部に入れ」

迫力に満ちていたが、反発をおぼえる強権的な感じはなかった。ふしぎな爽やかさだった。ほとんどの新入生が同様の感想を持ったのだろう、蹴球部入部者はおどろくほど多かった。岩渕をリーダーとする、

「湘南蹴球部強化五ヶ年計画」

の、これが皮切りだった。速成栽培では実のある力は得られない。じっくりと「勝てるチーム」を作り上げよう、というその計画は実行に移されていく。

が、むろんすぐに結果が出てくるほど甘くはない。そこそこに勝ちをおさめるようになるが、横浜二中にはことごとく弾き返される。岩渕を引き継いだ中村（CF）がキャプテンを務めた時代もだめ。次の高梨（CH）の時代もあり。このころから、湘南サッカーの直近の目標ははっきりと定まった。打倒横浜二中である。つまり神奈

川県制覇だ。

そうしたなか先輩も動いた。第一回生の天野武一である。湘南中学から旧制静岡高校へ、さらに東京大学へと進学した天野は。サッカー部に所属していなかったにもかかわらず、先輩である二人の選手にこう申し出たのだ。

「私の母校のチームを指導していただけませんか」

当時、東京帝国大学ア式蹴球部すなわち東大サッカーは、ア式蹴球東京コレッジリーグ(現・関東大学サッカーリーグ戦)で六連覇を果たす黄金時代だった。その中心選手であった名フオワード若林竹雄、そして名ハーフ野澤正雄という二人の現役選手が天野の要請を快諾した。コーチとして二年間定期的に訪れることになったのだ。熱意と誠実のかたまりのような青年天野武一の心意気をがっちり受け止めたのであろう。

二人は東大選手であるだけでなく、日本代表選手でもあった。湘南中学の選手たちのカルチャーショックはただものではなかった。ポケ猿さん後藤基胤に受けたショックが「新スポーツの実態」にじかに触れたことへのショックだったとすれば、二人のコーチからのショックは「最新戦術論」に関する、まさに目からウロコだった。

2対1のトライアングルパスの基本と練習方法は若林から、3対2のディフェンス連係プレイの理論と実践は野澤から伝授された。

「それまでは、結局は個人プレイの寄せ集めでした」

先述の藤田が回想するように、なんといっても局地戦のスキルでしかなかったものを組織的な発想によるサッカーへと脱皮させたのは二人のコーチだった。そしてそれは長く湘南サッカーの技術遺産となっていく。

さらに環境もよいほうに作用した。起伏ある丘に設けられた学校だったために、校舎は上に、そして長方形のグラウンドは低地に拓かざるを得なかったことはすでに述べたが、それが幸いしたのだ。坂の上から横位置で練習ゲームを見る。俯瞰で全体の動きを見る習慣で、戦術眼が鍛えられることになった。

サッカーの質が変わり、岩渕が胴間声で勧誘した新入生たちの身体もぐんと大きくなる。その流れは、ようやく結果に表われていった。昭和四(一九二九)年、第四回の秋のリーグ戦では連戦連勝を重ねていく。湘南の組織プレイは鮮やかで、相手チームは翻弄される。



決勝は十一月下旬に行われた。対戦相手はまたしても横浜二中だ。寒い風雨のなかの試合となる。前半風下の湘南は1点を失う。そして余りの寒気と強い風雨のため前半で試合はストップ、大会役員は後日に後半のみ戦うという珍しい変則行程を選択した。数日後の後半戦は両校得点できずタイムアップ。あまりにも厚い壁、横浜二中にまたしても神奈川制覇を阻まれた。

その年の十月、世界の経済が大揺れする。「暗黒の木曜日」と形容される十月二十四日、米国ニューヨークのウォール街が株式市場始まって以来という株価の大暴落に見舞われた。金融界は絶望的な狂乱に陥り、あつというまに世界恐慌へなだれこんだ。日本も大波を受け、深刻なデフレを呈した。不穏な昭和時代の子感である。

東京日日新聞の豆記事 「新進湘南勝つ」

第一回サッカー世界選手権大会(ワールドカップ)が人口わずか百五十万人(当時)の南米大陸最小の国ウルグアイで開催されたのは昭和五(一九三〇)年である。

参加国は十三。ヨーロッパ勢は十三日間の船旅を経てやってきた。フランス対メキシコの第一戦から熱戦の火蓋が切られ、第一組で勝ち残ったアルゼンチンと第三組を勝ち上がった主催国のウルグアイの決勝戦。結果は4・2でウルグアイが大会第一回の優勝に輝く。首都モンテビデオでは夜を徹して祝勝の大騒ぎが続き、ラプラタ川の対岸、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスではウルグアイ領事館が襲われ、暴動になる。両国の対立は一時的に国交断絶にまで激化し、「ラプラタ川のサッカー戦争」とまで呼ばれた。

こうした熱い世界の光景から比べれば、極東のサッカー未開国の、関東地区の一県の、中学生大会の出来事ではあったが、その第一回ワールドカップと同じ年の昭和五(一九三〇)年六月十七日の東京日日新聞(現・毎日新聞)には小さな記事が載った。



「新進湘南勝つ」県下蹴球大会決勝戦

との見出しで、準決勝で湘南中学がとうとう宿敵横浜二中を3・1で破り、午後三時からの決勝戦に臨んだと報じる。対するは鎌倉師範。

「前半四分湘中まず一点を先取し、二十一分師範一点を酬い同点で前半を終わる。後半湘中はFW間のショートパスを主とする連絡とCHの奮闘により四分および二十分に加点。師範は長蹴りを繰り返すのみで好機を作り得ず、遂に三対一で新進湘南中学の優勝となった」

まさに、五ヶ年計画の五年目の快挙である。

チームの主将は先述の六回生藤田得利。先輩の岩渕から眼光鋭く蹴球部勧誘を受けた世代が花開いた。

「優勝杯を受ける藤田主将、あとにつづく全選手みな感激の涙にくれた」

と『湘南五十年史』にあるが、この達成感が湘南サッカーの礎のひとつとなったことはまちがいない。





※後藤基胤先生は前列左端



日本代表 海外初遠征

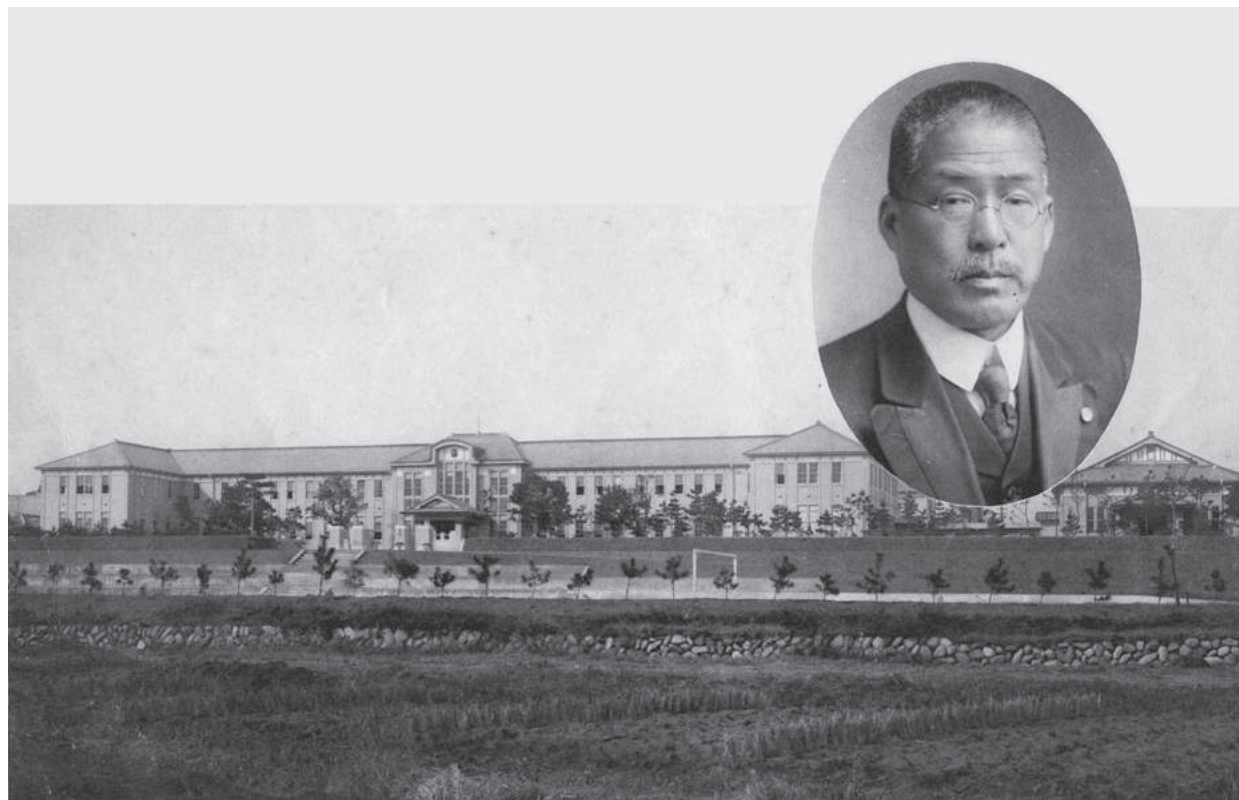
1921年（大正10年）上海で第5回極東選手権が行われ、関東予選と全国予選を勝ち抜いた「全関東蹴球団」（関東選抜チーム）は、日本代表として初の海外遠征を果たします。

清水芳介、露木松雄、星野秀臣、大新田勝海、守屋英文、野津謙、大橋準、後藤基胤、安藤弘平、後藤素、高橋實、森悌次郎、井染道夫、（佐々木等 マネージャー）

5月30日 1-3 フィリピン

6月 1日 0-4 中華民国

日本代表に名を連ねる後藤基胤先生（JFA所蔵）



開校時の校舎全景と赤木愛太郎初代校長



創部期のメンバー [大正15（1926）年]



県下初優勝 [昭和5（1930）年] メンバーと新聞記事



2回生メンバー（岩淵二郎はボールの前）



国破れた翌年、 全国を制覇

昭和六（一九三一）年～昭和二二（一九四六）年



優勝キャプテンが OBコーチとして率いる

昭和六（一九三二）年九月、中国遼寧省の奉天（現在の瀋陽）駅北東にある柳条湖付近で満鉄の線路が爆破された。線路と枕木の一部が破壊されただけで被害はほとんどなかった。しかし、この柳条湖事件をきっかけに日本は戦闘に入る。満州事変だ。それは日中戦争へとつづく十五年戦争という泥沼への突入だった。

不吉な足音が始まっていたわけだが、情報の多くが知らされていなかった国内の空気は必ずしも不穏ではなかった。むしろ高揚していた。藤沢市の史料にも、「出征の見送りは盛大で、藤沢、辻堂、茅ヶ崎のプラットフォームは人で溢れた」と残され

ている。

湘南中学のグラウンドも明朗であり、清らかだった。蹴球部の練習は声もよく出て、ボールを蹴る「ボムッ」という力感ある音が丘の上の空に昇った。

前年の六月に待望の神奈川県大会初優勝を果たしてからは、チーム全体に自信が漂ってくる。同年秋のリーグ戦も堂々の勝ちっぷりで優勝した。

県大会初優勝の表彰式で感涙のトロフィーを受けた主将のCH藤田得利は卒業する。そして受験浪人の立場となった。その藤田が、浪人暮らしのかたわら若きコーチを引き受ける。それには「寄宿舎予備校」の存在が大きかった。

開校当時の湘南中学には丘の上の校舎のほずれに小規模の寄宿舎があった。だが途中移転などの事情以外、多くの生徒が近隣に住み、利用者は少なかった。そのため昭和五（一九三〇）年に閉鎖となる。閉鎖とはなったが、施設そのものは解体されなかった。二階を図書室、一階を理化工作室に改造し、用途が変遷していくことになる。その変遷のひとつとなったのは、浪人生の補習科の教室である。それは大正十五（一九二六）年、第一回生の卒業と同時に誕生した卒業生の同窓会組織・湘友会の主催というかたちをとったものだった。卒業直後に進学できず受験勉強をつづ

ける、いわゆる浪人はいまま変わらない実態だったが、彼らにとって東京の予備校に通うことや自宅で勉強する（宅浪）ことも難点が多かった。そこで湘友会が動いて元寄宿舎を活用した補習科を設置した。昭和二年度からのことだ。毎日四時間の授業、各科とも現職の教師が担当する。すなわち「寄宿舎予備校」だ。藤田もこれを活用した一人だった。その進み行きは、本人はもとよりサッカー部の後輩にとっても有益だった。勉強する予備校は丘の上、サッカーを指導するグラウンドは丘の下。職住接近、いや勉強接近である。まさにコーチにはもってこいの環境だった。

二日がかりの決勝戦 ついに力尽きる

当時の指導体制はどうだったか。

中心はやはり岩渕二郎である。湘南中学卒業後、横浜高等商業学校（現・横浜国立大学）に進み、むろんサッカーをつづけ、センス抜群で、敵の守備陣を大いに悩ませる名FWとして活躍する。横浜高商卒業後、森永製菓に就職し、多忙となるが、折を見ては湘南中学のグラウンドに現われた。後輩の選手たちは、

「あれがうわさの岩渕先輩、ガンブチだ。うわさどおり目がぎょろつとして、いかつい顔だなあ」

とひそかに囁き合った。OBの巨頭といった存在で、立場としては総監督にあたるといえよう。日常的な現場指導者は藤田を皮切りに、基本的に後輩OBが務めていくようになる。

浪人生だった藤田コーチの指導はすぐに結果を出した。昭和六（一九三二）年、満州事変直前の夏、全国大会に出場する。学生スポーツの全国大会は野球もそうだったが、現在のように統一されておらず、乱立していた。ここでのいう全国大会は「東京文理大学主催全国中等学校蹴球大会」（一九二四～一九三二まで開催）である。東京文理大とは、東京高等師範学校の専攻科を改組して発足した旧制の官立大学。

「おまえたちは強い。そう信じろ」

全国大会を前に藤田コーチにそう鼓舞された選手たちは、いいゲームを重ねていく。順調に勝ち上がっていき、いよいよ決勝戦となった。対戦相手は、静岡県の大田中学（現・藤枝東高校）である。正確なパスワークを主体とするという意味で、似たようなタイプのチーム同士の戦いとなった。お互いに堅い守備により失点を許さず、0・0のまま延長戦に突入。さらに再延長となっても点が入らない。

主催者は異例の決断を下した。日を改めての再試合だ。翌日おこなわれたその試合もお互いに一点があまりにも遠い。また延長。そこで、やや疲れの見た湘南中は、痛恨の一発を食らう。エースのFWに豪快に蹴り込まれたクリーンシュートだった。

相手チーム志太中のその選手は、松永行（あきら）。彼はその五年後、東京高等師範在学中に日本代表選手として「ヒトラーのオリンピック」と呼ばれたベルリンオリンピックに出場した。第一試合はスウェーデン戦。優勝候補の一角であり、大方の予想は名もなき極東の国のかなう相手ではないとされていた。そのとおり、前半は2・0、このまま惨敗に転がり落ちるかと思われた日本は、不屈の攻撃で二点を返す。甘く見ていたに違いないスウェーデンにありありと動揺が見られる。後半四十分、

縦パスを受けたRWの松永が飛びこみ、シュート。やや蹴り損ね気味のボールはキーパーの股間を抜ける。そして、そのままタイムアップ。スウェーデンの実況中継アナウンサーは悲鳴をあげた。

まさに、「ベルリンの奇跡」の、その決勝点をあげた選手の中学時代に、同じように試合を決める貴重なゴールを決められた湘南中チーム。無念の準優勝だったが、延長、再延長、再試合、延長という二日がかりの決勝戦は中学サッカー史上、後にも先にもこの例しかない。そうした得がたい経験は有形無形の力となって、のちに伝えられていったにちがいない。以後数年間、神奈川県下の中学サッカーで湘南中は名実ともに常勝チームの地位を占めた。

東京帝国大学に進学した藤田は、浪人中の一年間を終えいったん後輩指導を離れた。のちに東大在学中の三年間（昭和十一年から十三年）、ふたたびコーチとなり湘南サッカー第一期黄金時代の土台を築いた。後輩の選手たちが藤田コーチにあたえたニックネームは、ライオンである。

「根はとても優しい人でしたが、とにかく厳しく、震えあがるほど怖かったので、

ライオン」

大学在学中のライオンに指導を受けた十五回生の大埜正雄はそう回想する。創立間もない湘南中学に「これぞア式蹴球」の実体を伝授した後藤基胤がポケ猿だったところからすると、モンキーからライオンへというニックネームの変貌は、進化というべきか隔世の感というべきか。少なくともチームが勝利に対して貪欲になり始めていたことだけは確かだろう。

ビルマから神戸へ 神戸から湘南へ

神奈川県下で湘南中学蹴球部がずっと目標にし、やがて宿敵でありつづけた学校

といえば横浜二中であった。いつしか追いつき、次第にやや前に出て追われる側になっていった。かわって昭和初期のそのころからチームみんなが意識していたターゲットは全国レベルとなっていた。神戸一中（現・兵庫県立神戸高校）である。神戸一中は、大正十四（一九二五）年の第八回日本フットボール優勝大会で、それまでの七回、優勝を独り占めしてきた御影師範を破り初優勝する。

日本フットボール優勝大会について述べておこう。第一回はフットではなく「日本フットボール優勝大会」。同大会は大阪毎日新聞主催により大正七（一九一八）年に阪急豊中運動場で開催された。大阪毎日新聞が主催したのは、その三年前に大阪朝日新聞が全国中等学校優勝野球大会（現・全国高等学校野球選手権大会）を開催しており、そのライバル紙の企画に対抗するねらいがあったとされる。大会名のとおり、アソシエーション式とラグビー式の両種のフットボール競技が対象だ。それぞれ現在の全国高等学校サッカー選手権大会、全国高等学校ラグビーフットボール大会に引き継がれ、現存する最古のサッカー、ラグビー大会となる。というのは、乱立する学生の全国大会に文部省が規制をかけたからである。規制の要因は学生野球だった。急激な人気で全国大会が乱立し、金権もからむなどの不透明さが目立ちはじめ、

学生野球の興業化、商業化を憂う世論が強くなった。それを受け、昭和七（一九三二）年、文部省からの具体的な規制が発せられることになる。野球ばかりでなく、サッカーにも準じた見直しが課せられた。結果、湘南中学が静岡の志太中学と「二日がかりの決勝戦」という死闘を演じた東京文理大学主催全国中等学校蹴球大会もこの年をもって中止となった。やがて全国大会は日本フットボール大会に集約されていくことになる。

さて、その第一回日本フットボール優勝大会は、師範学校と旧制中学がほとんど参加して開かれた。「日本」という名が冠せられていたが、サッカーの参加校はすべて近畿地区。一府県から複数校が出場できるオープン戦だった。

先述のように第一回から第七回まで優勝を独占してきたのは御影師範。向かうところ敵なしのこのチームに初めて土をつけたのが第八回大会の神戸一中だった。この次の第九回大会から、全国中等学校優勝野球大会と同じように、全国を対象に地区予選を行い、地区大会優勝校が本大会で全国優勝を争う、実質的な全国選手権となり、大会名称も全国中等学校蹴球大会と改められた。

神戸一中の快進撃が始まった。昭和五（一九三〇）年、昭和八（一九三三）年、昭

和十（一九三五）年、昭和十三（一九三八）年と戦前の同大会優勝の指定席を確保していた感がある。全国に名を轟かせる神戸一中を湘南中学蹴球部がターゲットにしたことは当然といえよう。

じつはこの神戸一中のサッカーと湘南中のサッカーにふしぎな縁があった。それには、一人の東洋人のことから辿らなければならない。兵庫県サッカー史ウェブサイトにこうある。

「この時期の兵庫サッカーはタイトル獲得だけでなく、技術、戦術や選手育成、チーム強化について全国に一步先んじていた。その先端が神戸一中だった。大正十二（一九二三）年にビルマ（現・ミャンマー）人のチョウ・デイン氏の半日の指導を受けて技術や試合運びの疑問点を解明した」

東京高等工業学校（現・東京工業大学）紡織科に留学中だったチョウ・デインを、サッカーの名伯楽として全国的に有名にさせた出来事があった。きっかけは彼が早稲田大学のグラウンドで走り高跳びのトレーニングに励んでいるときだった。たまたま早稲田高等学院サッカー部の練習を見かけ、成り行きで指導を始めることになる。

当時のビルマはインドに駐在する英国総督府の管轄下に置かれていた。インドは

英国の影響でアジアのなかでは香港と並んでサッカー先進国だった。チョウ・デインにはすなわち、英国仕込みのサッカーの血が流れていた。

彼の指導を受けた早稲田高等学院がみるみる戦果をあげたことで、このビルマからの留学生の名が一気に上がったのだ。ところが、大正十二（一九二三）年に関東大震災が起き、東京高等工業学校は倒壊、チョウ・デインは通学不能になった。ならば、と各方面から引き合いもあったことだし、全国を巡るサッカーコーチ行脚を始めることになった。神戸一中にきたのは、その関東大震災直後のことである。ただし、半日だけ。招いたのは御影師範で、そこでのオプションのように短い指導を受けたのだ。が、これが神戸一中に開眼をもたらす。トライアングルパスだ。

学制上、年齢が二歳上の体格的に大きな相手である御影師範に、神戸一中はずっと歯が立たなかった。その課題に対してビルマの名伯楽が教えたのは、「小が大を制する」ための戦法だった。蹴り合いではなく、くるくる回すノートラップのパスである。この練習に磨きをかけ、とうとう二年後の第八回日本フットボール優勝大会で打倒御影師範を達成することになる。

この神戸一中のショートパスをDNAとして身につけた名選手は多いが、神戸一

中卒業生で東京帝国大学に進んだある学生もその一人だった。彼は、当時黄金時代だった東大ア式蹴球部のフォワードとして欠かせぬ戦力となった。神戸一中のOBである彼に、彼の母校ではなく自分の母校の指導を要請したのが、湘南中学第一回生で東大に進んだ天野武一だ。そう、神戸一中OBの東大生とは若林竹雄である。名ハーフの野澤正雄とともに、黎明期の湘南中学蹴球部に二年間だけとはいえ指導に訪れた名選手だ。長く技術財産となっていた湘南中のショートパスは、ビルマの留学生から兵庫を経て神奈川に伝播したともいえるだろう。

全国選手権大会

代表権をはじめて獲得



当時の湘南中の戦歴をたどろう。

昭和十（一九三三）年、秋の県リーグ（中等学校蹴球リーグ戦）に出場し、順調に勝ち上がって関東学院と決勝戦を戦う。1・1の引き分け。得失点差により湘南中の優勝となり、県代表として同年の師走の押しつまった日に明治神宮球場で開催された関東府県代表対抗試合への出場権を得た。この大会は、関東蹴球協会主催、東京朝日新聞後援によって昭和八（一九三三）年十二月から始まったもので、関東の一府六県と山梨県で行われた地区予選を勝ち抜いた代表八校の参加によって開催された（中学校と師範学校の混合大会）。湘南中にとっては県代表として出場したのは同大会が初めて。

翌昭和十一（一九三六）年からは、既述のように東大に進学した藤田得利が三年間コーチを務めることになる。その最初の年に成果が出た。県蹴球連盟主催の春のトーナメント（県大会）で、そのころつねに競り合っていたライバル鎌倉師範を3・2で破り優勝。昭和五（一九三〇）年の第一回大会に果たして以来の、久々の栄冠であった。報じる『湘中だより』にこう記されている。

「小粒揃いの本校選手よく鎌師（鎌倉師範）のイレブンを廻して戦うこと一時間半、

応援団の絶叫、先輩岩渕・天野・藤田君らの指導が奏効して最後のとどめを差す」

このあと、夏に甲子園で行なわれる全国中等学校蹴球大会の予選である山神静大会に駒を進めた。

山神静大会とは、いうまでもなく地区大会名だ。現在の全国高校サッカー選手権大会の前身である全国中等学校蹴球大会は既述の日本フットボール大会。正しくいえば第九回からの大会ということになる。第一回から八回までは関西地区からのみの参加で、しかも府県予選なしのオープン参加。第九回から初めて全国八地区の八代表によるトーナメント戦となった。昭和十一（一九三六）年に制定されたのが山梨県・神奈川県・静岡県を一地区とした山神静地区というわけである。

その、初めてとなる山神静大会に湘南中は神奈川代表として全国大会のキップをかけて出場した。初戦で山梨県の甲府中（現・甲府第一高校）を破り、準決勝では五年前に「二日間の死闘」のすえ惜敗した相手、静岡県代表の志太中を退け、決勝で山梨県の韮崎中（現・韮崎高校）に敗れたが、実力の差はほとんどなかった。この試合の語り草は、「ゴールキーパーの骨折」だった。準決勝でゴールキーパーの園田嘉高（十二回生）は腕を骨折していた。チームメイトである同期の増田禮二は、こう振り



返る。

「ところが、彼はどうしても決勝戦に出ると言ってみんなが止めるのに言うことを聞きません。結局、出場してしまうのですね。彼の闘志に奮い立ったわれわれは、どんなことがあってもわれらのゴールキーパーにボールが行かないよう懸命のガードをしたものでした」

結果として敗戦だが、むろんその要因をゴールキーパーの負傷にあげる選手は一人もいなかった。

すでに、神奈川県では不動の覇者の地位を占める。同年の秋に開かれた県下リーグ戦では危なげなく勝ち上がり、決勝戦で小田原中（現・小田原高）を2・1で下し、三回連覇を達成したのだが、この試合には「ゴールキーパー骨折事件」の後日譚がある。山神静大会で味方の負傷兵ゴールキーパーへボールが行かないよう身体を張って防いだ思い出を語った増田は、貴重な決勝点を入れた選手だった。その得点というのが、

「ゴール前に上がったセンタリングをキーパーと競り、というよりもキーパーに体当

たりし、ボールごと自分がゴールネットに突き刺さりました」

キーパーチャージを取られないのがふしぎ、ともいえようが、骨折をおして出場した園田ゴールキーパーのあの数カ月前の気魄がまだそのグラウンドに生きていて、勝負の神を左右させた得点でもあったのだろう。

「そうだ、増田、あの心意気だ」

と試合後、激賞したのは香川幹一郎長だった。

学生スポーツにつきものの、部長・監督・コーチの存在だが、まだこのころはその三役がはつきり仕分けられていたわけではなかった。湘南中サッカー部も同様で、三役をひとりで兼任していたり、二役しかいなかったりで過ぎていた。初代部長は、英語科・奥園佐吉、博物科・佐藤尚勝の二人の教諭の名が残されており、複数で顧問をこなしていたという証言もある。二代目となると明確に後藤基胤（第一章で既述の「ポケ猿さん」）が三役を兼任する。三代目は、教頭の金持嘉一（県下初優勝時の部長。監督コーチはOBの岩渕二郎）。そして四代目を引き継いだのが地理科の教諭として赴任してきた香川幹一だった。自他ともに認めるサッカー狂だが、専門の地理学でも著名で、

「日本や世界中のどんな都市や田舎町であっても、問われると即座にすらすらと黒板に地図をお書きになられ、われわれを驚嘆させた先生でした」

その授業を受け、卒業後、同部長時代にコーチを引き受けた六回生の藤田得利がそう振り返るように、地誌教授法の理論では昭和期の第一人者だった。

熱血の地理学者でありサッカー狂の香川幹一が部長、総監督がガンプチ岩渕二郎、そしてOBのコーチという体制が昭和十年代から戦後まで続いた。

昭和十二（一九三七）年春の合宿に、藤田得利コーチは東大の学友である種田孝一を客員コーチとして招いた。種田は前年のベルリンオリンピックにも出場し、あの「ベルリンの奇跡」スウェーデンを番狂わせで破った試合もCH（センターハーフ）を務め、スウェーデンの猛攻をしのいだ一人だった。その直接の指導は現役中学生たちに大きな刺激を与えた。

「インステップキックのあざやかさに目を瞠りました。驚きと憧れをおぼえました」と、湘南中学二年生（春合宿を終えれば三年生に進級）であった大埜正雄は回想する。コーチをはじめ、OBのみんなが強調する基礎練習・反復練習の重要性の意

味をあらためて実感させられる思いだった。のちにこの中学生は藤田コーチや客員の種田コーチと同じように東大へ進み、サッカーをつづけ、日本代表選手にまでなったのだが、同年（昭和十二年）夏、その大埜正雄が三年生という下級生ながらFWのレギュラーとなったチームは、またひとつ歴史の新しいページを刻むことになる。

春季トーナメントで順調に勝ち上がり、七月の山神静大会に二年連続で臨んだ。会場は甲府の山梨高等工業グラウンド。一回戦で浜松一中（現・静岡県立浜松北高校）を1・0で破り、準決勝で葦崎中と対戦する。CHのキャプテン小熊幸雄のきれいなフリーキックによる二得点などもあって3・1で撃破。葦崎中にはこれが初勝利だった。そして、決勝戦の相手は静岡中（現・静岡県立静岡高校）。前半に一点を先行されたが、後半、またしても小熊がロングシュートをゴール隅に決め、そのまま延長戦に突入。延長戦で湘南中はさらに貴重な一点を決め、そのまま試合終了となる。こうして、甲子園で行なわれる大阪毎日新聞主催の全国中学校蹴球選手権大会の代表権をはじめて獲得した。

大埜正雄の回顧である。

「当時は今とちがって、アソシエーションフットボールというしており、FWは固定さ

れたW字型の布陣。安保君（十五回生安保隆文）がウイング、私がインナー、二人とも未熟だったから二人で一人に対しました。つまり二人で一途にトライアングルパスにより相手を抜く。うまくいったりいかなかったり、少しでも味方がボールを持っている時間を長くするか、あるいは相手ゴールに少しでも近づく手助けをするのが二人の役割でした。四年生五年生の上級生ががんばってくれたので、私たちは端のほうでごちやごちややりました」

その活躍を報じる同年十二月発行の『湘中だより』も、高揚した書きっぷりの記事をこう締めくくる。

「湘中得意のパスワークは微に入り細を穿って既に全日本愛球家の認めるところとなったのだ。西に神戸一中・広島一中あり、東に湘中あり、先輩、嘗胆の歴史はここに名門湘南中の名をなさしめた。これが本年の収穫である」

そして、はじめての甲子園。

すばらしい芝生のグラウンドだった。「そのあと多くのグラウンドを経験したが、あれほど見事なグラウンドでボールを蹴ったことはなかった」と、大埜が振り返る晴れ舞台だったが、一回戦は勝ち上がったものの、二回戦で強豪埼玉師範に1・5の大

敗。無念の結果となる。しかし歓喜の頂上は先送り、この借りは遠からず返す、と選手たちに涙はなかった。その年の優勝校は埼玉師範。

チームメイトたちの記憶に残っているのは、キャプテン小熊正雄のシュートだった。山神静大会で葦崎中の息の根を止めた二本のフリーキックも、決勝戦の起死回生のロングシュートも、そして、全国選手権大会で苦杯を喫した埼玉師範戦で一矢を報いたのも、すべて小熊のキックだった。これは、神奈川県下はもちろんのこと山神静でも、そして全国でも注目を浴びた。一級下の十七回生、ハーフバック菅原留意はこう証言する。

「小熊さんの、あまりにも有名な、日本一といわれたブレースキックをこの目で見たときは度胆を抜かれました。ライナーで、ボールの縫い目のはっきりわかるほどまったく回転せず、かすかに横に揺れながら飛んでくる。あたかも野球のフォークボールのごとし。まさにキーパー泣かせでした」

いまやおなじみの無回転シュートだろう。二〇〇六年の新構造ボールの導入以来、世界的に注目されるようになった技術だが、新ボール登場前に、世界ではじめて編み出したのはブラジルの通称ジジことバウジール・ペレイラ選手（一九二八―

二〇〇一）であるとされる。少年時代にストリートサッカーで遊んでいるとき右足に大けがを負ったジジは、その足をかばうために変わったキックを身につけた。「枯れ葉」と名づけられたそのキックは、揺れながら急激に落ちる球筋だった。公式ゲームで披露したのは一九四九年、昭和でいえば二十四年とされる。小熊正雄がフリーキックやロングシュートで周囲を驚かせていたのは昭和十二年である。「ワールドサッカー誌」で二十世紀の偉大なサッカー選手一〇〇人に選ばれたブラジルのジジよりも十年以上も前に、サッカー後発国の神奈川県の中学生在が独自に発明していた無回転キックだったのだ。

不穏な世相のなか 年間総得点百十一・失点八

こうして昭和十二年は、湘南中サッカー第一期黄金時代の土台となった年といえよう。神奈川県では向かうところ敵なし、関東や全国の大会の代表の常連の地位を確保していた。新聞記事でも、チーム・プロフィールを紹介するこんな記事が書かれた。朝日新聞（昭和十二年四月）である。

「神奈川県、横浜三中の先達を凌いで球豪揺籃の庭といわれた湘南中学は開校以来蹴球が校技として採用され蹴球学校の観を呈している。八百余の在校生が蹴球選手であるばかりか、四十余名の教職員も蹴球選手である」

言葉つきがいかに大時代で、「八百余の在校生が蹴球選手であるばかりか四十余名の教職員も蹴球選手」となると白髪三千丈のたぐいではあるが、並々ならぬ熱気の形容ということだろう。赤木校長も正式に宣言したことなかった「蹴球が校技」については、これがメディアに登場したはじめての表現だった。

時代の不穏は増していた。

満州事変の二年後の昭和八（一九三三年）、ジュネーブで開かれた国際連盟臨時

総会で「満州国の不承認」などを内容とした対日勧告案が採択され、これに抗議した日本の首席全権松岡洋右が議場から退場。翌月に日本の連盟脱退が正式に決まった。そして、昭和十二（一九三七）年七月、北京南西六キロメートル、永定河に架かる盧溝橋付近で、日本軍の一隊の演習中に「発砲事件」が起きた。これを契機に日中全面戦争へ突入する。戦局は日を追うごとに深刻化し、当然のことながら学校にも影響が及んでいく。

盧溝橋事件まもなく、神奈川県学務部長は各学校に通牒を発した。教職にあるものはその重責を自覚し、職務に精励すべし、修身の授業や朝礼の際には時局に関する講話を行なうべし、心身鍛錬運動を推進すべし、生徒に銃後奉仕を奨励すべし、などが指示される。政府は国民精神総動員運動を起こし、学校における指導項目にも校外活動として銃後援会の強化、勤労奉仕の実践的訓練などを奨励した。これにともない、湘南中学でもいくつかの施策をとる。横浜貿易新報（現・神奈川新聞）昭和十三（一九三八）年六月には「湘中も日の丸弁当に」という見出しでこう報じられた。

「湘南中学校では毎週一回国旗掲揚、毎日朝礼の際ラヂオ体操を行ひ体育向上に

努めてゐるが、貯蓄週間として毎週木曜日を日の丸弁当日と決め、全職員生徒がこれを実行し、月五十銭の愛国貯金を行ふ事になった。」

さらにその年の十一月の同紙の記事では、「見よ若人の意気」との見出しでこう報じられる。

「酷寒零下戦線の勇士を思へば忍ぶ処まで忍べと夏服着用を奨励して居る藤沢町の湘南中学校では、物資節約の文部省からの達しで洋服の新調を禁ぜられて居るので従来からある夏服の着用を勧めたところ、各級共北満の勇士を忍べばと非常な張り切りで職員以下全校生徒夏服で颯爽と登校して居る。右につき、赤木校長は語る。

『この企ては生徒の心身と鍛錬と物資節約からで現在のところ八百六十名の生徒中約一割が冬服を着用してゐるが、これは風邪その他健康体でないものが着てゐますがこの辺は湘南の健康地でもあるから我慢できる所まで夏服を着用させる心算です』

こうして戦雲が彼方の空に、はつきりと濃く漂ってきた世相だったが、いっぽうで日本のスポーツ界の黎明期でもあった。昭和十一（一九三六）年のベルリンオリンピックで、水泳ではあの「前畑ガンバレ前畑ガンバレ！」の絶叫アナウンスで語り継がれ

る女子二百メートル平泳ぎ前畑秀子ほか金メダル四個、マラソンでは日本統治時代の朝鮮出身孫基禎がアジア勢で初めてのマラソン金メダル、など世界の舞台で日の丸が揚がりはじめていた。スポーツ文化が広く、厚く定着し始めていた時期といえるだろう。学生スポーツも例外ではなかった。各地での大会が熱気を失うことはなかった。

湘南中学のサッカーもさらに力を養っていく。昭和十四（一九三九）年から九回生OB嶋田正彦が、コーチ兼監督としてチームを率いた。嶋田は回想する。

「当時、私の頭の中はいつも湘南サッカー部のことだった。新しい技術を修得する目的で東大サッカー部に入り、東京住まいだった私は、春休み、夏休みには後輩の家を泊まり歩きながらせせと湘南のグラウンドに通いました。当時のチームは身体こそ小粒でしたが、素質のある、のちに日本サッカー界に名を残すまでになった選手が多くおり、伝統の華麗なパスワークで関東サッカー界では注目されていました」

チームを指導したのは昭和十六（一九四一）年、つまり日米開戦となった年までの三年間だった。

「毎年県大会および山神静大会では順当に優勝し、夏の甲子園大会へも三度駒を進めました。田村皓（十五回生）君がキャプテンをしていた昭和十四年はとりわけ強く、準決勝まで勝ち進みましたが、惜しくも抽選負けで涙を飲みました」

その昭和十四（一九三九）年は、年間総得点百十一点、失点八点という圧倒的な記録が残っている。それでも、全国制覇に手が届くまでできていながらつねに勝運に跳ね返されるという繰り返しではあった。

湘南中の小粒なフィジカルと、細かいパスワークというのがすっかり定評になっていたことは、同年春の山神静大会決勝戦（対荏崎中）の関東蹴球協会主事小長谷良策氏による戦評（東京日日新聞）にも表れている。

「湘南は、キックオフ直後から殺気をはらみ、荏崎は伝統の豪気と体力にものを見せて押し切ろうとすれば、湘南は小粒ながら得点の技術で抵抗した。開始後四分湘南出足よくまず一点先取。荏崎は風上の有利に得意の長蹴戦法で湘南のバックを崩さんとするも、湘南は球を足元によく引きつけパスワークよく対抗。後半、遠征（会場は荏崎）の不利に動きがやや鈍った湘南は、球を右に左に廻して荏崎を幻惑して巧く攻める。かくて日頃の鍛錬のあとを発揮した湘南は、ただ力のみによる粗暴

な葦崎の裏をかって見事優勝をとげた。」

その優勝で全国に進み、嶋田コーチの回想にあるように、準決勝で京都聖峰中学（のちに聖峰高校となり昭和二十五年に廃校）に抽選負けし三位。翌年、翌々年の関東大会でも連続優勝するが、昭和十五（一九四〇）年の全国大会では初戦で普成中学（朝鮮地方代表）に大差をつけられて敗退する。目標はすでに全国へと照準を合わせていたが、ままならない。あと一歩だ、とチームは練習に励み、見据える。ほどなく目標を手中におさめるのだという意気込みだった。しかし、暗雲の時代はとうとう大きな曲がり角を曲がってしまった。

三年半の戦火に 焼き尽くされたもの

昭和十六（一九四一）年、日本時間十二月八日未明、アメリカ合衆国ハワイ準州オアフ島真珠湾にあったアメリカ海軍の太平洋艦隊と基地に対して、日本海軍第一次攻撃隊による大空襲が開始され、ほどなく日本国内に臨時ニュースが流れた。「大本営陸海軍部十二月八日午前六時発表。帝国陸海軍は本八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」。

この朝、湘南中学では職員生徒が登校すると、ただちに剣道場集合となる。生徒は赤木校長の語る戦況に耳を傾ける。全国に流れるラジオでは、勇ましい軍艦マーチの前奏とともに日本軍のめざましい躍進を報じた。敵を完膚なきまで叩き、完全勝利は目前かのような興奮であった。その後の悲惨な進み行きを知る由もなく。

真珠湾攻撃の五ヶ月前の七月に、情勢悪化の影響を受けて文部省は「全国大会は明治神宮大会以外に開かない」ことを決定、したがって甲子園で開催の中等学校蹴球選手権大会は中止となった。翌昭和十七（一九四二）年には財団法人大日本体育会が発足し、各競技団体は同会の部会とされることとなって、大日本蹴球協会は消滅する。学生サッカーも著しく下火となっていった。そうしたなか、湘南中学サッカー

部は練習をやめず、県大会、関東大会で順調な勝利をおさめる。しかし、いよいよ戦局が緊迫してきた昭和十九（一九四四）年六月から工場への学徒動員となり、以後終戦までついに活動が完全に途絶えた。

軍需品生産の強化のため、多くの工場は軍需工場に切り替えられていた。そして、そこに働く若い工員が次々と戦地に赴き、決定的に人手不足、補うには学徒動員が欠かせないという流れとなっていた。

同年一月には「緊急学徒勤労動員方策要綱」が閣議決定され、二月には「決戦非常措置要綱」が決定される。これによって中等学校以上の学生・生徒は以後一ヶ年、つねに非常任務に出動できる態勢をとることを義務づけられた。さらに三月になると、「学徒動員実施要項」が決定され、あらゆる学校の生徒は一人残らず動員に関わりを持たねばなくなる。とどめは八月二十三日の「学徒勤労令」の勅令で、これによりいっそうの強化が図られた。湘南中学の生徒たちも、平塚、藤沢、茅ヶ崎、大船などの各工場へ分散出動となった。

軍学校への進学者も多くいた。同年四月二十八日付の横浜貿易新報（現・神奈川新聞）には、「湘南中学生の闘魂・半数以上が陸海軍へ」の見出しでこう報じられる。

「今春陸海へ大量の志願者を出した県立湘南中学校は、また陸海軍諸学校の入学期を控へて、四、五年の上級生の半数以上が挙つて志願、米英撃滅の闘魂に燃えたとあることを如実に顕現し、頼もしい状況である。」

開戦後約半年のあいだ、広大な地域を占領した日本軍だったが、昭和十七（一九四二）年のミッドウェー海戦で大打撃を受け、太平洋の制海権と制空権を失つてから後退の一途となつていく。翌々年の十九年には米軍の攻撃はいっそう激しく、日本の主要都市は次々と焼土となつていった。学校は、部活動はもちろんのこと、授業もほとんど不可能となる。湘南中学では、文部省が定めた「学校防空指針」に基づき、理科館と中館との間の渡り廊下を撤去して、空襲や火災の際の活動を俊敏にできるようにし、さらに撤去した資材や教師用の教材などを利用して、校舎や運動場の周辺に防空壕を築き、非常に備えた。

湘南中学の卒業生であり、サッカー部のOBにも戦地に赴いた人が少なくない。そのなかの一人、十二回生の園田嘉高はゴールキーパーだった。既述のように、昭和十一（一九三六）年の山神静大会で、準決勝で骨折し、みんなが止めるのも聞かず決勝にも出場したという語り草が残っている猛者である。七年後の漢口飛行場で米

軍相手に独立飛行隊整備班で戦っていたその園田はこう振り返る。

「当時、漢口は空軍の戦いでは最前線でした。敵機来襲の報を受けて待つあいだは、味方の戦闘機も迎撃のために飛び立っており、飛行場は深い静寂に包まれていました。夏の太陽がむせかえるだけの、異様な静けさの草原で、死と隣り合わせで塹壕に待機していると、脳裡に浮かび上がるのは湘南中へ通う道の菜の花畑、その陽炎に揺れる黄色い波と、清く澄んだ小川のせせらぎでした。こうして、味方の戦闘機を送り出して飛行場を守る気分は、ちょうど敵の来襲を待ち構えるゴールキーパーのあの孤独感とよく似ていました」

園田のチームメイトであり、骨折のキーパーに出場を断念しろと勧めた一人、同じ十二回生の増田禮二も戦場に赴いた。

「乗船した五隻の陸軍徴用船、そして海軍に召集されて乗船した四隻の艦艇もすべて、作戦中にことごとく撃沈大破され、転勤途中の飛行機も海中に墜落したりと、さんざんな目に遭いました。合計九回に及ぶ遭難で一万名を超える犠牲者が出たなか、奇跡につぐ奇跡で助かった次第です。中学校で鍛えられた湘南サッカー魂とでも言いましょうか、なにくそ、死んでたまるかのがむしろな思いました」

湘南中学卒業生の出征者のうち、戦没者は百五十余名にのぼった。

昭和二十（一九四五）年七月、米英ソの巨頭によるドイツ・ポツダム会談を踏まえ、アメリカ、イギリスに中国（蒋介石政権）を加えた三国は、日本に無条件降伏を迫るポツダム宣言を発表する。天皇の裁断によりこれを受諾し、八月十五日正午からのラジオ放送で、天皇自らが録音した終戦詔書「玉音放送」が流れた。

青空と校庭と解放感 水を得た魚となる

敗戦で社会は百八十度転換する。

玉音放送の翌日八月十六日、文部省は地方長官あてに解除を次のように通達した。

「一般工場事業場ニ出勤中ノ男子学徒ハ、各般ノ情勢ヲ勘案シ、現地関係機関ト連絡ノ上、可及的速カニ動員解除スルコトトシ、帰校ノ上、晴耕雨読ヲ行ハシムル等、貴官ニ於テ適當ノ措置ヲトラルヘシ」

また、軍事教育の色彩が濃かった体錬科は根本的に見直され、従来の戦技訓練はいつさい廃止し、学校体育などへ転換が図られる。

海外に赴いていた大日本帝国陸海軍も武装解除され、復員してきた。食糧難は激しく、交通もままならない状態はつづいていたが日本国民の復興の意志は強かった。そうしたなかで、湘南中学サッカー部も活動をいち早く始めた。二学期開始早々、生徒全員がいずれかの運動部に所属するよう奨励され、これが湘南中学運動部の戦後復活の第一歩となる。サッカー部には百名近い参加者が集まった。ボールもシューズも満足なものはない。つぎはぎの修繕をしながらではあったが、工場動員や爆撃などからの解放感はいわめて大きく、だれもがグラウンドで水を得た魚となってボールを蹴った。

練習量は増える。香川幹一郎長、十五回生のOB大埜正雄監督を中心に、連日、OBがグラウンドに訪れる。つねに現役の人数と同じぐらい集まっていたというから、

戦後の解放感がグラウンドに、この球技に、集中していたにちがいない。だが、まだ他校が立ち直っておらず、対外試合が組めない。ようやく十六回生のOB服部斐夫が、自身がキャプテンを務めていた旧制第一高校サッカー部との練習試合を敗戦の年の十月に組んでくれた。チーム全員、気負いこんで臨んだが叩きのめされる。この悔しさは思った以上に深く、一挙に勝負への意識を高めたことが、翌年の秋の快挙に結びついたといえよう。

翌昭和二十一年（一九四六）年には、ますますスポーツ熱が盛んになる。サッカーの大会も多く再開されていた。全日本選手権大会が復活し、関東、関西の予選を経て五月に行われた決勝戦では東大LBが神戸経済大クラブを破って優勝している。

その十一月、湘南中学サッカー部は、食糧の買い出しやヤミ屋で超満員の夜行列車で兵庫県西宮へ向かった。



球を蹴り

二十六年蹴り復た蹴る

戦後の混乱から踏み出すため、日本の体育および競技の振興を目的に第一回国民体育大会が昭和二十一（一九四六）から翌年にかけて開かれた。これは、戦前に行われていた明治神宮球技大会（大正十三年から昭和十八年まで十四回にわたって行われた総合競技大会）を引き継ぐものとして、以後「国体」の名で定着していった。

沖縄を除く四十六都道府県から五千人余の選手が、食糧持参で集合したこの大会、サッカーは兵庫県西宮球技場で行われた。中学校の部は、東日本と西日本で代表チームが勝ち抜いてきて、両チームの決勝戦により日本一を決することになっていた。その日は、日本国憲法が公布され、のちに「文化の日」と制定された十一月三日である。

湘南中学サッカー部は、県下予選ではいずれも大差で相手を寄せつけず、関東予

選では東京高等師範付属、浦和、蕨崎、真岡などの強豪を下し、東大御殿下グラウンドでの東日本決勝では宮城県の仙台一中と対戦する。この試合を延長の末、1・0で勝ち取り、いよいよ日本一を決める西宮へ向かうことになった。

対戦する西日本代表は、神戸一中である。太平洋戦争の前から全国にその名を轟かせていた同中は、戦争突入後の昭和十七（一九四二）年の、結果的に最後となった全国中等学校蹴球選手権大会においては、決勝で広島島の修道中を9・0で圧勝するなど、その強さが引きつづき群を抜いていた。

湘南中のキャプテンは、新年度から二十二回生の海老原朗が務めていたが、年の半ばで茨城県の水戸高校への進学が決まり抜けたため、同じく二十二回生の香川嵩（香川幹一部長の長男）が後を継いでいた。大塙監督はじめ多くのOBが駆けつけるなかで、万全の準備で当日を迎えようとしていたが、思いがけないアクシデントに見舞われる。西宮へ出発の前日、最後の練習で二十四回生早川忠生（のちに小林姓）が足首を骨折。自他ともに認めるポイントゲッターのCFだった。のちに慶應義塾大学でもプレイし、全日本選手権（現在の天皇杯）を四回制覇したメンバーで、昭和三十一年（一九五六）年のメルボルンオリンピックの代表選手ともなった選手である。



直前のアクシデントによる戦線離脱はあまりにも痛かった。

いよいよ十一月三日午後一時三十分、西宮球技場南側サッカー場でキックオフ。前日、大阪出雲屋旅館に宿泊した湘南中の練習風景を神戸一中が偵察に來たのを知り、「武者震いをおぼえた」と振り返るキャプテン香川は、試合開始まもなく、相手の強さの並々ならないことを実感する。ボール支配は神戸が七割。

前半二十分、先取点を奪われそのままハーフタイム。後半に入り風上となる。二十分コーナーキックからの混戦となり、押し込んで同点。西宮の会場はまさにアウェイだった。ほとんどの声援が神戸を鼓舞する。そのなかでひるむことなく、ふたたびコーナーキックから、こんどはきれいにシュートが決まり逆転の2・1。残り三分、このままいけるか、との思いが湘南チームの頭をよぎったが、さすがは実力の神戸、猛攻が繰り返されて三十二分過ぎ、もぎ取るようなシュートを決められ、ふたたび同点。勢いはそのまま神戸に移る。実績からして神戸のつづけざまの決勝点を予感させる展開だった。しかし、湘南には技術だけでは測れない執念の横溢していたことが立証される。

攻め合い、身体を張った防御の連続がつづいて、タイムアップ寸前のことだった。RW（ライトウイング）桑田孝（二十二回生）が右タッチライン沿いからロングシュートを放つ。これがゴール左隅に刺さった。そのままタイムアップ。観客を沸かせに沸かせたシーソーゲームはここに劇的な決着を見た。

優勝東日本代表、神奈川県立湘南中学校と表彰式で栄誉を称えられる。その証しは物資不足がつづくなか、一枚の粗末な紙の賞状のみだったが、湘南中サッカー部積年の悲願、全国制覇を示す値千金の紙切れであった。

赤木愛太郎校長は、祝意の詩をこう寄せた。

球を蹴り

球を蹴り復た球を蹴り

二十六年蹴り復た蹴る

甲子原頭全国を制す

国家再建復た球に似たり



14



全校生が選手の盛観

[illegible]

(土曜) 休館日。――、常設展示した。

6





昭和12（1937）年当時のメンバー



昭和14（1939）年 中学選手権出場



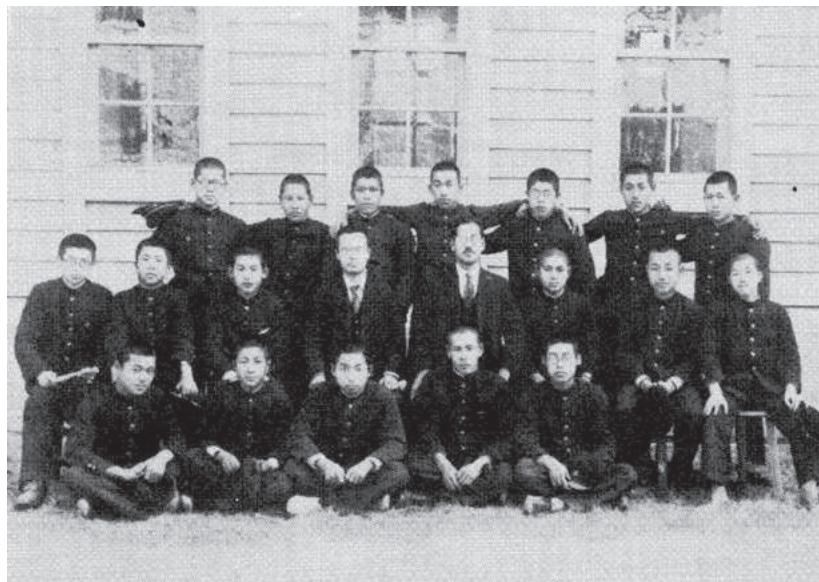
1940（昭和15）年 関東大会初優勝。



昭和16（1941）年 関東大会を連覇した。



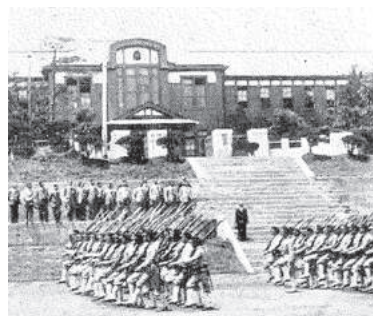
昭和15（1940）年 中学選手権3回目の出場。1回戦、朝鮮半島代表、普成中に1－8で大敗。普成中は圧倒的な力で優勝した。



第1期黄金時代 [昭和6 (1931) 年]



昭和15年卒メンバー



戦時 グランドでは教練が行われた
[昭和18 (1943) 年]



昭和20 (1945) 年時メンバー



第2期黄金時代 [昭和16 (1941) 年]

神奈川新聞企画で、湘南中の国体優勝を伝える記事「昭和54（1979）年」

(文中敬称略)

神奈川スナウイ史
昭和戦後

☆ 48 ☆

湘南中が国体優勝
食糧事情が実力に反映



中等學校ノ部組合				
	一回戦	二回戦	準決勝	決勝
東京代表 東京府立五中	12.	}	}	}
北近畿代表 京都二中	1.30			
關東代表 浦和中學	0	25日 10.00		
東中國代表 神戸一中	10	25日 11.00		
北海道代表 室蘭商業	2	}	26日 13.00	
西近畿代表 和歌山中學	2			
東海代表 刈谷中學	5	25日 11.30		
九州代表 嘉穂中學	0	25日 12.00		
			27日 14.30	
山陽群代表 湘南中學	2	}	}	
西風代表 高知商業	1			
東北代表 仙台一中	2	}	26日 14.30	
西中國代表 修道中學	2			

備考
一回戦、二回戦ノ両宮室都場
準決勝、決勝ノ甲子園南都場



昭和22(1947)年1月の蹴球祭学校階段下(前年11月の国体優勝を祝う)



英語教師として、 ガンブチ帰る



昭和二二（一九四七）年～昭和三五（一九六〇）年

学制改革により

神奈川県立湘南高等学校

戦争終結は価値観の大転換だった。それは、具体的な各種の制度改革にもあらわれた。学制改革もその代表的なひとつである。

昭和二十一（一九四六）年三月はじめ、アメリカ教育使節団が来日し、およそ三週間にわたって日本教育代表者との話し合いが重ねられたのち、同月末、マッカーサー総司令官に今後の教育の構想を説いた報告書を提出した。その勧告に基づいて大規模な教育課程の改編が検討されていき、翌年昭和二十二（一九四七）年四月、「学校教育法」が施行される。これによって、それまでの小学校六年、中学校五年、高

等学校・大学三年の学制が、小学校六年、中学校三年、高等学校三年、大学四年へと切り替えられた。大規模な変更であるため、混乱を最小限に留める移行措置として、旧制と新制の学校が混在したが、ともあれ昭和二十二（一九四七）年四月一日から新制中学校が、翌年の同日から新制高等学校が船出することとなった。

湘南中学においても、昭和十八（一九四三）年の入学者のうち百五十八名が二十三年三月で中学五年を終えて卒業し、残りの百七十一名は二十三年四月から新しい学制の高校三年生となる。もちろん校名も変わる。二十三年四月一日から、「神奈川県立湘南高等学校」となった。

その新しいスタートに先立つ三ヶ月前の同年一月二十二日、赤木愛太郎初代校長が依願退職する。開校以来ただ一人の校長として力を尽くし、苦難の戦時を乗り越えて、まさに学制改革としての新生を見届けるかのような身の引き方だった。二年前の蹴球部全国制覇の栄誉は、図らずも万感の感謝およびはなむけとなった。

不戦勝を潔しとせず 待って戦い、敗れる

神奈川県立湘南高校は新時代の歩みを始めた。湘南中学のシンボルでもあった学帽の白線は除かれ、襟章は赤・緑・紺に決まった。初代赤木校長のあとを受けて就任した上林朝次郎第二代校長は、新時代の只中を若者が歩くことの意味をこめて、

「民主主義の正しい理解とその拡充」

を理念に掲げた。それを支えるものとしての「文武両道」は初代校長の意志を全面的に受け継いでいくことを宣言した。

そうしたなか、サッカー部の戦後を眺めていこう。

学制改革が施行される前年の昭和二十二（一九四七）年七月、東京高等師範学校

附属中学校との親善試合が組まれた。結果は激しい接戦のすえ、2・1で湘南の勝利となったが、それが現在も息長くつづく定期戦（現・筑波大付属戦）の皮切りだった。そもそもの経緯を、二十三回生的小林忠生はこう語る。

「その年の初夏、東京高等師範附属中の三人がはるばる藤沢までやってきました。

定期戦をやるう、という。果たし合いの宣告だ。聞けば、ほかの種目は学習院と組んでいるが、サッカーはどうしても湘南とやりたい」

そうこれれば小林としても心を動かされずにはいなかった。二つ返事で果たし合いを受けて立つ。附属中といえば、日本の学校体育サッカーの発祥地である名門だ。相手にとって不足はない。

「試合をやってみて、わが湘南と附属中とは勉強を重視する校風や環境が似ているだけでなく、そのサッカースタイルも、ショートパスを中心としてチームワークに重きをおく似たものどうしであることがわかった。恰好の好敵手と実感しました。できれば、未永く定期戦をつづけたいと……」

その思いは実現し、今に引き継がれている。

昭和二十三（一九四八）年秋には、福岡で開かれた第三回国民体育大会に出陣した。同大会の記念すべき第一回大会において全国制覇を達成した湘南中学蹴球部だったが、連覇に燃えた翌年の第二回大会は諸般の事情によりサッカー競技少年の部が行われなかった。その代替のように第二十六回全国中学校選手権大会（学制改革により最後の中等学校）が開かれたが、予選である県大会で湘南中学は小田原中学に敗れ、出場には至らなかった。そうした背景で出場した第三回大会である。おのずから並々ならぬ闘志を抱えて開催地福岡に赴くことになる。

意気込みは結果につながった。一回戦、南の雄と謳われ優勝候補の一角とされた九州代表鹿児島高校に2・1で快勝すると、仙台一高を6・1と撃破。安定した試合運びで決勝へ進出した。対戦相手は広島大学附属高校である。同校は湘南中学が県予選で敗退し出場できなかった前年度の全国中学校選手権大会の覇者であり、超高校級の評判の高いチームだった。とりわけFWの三人が群を抜いていた。「アジアの黒豹」と呼ばれたRW（ライトウイング）木村現。RI（ライトインナー）長沼健。CF（センターフォワード）樽谷恵三。彼らは広島高等師範附属小学校以来のチームメイトで、けたはずれのスピード能力をもち、当時の中学生ではとても止められな

かった。制覇した前年の大会（全国中学校選手権大会）では四試合で二十一得点、決勝戦となると7・1という前代未聞の得点差の記録を打ち出す。そのちも三人は日本サッカー界の重要な存在となった。木村現は関西学院大に進学し、天皇杯を制覇するなど関学黄金時代を築き、昭和二十九（一九五四）年、日本が初めて参加したFIFAワールドカップ予選に先発出場した。長沼健も大学・社会人と実績を重ね、昭和四十三（一九六八）年メキシコ・オリンピックにおいて日本を銅メダルに導いた代表監督。樽谷恵三も昭和三十一（一九五六）年、東洋工業チームのエースとして全日本実業団サッカー選手権大会初優勝を導いた。

さあ、この強敵を相手に戦う決勝戦となった。いつもはゾーンディフェンスを敷いていた湘南高だが、三人をマンツーマンでびったりマークし、自由に仕事させない作戦を選んだ。それが奏効し、超高校級のチームは次第に苛立ってくる。そこを湘南はカウンター攻撃などで果敢に攻め、多くのチャンスをつくる。が、いずれも得点に結びつかない。いやな空気の出始めるなか、ハーフラインあたりで相手にフリーキックを与え、それがゴールキーパーまで直接届いた。よくキャッチしたが、相手選手の押し込みによって身体ごとゴールを割るという失点となった。現在なら明らかにキー

パーチャージとなる場面だが、当時としては正当なチャージであった。試合はそのまま、0・1でタイムアップ。ゲームの大半を支配していただけに悔しさひとしおの準優勝となった。

ただしこの試合には、忘れたい裏話がある。

湘南高チームは、試合前のウォーミングアップを入念にやっていた。闘志がむらむら湧いてきて、全員が無口になる。ところが、チームメイトのひとりが不審な顔をし始めた。そして、それは全員に伝染していく。明らかにようすがおかしいのだ。相手チーム広島大学附属高校のメンバーの姿がひとりも見えない。

ウォーミングアップは充分にこなした。さあ、決戦だと気合を入れるも、

「おい、まだ来ないぞ」

チームメイトがつぶやく。そう、広島大学附属高校はいまだにただの一人も現れていないのだ。大会関係者もあわて始める。宿舎に連絡を取ると、なんと、

「廣大附属チームは時間をまちがえて、まだ宿舎にいるようです」

そしてキックオフの時刻は過ぎた。大会本部は、

「規定により湘南高の不戦勝となります」

そう宣言する。が、今よりもずっと牧歌的な空気があったのだろう、湘南高にこう相談を持ちかけた。

「どうしましょう、待ってやりますか？」

湘南高チームは相談する。岩渕監督（戦地から復員した岩渕二郎は教員として東北地方に赴いていたが、非常勤として監督の立場で指導しており、この大会も率いていた）とキャプテン小林忠生は話し合った。小林は、

「やりたいです。不戦勝だなんてつまらない。勝算はあります。きちんと勝って優勝したい」

と主張した。岩渕監督は選手全員に意見を求める。みな口をそろえてキャプテンと同意見だと告げた。監督は我が意を得たり、とにっこり笑って決断する。

「待ちましょう。ゲームをやりましょう」

大会本部にそう告げた。

それから選手たちはどうしたか。相手を待つて巖流島の佐々木小次郎となつてゐる間にやったことといえば、弁当をかきこむことである。食糧事情の悪い時代であった。なによりも、めしなのだ。すると、半分も食べないころ、遅れた宮本武蔵は現れ

る。心を食べかけの弁当に残したままキックオフだ。
そして、先述の試合内容となり、待ちくたびれた佐々木小次郎は伝説どおり敗れることになったのだ。

試合終了後、広島大学附属高校キャプテンが、湘南高チームのほうにやってきた。腕には優勝のあかしである菊の植木鉢を抱えている。

「われわれは、試合には勝ちましたが、勝負には負けました。この菊はそちらのものです」と差し出す。監督、キャプテンはじめ選手一同、それを固辞したのは言うまでもない。

新制高校はじめての全国大会準優勝の顛末である。

湘南中学にとって 公式戦ラストゲーム

無念の準優勝となった同じ日、神奈川県横浜市南区三春台の関東学院グラウンドで、「神奈川県立湘南高等学校併設中学校サッカー部」は試合をしていた。福岡で開かれた第三回国民体育大会のほうは「青年部」と称され、「併設中学校」は「少年部」である。昭和二十三（一九四八）年四月、暫定措置として旧制中学校に新制の併設中学校が設置された。このことによって、旧制の一、二年生は新制の併設中学校二、三年生に進級となる。旧制の三、四年生はそのまま併設中学校の四、五年生に進級するが、この時点での五年生は旧制中学校の卒業と新制高等学校の三年生への進級とのどちらかを選択することができた。ということ、湘南中学から湘南高校への移行が図られていったわけである。

さてその、昭和二十三（一九四八）年の、「少年の部」の大会である。会場は、三年前の五月二十九日の横浜大空襲によって受けた焼跡がまだ燻っているようなグラウンドだった。

一回戦の相手はライバル関東学院中等部である。結果は0・3の完敗。点数以上に、この試合はさんざんなものだった。選手であった田川明（二十七回生）は忸怩たる思いをこう述べる。

「鎌倉に住んでいたチームの有力メンバーが二人も、どうせ勝てない相手だからと、なんと試合をボイコットしてしまう。で、九人で戦う羽目になりました。とてもゲームにはなりませんでした。私も当時鎌倉の住人だったという理由だけで、なぜか欠場の二選手と同罪あつかいとなって、今はなき浪人山（と呼ばれていた学校内の一角）に呼び出され、国体帰りの怖ろしい応援団長にこっぴどく叱られたものです」

青年部は切磋琢磨して全国準優勝だぞ、ひきかえおまえらときたら、なんだあのざまは、敵前逃亡とはなにごとだ、という叱咤である。万感迫るその試合は、奇しくも「湘南中学」にとって公式戦ラストゲームであった。

OBたちは 大舞台で活躍する

学制改革の真っ只中だった昭和二十四（一九四九）年あたりから、東京の大学サッカー界に湘南旋風ともいえる現象がつづくことになる。東大、早大、慶大、明大のキャプテンのほか、関東学生選抜の半数以上が湘南高出身で占められることもあった。

日本代表も多く輩出した。戦後の国際試合は昭和二十六（一九五二）年を皮切りに始まったが、昭和三十一（一九五七）年までの五年間に三十一試合が行われたが、そのうちの十九試合に湘南OBが出場した。大埜正雄（十五回生）、田村恵（十九回生）、山口雄司（二十回生）、小林忠生（二十四回生）の四名だ。

七章（OBの風景）で各人の戦歴を詳述するが、ここでは湘南OBが同時に二名出場した国際試合を挙げておこう。昭和二十七（一九五二）年六月八日の全香港華人選抜戦（大埜・山口）、昭和二十八（一九五三）年十一月二十九日のDIFユーロゴールデン（スウェーデンのクラブチーム）戦（大埜・田村）。

創部までもない硬式野球部が 全国を制した

学制が変わり「湘南高等学校」（昭和二十三年改称）となってから初の全国制覇を果たしたのは硬式野球部だった。マスメディアに「無欲の勝利」と称えられた、全国高等学校野球選手権大会（甲子園）である。

既述のように、赤木初代校長が硬式野球部を作ることになかなか認めなかったのは、グラウンドが狭かったという物理的な理由と、当時他校の野球部にさまざまな弊害の大きさがあるという理由からの決断といわれる。しかし昭和六（一九三一）年ころから、正式な部は設けないものの軟式野球にかぎり、対抗試合は行わないとの条件で認可されることになり、職員のなかから野球係を決めてその監督に当たっていたという経緯はある。

戦争が終わった。社会全体の虚脱のような沈滞が学校にも漂うなか、ついに校長は昭和二十一（一九四六）年九月、硬式野球部創設に踏み切った。校長の真意について尋ねた職員のかなんな証言もある。

「じつは湘南中創立当時、神奈川には野球の強豪校があふれていた。惨敗を繰り返したら新設校として士気が下がる。だが、今はちがう。戦争によっていったんリセットされ、みんな同じスタートラインに並んだ。作るなら今だ。校長はそう考えたようです」

その英断の正しかったことが、びつくりするほど早く実証されることになった。硬式野球部創部三年目、昭和二十四（一九四九）年のことである。神奈川県大会決勝で県立商工高等学校を破り、甲子園に出場。あれよあれよという勢いで勝ち進み、岐阜高校との決勝戦も逆転で仕留める。ネット裏の記者席が一樣に呆然自失となったという伝説の、まったく予想にのぼらなかったチームによる全国制覇となった。「三十三年ぶりに箱根山を越えた深紅の優勝旗」という昂揚は、湘南高校運動部全体の昂揚につながったことはまちがいない。

いっぽうで、学制改革は進行しながらも多難含みだった。連合国軍司令部（GHQ／SCAP）が打ち出す小学区制・男女共学・総合制の「高校三原則」も完全実現には至らず、男女共学に関していえば、西日本の公立高校ではほぼ浸透したものの東日本では進まなかった。そうしたなか湘南高校では職員たちの激論と奮闘の繰り返しによって、昭和

二十五（一九五〇）年四月の新生四百三十名のうち女子生徒五十九名の入学を見た。ここから湘南高校の男女共学は始まる。ちなみに、平成二十二（二〇一〇）年にノーベル化学賞を受賞した二十八回生の根岸英一（合唱部）はこの年に入学している。

野球部の全国制覇は、その三年前の中等学校時代のサッカー部全国制覇と合わせて、文武両道湘南の気運をいっそう高めた。それを受けるように、運動部を中心とした統合部室の建設が決まったのは昭和二十八（一九五三）年である。夏休み中に建設が進み、明けた九月に完成。卓球、テニス、バレーボール、陸上、サッカー、フェンシング、軟式野球、ラグビー、硬式野球の各部が入室した。

物は不足していたが 心は豊かだった

昭和二十六（一九五二）年九月八日、連合四十八ヶ国と日本との対日講和条約調印式がサンフランシスコのオペラハウスで行なわれた。式は日本全権の吉田茂首相の署名を最後に終了した。日本の戦後時代は急速に進んでいく。そのなか、サッカーはどうだっただろう。

屈辱の歴史が残されているのは、サンフランシスコ講和条約調印二ヶ月後の十一月である。戦後をはじめて外国のチームが来日した。スウェーデン南部の小都市ヘルシンボリを本拠地とするクラブチーム・ヘルシンボリIFである。が、残念な結果となる。六戦全敗。全日本合計失点は三十六、得点はゼロ。日本サッカー界にとってこの屈辱こそが「戦後復興」の原点であったといえよう。

そのころ湘南サッカーはどうだったか。

同年（昭和二十六年）の国体予選では、一回戦でキャプテンのCF栗原克夫が手首を骨折し、以後の試合に出場できないというハプニングを乗り越え、順調に勝ち進んで、決勝戦で小田原高校を下し、三年ぶりの県下優勝を果たした。だが、南関東地区予選で東京都代表の都立北園高校に2・1で敗れて終戦。

戦後まもなく、昭和二十四（一九四九）年から創設され、湘南高は三年連続出場となった第三回関東大会においても、二回戦で栃木県代表の県立真岡高校に惜敗し、涙をのんだ。そのチームの選手だった嶋田武夫（二十八回生）が当時の合宿報告を残している。

「昭和二十六年八月十六日～二十二日。食費五百円。米三升五合、箸および毛布持参。ボールを持っている者は持参のこと。そうだが、夏休みにはボールを家に持ち帰って破れをつくり、近所の海岸でドリブルの練習をしたものだ。物質的には最低だったが精神は豊かであった。」

翌年、昭和二十七（一九五二）年から、ようやく学生改革の移行も一段落となり、全部員が高校生三年間の在校となる。その翌年の春に二十七回生の柳川明信がコーチに就任し、以後四年間、現役指導にあたる。数年代にわたって複数のOBによるコーチ時代から、専任の体育教師による長期一貫性を持った指導へと移る過渡期であり、柳川が最後のOB学生コーチとなった。

夏の合宿後、見違えるほど 強くなるのが湘南サッカー

コーチおよび監督の変遷ということでは、やはり岩淵二郎の話題を欠かすことはできない。

湘南中学蹴球部創設のメンバーであった二回生の岩淵は、在学中はむろんのこと、卒業後、遠隔地に住むなどやむを得ない事情以外は母校のサッカーに心血を注いだ。百年の歴史の前半をたどれば、節目にかならず岩淵の存在がいぶし銀のように光っている。その足跡の概略を追ってみよう。

湘南中学を卒業（昭和二年）後、横浜高等商業学校へ進んだ。そして森永製菓に就職し、社会人となる。横浜高商時代もそうだったが、社会人となっても足繁く湘南中のグラウンドに現われた。三十歳を超えてまもなくである。そのころ、湘南蹴球部に「監督」という特定の存在はなかった。ライオンのニックネームを与えられた学生コーチ藤田得利（六回生）

がメインの指導者だった。したがって毎日グラウンドへやってくるギョロ目の岩渕は、いわば総監督的な立場だった。ひとことアドバイスをすれば、みんなが震えあがる。選手の人であった菅原留意（十七回生）はこう振り返る。

「遊びのサッカーの感覚で利き足ばかり使っていた私は、左足のキックがからつきしダメでした。すると、ガンブチのご託宣が飛びます。菅原ッ、おまえはおれがいいというまでは右足で蹴ってはいかん！」

少年選手はびくびくしながら言うことをきいた。来る日も来る日も、左足だけで蹴りつづける。ガンブチは毎日やってくるからごまかせない。それにしても……、とあるとき菅原は子どもごころに思った。

「森永製菓に勤務していると聞いているけれど、いったいいつ会社に行くのだろう」

あたかも少年のその疑問を裏づけるかのように、岩渕はほどなく森永製菓を退職する。そして、グラウンドにぬつと現れてはいつそう恐い檄を飛ばした。

日米開戦となる。岩渕は、一年志願の陸軍少尉として軍務に服した。そして、終戦。復員し、亡くなった父の故郷である宮城県に住み、教員となる。さすがに兵役中とそのあとの宮城県の時期は、湘南中のグラウンドに顔を見せることはできなかった。しかし、ここ

ぞというときには、どのような調整をしたのか駆けつけてきたのは言うまでもない。昭和二十一（一九四六）年の全国制覇達成の試合には、その現場で仁王立ちで戦況を見つめていた。

そして、指導者として練習に参加できないときも、忘れていたわけではなかった。

二十七回生の栗原克夫はキャプテンだったときにガンブチから遠く宮城県から手紙の指導を受けるようになった。きっかけは、昭和二十六（一九五二）年の教育大附属高との定期戦に敗れてからだだった。その試合を観戦しにきていた岩渕から、後日、分厚い封書が届いたのだ。こんな文面である。

「昨年度のチームは全国制覇が可能な実力ある大型チームだったが、今年は技術面でも、体力面でも見劣りのする小型チーム。ゆえに多くは望まぬ。」としたうえで、

「練習はことごとく基礎技術の習得に努めよ。例えばこうだ。自分がコントロールできる範囲内に全身のどこを使ってもいいからトラップできるようにすること。サイドキックによるシュートパスの錬磨に時間をかけること。バックスのキックは短めでよいから、目的地点に正確に落とせるようにすること。」

そして、「近いうちにならず機会を作ってグラウンドへ見に行く。」としたあと、最後に

こう添えて結んであった。「心配することはない。湘南の蹴球は夏休みの合宿練習後に見違えるほど強くなる」。

近いうちに見に行く、と通信文にあったことがそのとおり実現した。見に行くどころか、常駐になったのだ。昭和二十八（一九五三）年、岩渕二郎は母校湘南高校の定時制の英語教員として転職する。もちろん、サッカー部の面倒を見ることになったのはいうまでもない。

五代目校長の香川幹一の証言がある。香川は全国制覇時に湘南中学校社会科教師であり蹴球部部长であったが、その後いったん湘南を離れた。昭和三十六（一九六二）年に校長として赴任する前の小田原高校在職中、岩渕にラブコールを何回も送ったことがあった。小田原高校サッカー部を強くしたい。ついては、ぜひとも貴君の力がある、と、再三再四懇請したが、そのつど固辞され、香川は根負けした。「湘南以外ではサッカーをやらない、と頑固に決めておったのでしょね」。

名選手たちの ふしぎな縁の巡り合わせ

岩渕が母校の英語教員として赴任し、思う存分後輩たちの指導に専心するようになったその年（昭和二十八年）は、スポーツの国際交流の充実が目立った年でもあった。戦後の復興を示す一面ともいえよう。

特筆すべきは、八月に西ドイツのドルトムントで開かれた第三回国際学生競技大会に参加したことである。この大会は戦前からあったが戦争で中止となり、終戦後に復活。以後昭和三十二（一九五七）年の第五回までつづき、ユニバーシアード大会と名を変え、現在に引き継がれているものである。

その第三回のドルトムント。日本は、サッカー、陸上、フェンシングの三競技に参加。サッカーでは竹腰重丸監督以下二十名の全日本学生選抜チームが派遣された。二十名のなかには、長沼健、岡野俊一郎など、のちの日本サッカー界の発展に大きな力となった二

人も含まれていたが、湘南蹴球部出身も顔を連ねていた。山口雄司(二十回生)、小林忠生(二十四回生)、小田島三之助(二十五回生)である。なかでも小林はこの大会で、特別の感懷を抱いたにちがいない。ふしぎな「縁の巡り合わせ」があったのだ。

開会式直後、メインスタジアムであるローテ・エルデカンフで日本は開催国西ドイツと対戦する。試合はホームの熱い応援を裏切つて日本が先制した。木村現のセンタリングを長沼健がシュート。これはバーに当たつてゴールとならなかったが、勘よく詰めていた小林忠生が左隅に決めた。そのあと追いつかれ、同点のままハーフタイム。後半に入つてもなく西ドイツに勝ち越される。日本は木村現が同点ゴールを決めるが、またもホームチームにリードを許す。ここまでかと思われたが、不屈のヘッディングシュートをゴールに突き刺したのはふたたび小林忠生だ。スタンドは興奮のるつぽ。だれもが引き分けを予想するなか、終了まぎわに西ドイツがコーナーキックから値千金の決勝点をあげ、タイムアップの笛が鳴る。日本チームの大善戦に観衆は万雷の拍手を惜しまなかった。それだけでは興奮が収まらなかったと見え、その夜、日本チームが宿舎の食堂に姿を現わすと、大勢がいっせいに起立して拍手して迎えた。なんと、各国の選手団である。開会式直後の試合だったからみんながスタンドにおり、このまれにみるシーソーゲームを観戦していたのである。

不屈の二点を入れた小林にとっての「縁の巡り合わせ」とは、こうだ。日本の得点はすべて、木村現、長沼健、小林忠生の三人でもぎ取ったものだったが、木村現と長沼健は広島大附属高のチームメイトであり、五年前に行われた第三回国体で優勝している。その決勝戦の相手は湘南高。キャプテンが小林忠生。そうなのだ、広島大附属高はあろうことか試合時間をまちがえて遅刻し、湘南高の不戦勝が決まろうとしていたところをキャプテン小林が「戦わずの勝ち」をよしとせず、来るまで待つて戦い、敗れたあの試合である。

三人は息の合ったプレイを展開していく。西ドイツに惜敗のあとは、ルクセンブルクに8・2、ザールランド(フランスとドイツの国境にある地区で、第二次大戦後の当時は帰属先が決まらず独立国扱いで出場。のちに西ドイツ編入、現在はドイツ・ザールランド州)には7・1と大勝。エジプトには敗れたが、通算2勝2敗で六位と大健闘した。

大会終了後、選抜チームはすぐには帰国せず、西ヨーロッパの多くの国々を巡り、練習試合だけでなく現地のプロサッカーの試合を観戦したり、観光名所やオペラを見たりと、おおいに見聞を広めた。小林忠生、長沼健、木村現そして岡野俊一郎たちは旅のさなか、「将来の日本のあるべきサッカー」について、熱く、若々しく語ったものだったという。



あの雨でボルトシステムが 機能しなかった

岩渕二郎が湘南サッカー部常駐の指導者として帰ってきた。するとさっそくガンブチ効果は表われる。

昭和二十九（一九五四）年五月、国体神奈川予選の決勝は当時最大のライバルであった小田原高校が相手だった。お互いに堅い守備で譲らず、無得点のまま十五分ハーフの延長戦となる。すると、立てつづけに失点し、0・2で敗退となってしまった。湘南高の選手たちはうなだれて引き上げようとする。そこで意外なことが起きた。ガンブチが、ぬっと主審の前に立ったのだ。

「大会規則に延長戦というものはない」

と主張する。ガンブチの名誉のために言えば、これは負け惜しみでも、ごり押しでもなかった。確かに規則には「引き分け」はあっても「延長戦」の明記はなかったのだ。役員側と言い合いになる。役員側は、それならなぜ延長戦が始まる前に抗議しなかったかという言い分。ガンブチは延長戦が始まってから不審に感じ、すぐに調べたのだと応じる。したがって、もし自分たちが延長戦を制したとしても、この異議は申し出ると決めていたと付け加えた。ガンブチは武士のごとき威風である。詭弁を弄しているとは見えない。役員側は圧倒され、ガンブチの異議を受け入れた。日を改めての再戦だ。

三日後、ハングの意味もあって小田原高グラウンドで再試合となった。結果は、先取点を奪いながらの逆転負け、1・2。選手たちはガンブチの顔に泥を塗ってしまったような居たたまれぬ気分に苛まれたものだった。その敗戦はむろんガンブチも相当悔しかったにちがいない。すぐに採用となったのが、ボルトシステムだった。

ガンブチの「小石伝説」がある。グラウンドに立つときはいつもポケットに小石を数粒しおせている。紅白試合などで不意にゲームを中断させる。意図の薄弱なプレイをした選手の足もとにその石礫が飛んでくるのだ。そして怒号。選手を誉めることをしなかった。お

だてないとしよげるのは、どうせダメな選手なのだ。という理屈である。この伝説だけを聞けば、どこか暑苦しい「根性至上主義指導者」を思わせるが、そうではない。理論派だった。理詰めでスポーツを考えるのが好きなタイプで、したがって新しい理論にはつねに敏感だった。ボルトシステム（ダブルストッパー式）もそのひとつだったにちがいない。WMが不動のフォーメーションであったなか、ガンブチの旺盛な研究心、進取の精神はこの最新のシステムを湘南チームに果敢に取り入れた。これがみごと奏効する。よくわからないけれどガンブチの言うことだから、と一生懸命この新システムをこなそうとした湘南チームだったが戸惑いも大きかった。が、それ以上に混乱したのは相手チームだった。当時の選手、岡田清治（三十回生）が、

「相手は、どこと当たってもみんな目を白黒させて、気がついたら負けてしまい、腑に落ちない顔をしていたものです」

と証言するように、トントン拍子で勝ち進み、第三回東日本大会の神奈川代表となる。そして夏の明治神宮外苑競技場（その後の旧国立競技場）の本大会へ。神奈川大会の勢いをそのまま持続し、一回戦の本庄高校（埼玉県）、二回戦の館林高校（群馬県）に快勝する。むろんボルトシステムである。このまま頂点に登りつめるか、という気分が広がったが、三

回戦でつまづく。前日までの好天と打って変わり、雨中の試合となった。オウンゴールも含めて、0・4の完敗。ずっとあとになってガンブチは、選手たちをこう慰めたという。

「あの雨でボルトシステムが機能しなかった。もつとよいコンディションだったら勝つていたはずだ」

鬼のガンブチ、無類の負けず嫌いである。

いつかはなんとかする いまは雌伏の時代

同年暮れ、翌昭和三十（一九五五）年四月から本採用という約束のもとに、大学四年に在学中の学生が非常勤講師となって赴任してきた。東京教育大学（現・筑波大学）サッカー

部の宮原孝雄だ。湘南高OBではない。

たまたま湘南高の一人の体育教師が故郷に帰るため退職し、空席となっていた。そこで当時の松川校長に、「ぜひともサッカー専門の体育教師をご採用願いたく」と直談判したのも、やはり岩渕二郎だった。ずっと物色していたガンブチは、あるとき関東大学リーグを視察し、宮原に目を止めた。そして、本人を口説き、湘南高校長を口説いたのだ。

宮原は非常勤講師を経て、正式に湘南の体育教師に赴任し、サッカー部顧問となった。ずっとOBが指導をつづけてきたなか、部創設以来はじめての体育教員監督ということになる。それを願っていた岩渕二郎は、いわば総監督の立場としてバックアップしていく。しかし、歴史に浮沈はつきもので、宮原にとって不運なのはちょうどその時期が湘南サッカー部の低迷期に差しかかっていたことだ。なによりも選手の数が少ない。

四月時点で三年生部員は五人、そのうち二人は前年の暮れに入学してきた新参者。戦後すぐに始まった恒例の教育大附属高校との定期戦には、なんとメンバーが十一人集まらず、部員以外の生徒を数合わせに加えてどうにか不戦敗を免れたものの、当然のことながら惨敗。

宮原は振り返る。

「半世紀を過ぎた湘南サッカーの歴史のなかで、どうやら最も低迷していた時代だったように思います。戦前、戦後の名選手輩出と比べたら天と地、氣息奄々だったなあと思います」

だが、とこう付け加える。

「伝統とはありがたいもの。そんなときであっても、いつかはなんとかする、いまは雌伏の時代と指導者も部員も暗黙の裡にそう心に刻んでいたと確信します」

それは五年後、後述するように、宮原が在職最後の年に実証されることになる。

浦高定期戦が始まった翌年 校舎焼ける

昭和三十二(一九五七)年十月十九日、埼玉県立浦和高校との定期戦の第一回が行われた。そもそもその発想は浦高側にあったものだ。体育クラブの定期戦をどこかと組みたいと画策していた浦高は、候補校として日比谷、教育大付属、熊谷、前橋、湘南に絞って選んでいた。全校投票を行なったところ圧倒的多数で湘南が支持されたという。その理由は、東京への距離がほぼ等しいこと、スポーツと勉学の両立を果たしている共通性があったことであつた。当時の松川校長は、「プロポーズされたものは受けない。とてもよい縁談だから」と歓迎した。

毎年交互に相手の学校を訪問する形で行われていくことが決まり、第一回は浦高が舞台となる。結果は、バスケットボールと卓球で湘南の勝利、野球は引き分け、サッカーは、ラグビー、バレーボール、テニス、柔道と同じく敗戦となつた。同定期戦は、平成十五(二〇〇三)年、両校校長が廃止の覚書きを取り交わすまで、四十六回の歴史をつくった交流戦だった。

その湘南・浦高定期戦の企画が始まつた翌年の昭和三十三年(一九五八)年二月、湘南高校を悲運が見舞つた。当時の「湘高新聞」はこう報じている。

「二月二十四日、午前三時三十分ころ、南側定時制職員室付近から出火、折から

の異常乾燥も手伝つて、およそ一時間にわたつて燃えつづけ、本館木造二階建て延べ千百八十三平方メートルと卓球場、運動部部室、柔道場などを焼き、四時三十分鎮火した」
サッカー部の部室も全焼する。朝夕、知らせを聞いて駆けつけた部員たちは、一夜にして何もなくなった光景に声も出ない。残るは土台のみ。その土台のあたりに、黒焦げになつたスパイクを認める。が、どれも子供用と見紛うほどに縮まり、そっくり返つていた。ボールも練習着もユニフォームもネットも、灰となつた。三十四回生の番場定孝はこう振り返る。
「たしかその翌日だつたと思いますが、ライバル鎌倉学園サッカー部から数個のボールが見舞いとして届けられました。そのボールを大事に蹴り、まだ消火の水溜りが残るグラウンドで練習を始めました。一面に焦げ臭いにおいが漂つていたのを忘れません」

松川校長は、「困難を克服しよう」と全校生徒に呼びかけた。サッカー部員の練習にもぴりりと締まつた空気がつづいた。

困難の克服といえば、貧しい黒人家庭に生まれた十七歳の少年の記事が新聞スポーツ面に躍つたのはこの年の六月のことだつた。スウェーデンのストックホルムで開かれた第六回ワールドカップ決勝戦で、ブラジルが5・2で地元スウェーデンを破り優勝した。その原動力となつたのが、この大会でデビューした少年、エドソン・ド・ナシメント。その本名より知

られる通称は、サッカーの王様ペレである。ほとんど無名の、日本の高校生と同じ世代のペレは、才能を見込まれナショナルチームに選ばれた。その期待どおり、ワールドカップデビューの決勝戦で神技を連発し、観客席を熱狂させた。

マツチをくわえ

煙草で火をつけたガンブチ

就任した宮原監督の、「半世紀のなかで最も低迷していた」が、「いつかはなんとかすると雌伏の時代」という思いを実らせたのは昭和三十五（一九六〇）年だった。宮原監督が、「三年計画で強化した」というチームは、結果を出しはじめ、九年ぶりの神奈川県下優勝も果たすに至っていた。

その夏、関東大会が開催される。戦前から開かれていた関東大会は戦争をはさみ、戦後まもなく再開され、いったん途切れ、昭和三十三（一九五八）年「関東高校サッカー選手権大会」として、新たな大会に生まれ変わった。戦前は冬の開催だったが、戦後は夏に開催されるようになる。一都七県から選ばれたチームによって、開催地は持ち回りと決まった。同大会に湘南は出場権を得る。しかし、決して楽な道ではなかった。県からの出場枠は三校、湘南は準決勝で栄光学園に敗れ、三位決定戦で小田原高校を下し、三校枠すれすれで臨んだ本大会だった。

開催地は茨城県水戸市。初戦、東京の城北高校を撃破するが、二回戦が難敵だった。県立浦和高校である。三年前に定期戦の企画が始まり、第一回から直前の第四回まで完膚なきまでに倒されて四連敗していた。サッカーどころ埼玉のなかでも県立浦高は強豪で、前年の関東大会では市立浦和高と両校優勝を達成していた。

だが、おおかたの予想を裏切って開始直後から湘南の攻撃が冴えわたり、優勝候補はたじたじとなる。終わってみれば、5・1という大差で湘南の勝利となった。三回戦秩父高校（埼玉）を退け、準決勝川口高校（埼玉）とは両校無得点で抽選（当時はPK戦がなかった）により湘南の決勝戦進出が決まる。川口高校のゴールキーパーは、のちのメキシコオリン

ピックの銅メダリストキーパー横山謙三だった。

「どうりで点がいらなかったわけです」

キャプテンでポイントゲッターの丸屋喬（三十六回生）はそう回顧する。

そして、いよいよ決勝戦。相手は市立浦和高校。その春に遠征の練習試合で大敗しているチームだったが、臆することなくのびのび戦い、湘南は先取点を奪う。しかし前半終了まぎわに同点を許し、後半二十九分決勝点をあげられ、無念のタイムアップ。

優勝こそ逃したが、宮原監督のいう「雌伏の時代」をこつこつ努力してきた成果の準優勝、誇りは高かった。なかでも感慨深かったのは、二回戦の県立浦高との戦いだった。優勝候補の筆頭であるのもさることながら、定期戦四連敗の屈辱がある。強い意気込みで始まったそのゲーム、つづげさまに2点を湘南がリードした。

「落ち着け！ 落ち着け！ と選手たちに大声をかけながら、ご自分はマッチをくわえ、火のついていない煙草でそのマッチに火をつけようとしておられたのは岩渕先生でした」と宮原監督は証言し、こうつづける。

「みごとな快勝をみやげに、応援団の持つ校旗、団旗を囲んで、炎天の水戸の空高く凱歌をあげて勇躍宿舍に引き上げたものでした」

名門湘南復活、と神奈川新聞もその健闘を讃えた。





国体準優勝メンバー [昭和23 (1948) 年]



昭和24 (1949) ・ 25 (1950) 年メンバー



昭和23 (1948) 年春のメンバー



埼玉県浦和中学との定期戦に臨む [昭和23 (1948) 年]



初めての教員監督 宮原先生と「昭和35(1960)年」

[illegible]

関東大会準優勝の軌跡・メンバー表 [昭和35 (1960) 年]



東日本選手権大会出場プログラム
[昭和28(1953)年]



昭和31(1956)・32(1957)年風景



鈴木中監督の 二十余年間

昭和三六（一九六一）年～昭和五九（一九八四）年



サッカー狂校長が 熱く動いた

史上初の有色人種国家におけるオリンピックである東京五輪が、昭和三十九（一九六四）年に開催されると決まった。第十七回ローマ大会閉幕後の昭和三十五（一九六〇）年あたりから、いよいよ現実的な熱気を帯び、社会の各方面に変化が生まれてきた。

湘南サッカー部にもその影響が生じる。関東大会準優勝を導いた宮原監督が、来るべき東京オリンピックの準備に携わるため、湘南高校の体育教師から教育委員会へ異動となったのだ。思いがけず、サッカー部は監督不在の成り行きとなる。しかし、

その対応策が疾風のように迅速だった。原動力は香川幹一である。

昭和三十六（一九六二）年一月に松川昇太郎校長が勇退し、かわって第五代校長に就任したのが香川幹一だった。香川は平沼高校長からの異動だったが、かつて湘南中学時代に敏腕の社会科教師（専門は地理学）として過ごした実績があった。赤木初代校長の薫陶を受けた香川は、校長就任にあたりこう語った。

「時代にふさわしい人間を育てるといふ赤木校長のモットーを、新たな観点から応用したい。その場その場でベストを尽くすことだけが僕のとるべき態度である」

熱い所信表明だ。その信条は勉強だけでなく、サッカーにも注がれることになる。そもそも香川は湘南中の社会科教師時代、サッカー部の部長を引き受けていた。選手の経験はなかったが、押しも押されもせぬ「サッカー狂」であった。既述（第二章）のように、戦後間もない昭和二十一（一九四六）年十一月に開かれた第一回国民体育大会の中学校蹴球の部で湘南中が優勝、積年の夢だった全国制覇を果たしたときの部長である。「あの感激は生涯忘れることはない」。のちに、喜寿を迎えた折のエッセイにも晴れやかに誇らしくそう断言している。

そのサッカー狂校長は、赴任まもなくフットワークよく動いた。宮原孝雄が東京オ

リンピックの準備要員として教育委員会に移り、不測の空席となったサッカー部監督、四月となり新学期が始まって後任は決まらない。香川はその現実を捨て置かなかった。指導者の重要さを肌で知っていたからだ。

人脈の広がった香川は思案し、そうだ、あいつだ、と古くからの友人である東京教育大（現・筑波大学）体育学部長に相談を持ちかけ、事情を説明する。

「なるほど。それなら、ふさわしい男がいるぜ」

「ほう。どういう人？」

体育学部長の告げたところによると、こうだった。東京の都立高校でボールを蹴り、全国大会に出場し、東京教育大に進学して一年生からレギュラー。四年生でキャプテンを務めた。彼の時代は華々しくて、関東リーグやインカレで優勝し、天皇杯でもベスト十六まで進んだ。

「で、卒業後は？　すでに仕事している？」

「いや、遊んでいるよ」

「ぶらぶら？」

「見た目はそうだが、本人はどうやらサッカーを究めようというつもりらしい」

京都大学の聴講生として心電図を使つての「サッカー技術の分析」などを研究している。選手としてひきつづきボールも蹴っている。教員資格はあったので教員チームである京都紫光クラブ（パープルサンガの前身）に所属し、エースとして活躍中だという。

よし、それ、ゲットだ。香川は決断する。京都教育委員会を訪ね、紫光クラブも訪ね、精力的に動いて内諾を取りつける。そうして外堀をこんもりと埋めておいてから本人に会い、単刀直入に申し入れた。神奈川県湘南高校という学校がいかによばらしい校風か、どれほど熱い心を持ちサッカー部に長き深き伝統があるかを説き、ついでに貴殿の力を借りたい。穏やかな語り口だが有無をいわせぬ気配である。プレゼンテーションされたほうは異論をはさむ余地もなかった。

「わかりました。来月、藤沢に行きます」

一ヶ月もたたない四月中に即決の後任監督である。現在では思いも及ばぬ、校長の人事権の強さもあったが、香川の情熱のまっすぐさに吞まれたことが承諾の要因であったにちがいない。

こうしてサッカー狂校長が京都からスカウトしてきた新人の、そして以後、着任

二十八年間を過ごすことになる鈴木中監督は、桜の花の散るころ、めまぐるしく誕生したのである。

お引き受けした以上 私のチームを作ります

昭和三十六（一九六二）年五月、鈴木中は体育教師であり、サッカー部監督として赴任先の湘南高校に到着した。藤沢は生まれて初めて訪れる地だった。木造の駅舎を出てすぐ目につく二軒の駅前旅館の印象が強く記憶に刻まれたという。

当時、三年生のキャプテンとして新監督を迎えた三十七回生の牧村英樹は、

「いきなり職員室に呼び出しを受けました」

なにごとかと内心穏やかでなく向かうと、開口一番、

「おまえがキャプテンか。おれは新監督の鈴木だ。最近のサッカー部の戦歴を述べよ」

鼻っ柱の強い、おっかない監督がきたもんだ。牧村キャプテンは警戒半分、期待半分の印象を抱えて職員室を出る。そして当日から始まったグラウンドでの練習は、戸惑い半分、目からウロコ半分だった。何やら新しいことが始まる、という予感。日を追うごとに強く感じられるようになる。鈴木中の「中」は「ただし」と読むが、どう見てもチューとしか読めない。新監督の愛称が「チューさん」となるのに時間はかからなかった。

新メンバーでの選手たちが新監督によって目を開かされたのは、「流動性のあるフォーメーションの重要性」だった。フィールド（ピッチ）を広く使い、攻守の切り替えをすばやくし、くるくるポジションチェンジを行なうパス&ゴールのサッカー。キャプテン牧村たちにとって、まことに新鮮なスタイルだった。それをこなせる走力をいっそう強化するため、インターバル走などの練習メニューも加わった。

関東大会準優勝のあと、やや低迷の気配を見せていたチームは、ここで様変わり

した。それは、同年九月に秋田で開催される第十六回国民体育大会の県予選に結果として表われる。初戦から勝ち進み、決勝戦で慶應高校を1・0で破り、県代表となったのだ。

ここで、湘南サッカーの国体出場と第五代校長香川幹一とのきわめて濃い縁にふれておこう。昭和二十一（一九四六）年の第一回大会で湘南中学は全国制覇、そのときの部長が香川幹一であったことはすでに触れたが、じつは同チームのキャプテンは香川の長男、嵩（二十二回生）だったのだ。さらにその二年後の昭和二十三（一九四八）年の第三回大会にも新制湘南高校として出場、チャンピオンを逃しこそすれ準優勝しているのだが、香川の次男、稔（二十五回生）がそのメンバーの一員だった。以来、十三年ぶりの出場となったのが第十六回大会である。なんと、この大会にも香川の、次男とひと回り以上も年の離れた三男である彰男（三十八回生）が二年生の選手としてメンバーだったのである。

全校生徒の前で壮行会が開かれた。そこであいさつに立った香川幹一校長は、

「えー、まことに個人的な話になりますが……」

と切り出した。激励して送られる選手の一員であり、香川家の三男坊である香川

彰男は、「あ、始まるぞ、おやじったら……」と顔を伏せた。案の定、校長は湘南サッカー部の三人の息子、香川三兄弟と国体の関わりについて全校生徒の前で語った。

「公私混同もはなはだしい、とまことに恥ずかしい思いをしました」。と三男坊は語るが、それほどに奇縁であることは確かだった。

秋田まごころ国体と銘打った、まさに全県あげてのもてなしを受けて臨んだその本大会だったが、一回戦で山形県代表の鶴岡工業高校に延長戦のすえ惜敗した。試合が終わり、幌つきの自衛隊のトラックに乗せられて宿舎に帰ったときの辛さを香川彰男は忘れることはない。

秋田国体から戻ってすぐに、第四十回全国高校サッカー選手権大会の県予選が始まった。一回戦敗退だったとはいえ国体に出場した自信と昂揚は選手たちにつづいており、トントントン拍子に勝ち進んだ。そして、その当時つねにしのぎを削っていた相手、小田原高校との決勝戦。1・0で接戦を制し、これまた二十三年ぶりとなる出場を決めた。

が、またしても本大会の一回戦で敗退する。こんどは0・5、力でねじ伏せられた完敗だった。相手がわるかった。直前の国体を制覇していた広島県代表の修道高

校である。実力は頭ひとつ抜けており、結果としてその全国大会も優勝杯を勝ち取ったチームだった。有力選手の一人、森選手は、のちにメキシコ五輪で銅メダルの快挙をなしとげた日本代表チームの森孝慈。

つづけざまの一回戦負けとはいえ、全国レベルの大会出場を果たしたのは、鈴木中の新監督効果が大きかったが、精神的支柱でありつづける岩渕二郎ガンブチとの絶妙なタッグが機能したことの証左でもあった。

ずっとあとになって鈴木中は回想している。

「赴任してほどなく、岩渕先生にこう宣言しました。私が指導者としてお引き受けした以上、私のチームを作ります」

決意表明である。ここはうやむやにしていけないという新進監督の直截な態度に、ガンブチは一瞬だけだが言葉をつまらせた。お、若いだけあって向こう意気の強いやつだ、と戸惑ったか。お、なかなか頼もしいじゃないか、と感心したか。その両方だっただろう。

「岩渕先生のすごいところは、以後、いかなる浮沈があろうとも、一度たりと私の指導方針に口をはさむことなく、つねに態度を変えず支えてくださったことです。

大きな人でした」

鈴木監督、岩渕総監督という体制が暗黙のうちに決まり、このタッグは力を深めていった。

日本サッカー育ての親 ドイツのクラマー

昭和三十九（一九六四）年の東京オリンピックは、さまざまな価値を日本に与えたが、サッカー界にもある革新がもたらされた。それは、ひとりのドイツ人によるものだった。デットマール・クラマーである。

日本サッカー界初の外国人コーチ、サッカー日本代表の基礎をつくり、「リーグ戦

形式にしなければ日本の強化は望めぬ」と提言し、日本サッカーリーグ（JSL・一九六五年発足、一九九二年Jリーグへと発展解消）の創設にも尽力したところから、

「日本サッカー育ての親」

と称された指導者デットマール・クラマー（一九二五——二〇一五）。生まれはドイツのドルトムント。十六歳にして名門「ボルシア・ドルトムンド」に入団し、ドイツ・ユース代表候補にも選出された。が、すでに第二次世界大戦が始まっており、まもなく兵役に。敗戦後に東西に分裂した母国の西側（ドイツ連邦共和国）に戻り、サッカー指導者として歩み始める。西ドイツ・ユース代表監督を務めた時期に、十八歳のフランツ・ベッケンバウアー選手を公私両面から育て上げたことで知られる。

その名将クラマーが昭和三十五（一九六〇）年、四年後に控えた東京オリンピックのサッカー日本代表を指導するために日本にやってきた。外国人の、しかも三十六歳という若さの男をコーチに招聘するなどは、と日本サッカー協会の内部には根強い反対があったが、当時の第四代会長・野津謙（広島県出身・医学博士でありサッカー指導者）の英断で実現した。野津は西ドイツまで訪れ、直接クラマーと会い、そ

の人となりに惚れこんだのだ。そして、その年の秋、西ドイツの名将は日本の地を踏んだ。

指導が開始されて、選手たちが戸惑ったのは、その指導がヨーロッパの高度な戦術などではなかったことだ。来る日も来る日もインサイドキックやインステップキック、トラップ、ヘディングの基礎練習ばかり。「はるばるドイツから呼んでこれか」と首を傾げるスタッフも出始めたが、クラマーが実際にやってみせる基礎技術のあまりの正確さに、その不満はまもなく消える。

「順番で考えよう」

と名将はドイツ人らしくロジカルに言う。

「いちばん大事なのは試合に勝つことだ。試合に勝つために必要なのは実戦練習だ。その練習を実りあるものにするのは基本のスキルだ。あなたたちに、やや欠けているところは基本である。それを徹底的にやろう」

協会会長の野津が見込んだとおり、日本のサッカー選手たちに強いインパクトを与えたクラマーは、一時帰国して、すぐに翌年、再来日する。そこで濃い縁ができたのは藤沢市だった。

正しいことを 身につくまで繰り返す

昭和三十七（一九六二）年、第七回FIFAワールドカップが南米チリで開催されることになっていた。そのアジア予選が前々年から行なわれる。アジア連盟からは日本・韓国・インドネシアの三チームが参加したが、インドネシアが出場を辞退し、日本と韓国との一騎打ちと決まった。ホームアンドアウェーの二試合を行ない、勝者が大陸間プレーオフに進出するという手順である。第一試合はソウルで行われ、2・1で韓国の勝利。そして舞台を東京に移した第二戦が、昭和三十六（一九六一）年六月十一日と決まる。

背水の陣のその戦いを控え、日本代表チームは強化合宿を組んだ。指導者はもちろんデットマール・クラマーだったが、合宿地に選ばれたのは藤沢市善行の神奈川県立体育センターである。高級ゴルフ倶楽部のクラブハウスをルーツとするスパニッシュ様式の合宿所という環境が選定の決め手となった。こうして平木隆三、八重樫茂夫ら古河電工のメンバーを中心とした代表選手とクラマー監督の一週間が始まった。

この合宿に、湘南高校赴任直後の鈴木中もスタッフの一員として協力したのである。近くに勤務する教員であり、サッカー選手としての実績が高いことによって教育委員会から要請を受け、望むところだと快諾しての参加だった。グラウンド上はもとより、それ以外の「雑事」にも献身的に協力していくことになる。練習後に筋肉や関節を冷やすというのは、現在でこそ常識となっているが、当時は選手もスタッフも初体験。クラマーの指示はこうした細部にもおよび、実際にケガを防いでトレーニング効果も上がった。

「毎日のように藤沢本町の氷屋で大きな氷を買い、リヤカーで運んだものでした」鈴木中はそう振り返る。もちろん、クラマーの指導法にじかに触れたことの収穫は限りなく大きかった。主旨を集約すれば、こういうことだ。

「正しいことを身につくまで何回も繰り返せ」
正しく回りを見ること。正しくボールに寄ること。正しくボールを止めること。正しく蹴ること。

それは湘南サッカーを以後率いていくにあたっての、鈴木中監督の指導の根幹ともなった。

しのぎを削ったライバル 鎌倉学園高

県内で優勝し、国体、高校選手権とつづけて出場した昭和三十六（一九六二）年だったが、翌年の選手権の県予選で慶応に敗れたことから、やや下降気味となる。

だが、各メディアが県内の強豪チームに湘南高の名を挙げるのは変わらなかった。全国の高校入学生の数に顕著な変化が現れたのは、ちょうどそのころだった。戦後のベビーブーム、「団塊の世代」である。彼ら彼女らが中学校を卒業する昭和三十八年度、全国の高校進学者の数は前年比三十三パーセント増となる百六十万人に膨れ上がる。湘南高校の入学定員も従来の四百十名から一挙に五百四十名に増え、五十四名の十クラス制がとられた。教室だけでなく運動部にも新入部員が増え、サッカー部は例年の数倍の人数を受け入れることになる。

戦後からずっと湘南サッカー部のライバルとしてよく意識されていたのは、希望ヶ丘高校（横浜一高）、小田原高校、慶応高校といったチームだったが、昭和三十八（一九六三）年ごろから、しのぎを削るチームが特定されるようになった。鎌倉学園高校である。チームカラーは対照的で、パワークッカーの湘南に対してキック＆ラッシュの鎌学だ。パスがくるくる回り湘南が鎌学を翻弄したまま完勝することもあれば、パワープレイに持ち込み怒涛のようになだれ込む鎌学が湘南をねじ伏せて圧勝することもあった。

ねじ伏せられた例のひとつを挙げれば、昭和三十八（一九六三）年の全国選手権の

神奈川県予選の準決勝である。鎌倉学園には目立ったエース、吉水法生選手がいた。十二歳までチリで育ち、南米仕込みのサッカーが身についていた吉水はのちに日本代表選手として活躍した選手だった。彼の個人技で守備陣が崩され、終わってみれば0・3の完敗。翌日の朝刊の神奈川版にはたった一行、「鎌学、順当勝ち」と記された。が、その朝刊はそんな小さな記事など吹き飛ばすようなビッグニュースで全ページが満たされていた。アメリカ・テキサス州ダラス市内をパレード中の第三十五代アメリカ大統領J・F・ケネディが頭部に銃撃を受け死亡する。ニューフロンティア政策を掲げて華々しく登場した若きプレジデントの暗殺は日本国内にも大きな衝撃を与えた。

県予選決勝戦で いつか見た悪夢の再現

昭和三十九（一九六四）年十月十日、東京オリンピックは開幕する。マラソンの円谷幸吉、バレーボールの東洋の魔女などなどの話題を日々提供した二週間、サッカー競技は、十四ヶ国での開催となった。四グループの上位二ヶ国が決勝トーナメントに出場という方式である。

日本チームには、かねてより大器として期待され、指導者デットマール・クラマーも高い評価を与えていた二十歳の早稲田大学生釜本邦茂選手が代表入りとなった。地の利を生かし、準々決勝まで駒を進めたが、チェコスロバキアに完敗。

二週間にわたった五輪の聖火が消えても、国中に興奮の余熱と虚脱感がいつまでも漂った。そうしたなか、全国高校サッカー選手権の県予選は終盤に差ししかかっていた。湘南は決勝戦に勝ち進む。相手校は、やはり鎌学であった。この決勝戦に思いがけないことが起きた。まさに思いがけないことだが、じつは湘南サッカーにとつて、その思いがけないことが「この道はいつか来た道」という体験であったところが、いっそう思いがけないと言わざるを得ない。

十六年前の昭和二十三（一九四八）年、第三回国民体育大会でのこと（三章に既述）。新制なった湘南高は決勝戦で広島大学附属高と戦う。だが、相手校が時間になってもやってこない。大会本部は湘南の不戦勝を宣告したのだが、「ちゃんと戦って勝ちたい」とそれを拒み、遅れてくる相手を待つてゲームを始める。結果は敗北。これが悔しい全国準優勝だったわけだが、十六年後の県予選決勝で、まさかそれが再現されるとは。

宿敵鎌学とのゲームを前に、ウォームアップをしていた湘南チームは次第に集中力を欠いてくる。鎌学の選手の姿がいつこうに見えないのだ。「不戦勝か」。十六年前と違った点は、ここでその成り行きを大いに歓迎したところである。メンバーたちは、全国大会出場決定瞬間の歓びに満ちていた。そこへ、鎌学メンバーが遅れてやってくる。規定のキックオフ時間を十五分過ぎていたが、大会役員は試合成立を選んだ。三年生のキャプテン、守備の要であった山田仁夫（四十回生）は、こう振り返る。

「半信半疑のままに遠くのほうに聞こえる試合開始のホイッスル。たてつづけに揺れる自軍の白いネット。いつもは置いていかれたことのない相手CFのスピードについていけず、呆然と立ち尽くす自分。全部がスローモーションの悪夢のように蘇ります」

終わってみれば、1・4の大差で敗退。手元まであった全国大会のキップは奪い去られた。

キャプテン山田は、闘志の選手だった。こんな逸話がある。県大会の対横浜商高戦。自陣ゴール前にあがったボールを相手のセンターFWと頭で競り合う。ガシッと鈍い音がして両者は地面に落ちる。相手はうずくまったままだが、山田は立ち上がる。顔面が鮮血。額がパッキリ割れていた。傷の深さが尋常でなく、すぐに近くの病院に運ばれたのだが、翌日、包帯をぎりぎり巻きにして部室に現われる。その包帯を解いて「ほら、これ見てみる」と縫い合わせられた傷口を部員たちに自慢げに見せた。大きなYの字に額が割れている。相手チームの横浜商高は校章のデザインからY校の愛称で呼ばれている。「Y校とやったしるしにY、山田の頭文字でY、すげえだろう」。自慢はそのことだったのだ。

関東制覇と ガンブチのパチンコ

三年生となったベビーブーマーたちをメンバーとしたチームが結果を出したのは、同年夏の第八回関東高校サッカー選手権大会である。予選を兼ねた県下高校総合体育大会で、下馬評では優勝最有力候補とされながら、またしても鎌学に決勝戦で惜敗。関東大会へは県から四校の出場枠があったから代表とはなったが、やや複雑な気分の本大会出場となった。開催地は、五年前のチームが第三回大会で準優勝を果たした茨城県水戸市である。七月中旬で梅雨は明けたはずなのに雨の多い大会となった。一回戦は東京代表大泉学園高。前夜からの激しい雨で、グラウンドはまったくの泥濘だ。ボールを蹴るといふより田植えをしているかのような展開となった。ゴールキーパーの佐藤良（四十一回生）は、コンタクトレンズが普及していなかった時代だったので眼鏡着用のキーパーだった。どしゃ降りの雨はレンズに滝のごとく流

れる。後輩の一人がゴールポスト脇に立ち、何度も何度も拭いて渡すのを繰り返した。ゲームは1・1のまま延長でも決まらない。当時はPK戦がなく抽選による決着だった。四十一回生のキャプテン井手修二（現・二本）の引いた籤は「二回戦進出」。これが弾みをつけた。

二回戦は打って変わった強い日差しの中、千葉県代表県立千葉高に大量四点をとり、圧勝する。同大会に向けて湘南高は、鈴木中監督の指示によりスイーパーを置いたユニークなフォーバックの四・二・四システムを初めて試みていた。これが的中する。当時の主流のシステムはWMだ。相手の守備はマークする選手に戸惑い、乱れる。三回戦の優勝候補の一角だった埼玉代表川口高校にもそれは有効だった。2・0の完勝。が、栃木代表宇都宮学園高との準決勝は苦しい試合となった。体格的にまさる相手の激しいチャージを受けて主導権を握れない。後半、終了間際、ゴールネットを揺らされ湘南は天を仰いだ。オフサイドの判定。そのまま延長戦にもつれこむ。延長前半、湘南、左からのコーナーキックをポイントゲッター関口真（四十二回生）がきれいなジャンプヘッドを突き刺し、これが決勝点となった。三年生主力のチームでたった一人の二年生であった関口はずばぬけた選手だった。のちに、慶応

大学に進み、住友金属に就職し、どちらのチームでもエースとして活躍する。Jリーグ創設にともない鹿島アントラーズのチーム作りにも貢献した。やや時期が合わなかったが、もうすこし後に生まれたなら、まちがいに初期のJリーグをしょってたつ選手だったろうと鈴木中監督は振り返る。

さあ、決勝戦だ。東京代表帝京高校。スキルの高いチームであり、さらにCFに百九十センチを超える超長身の選手がいた。当然ながら彼が空中戦にめっぽう強く、攻撃のポイントをつくり、それまでの試合を勝ち進んできていた。彼を自由にさせない変則のフォーメンションが前夜のミーティングで話し合われる。それは見事に機能し、早い時間にフリーキックから得た湘南の一点がゲームの流れを決める。前がかりに攻めてくる帝京をことごとく潰し、カウンターで果敢に追加点を狙い、ペースを相手に渡さないまま1・0でタイムアップ。関東制覇となった。

後日譚がある。岩渕二郎のパチンコだ。

ガンブチのパチンコの腕は定評があった。老練の刑事のようなレインコートを羽織り、無造作なレインハットを被ってパチンコ台に向かう姿は絵になった。関東大会の大会中も、日課として試合が終わって夕食までのあいだに宿の近所で軽く打ってく

る。抽選勝ちした一回戦の夜、「ほら、運も実力のうちだ」とどつさり景品のチョコレートを持ち帰ったのを皮切りに、勝ち進むたびに景品が上乘せされていく。そしていよいよ明日は決勝戦という夜、「打ち止め三台だ、滝の如く出た」と、選手たちが目を丸くする量のチョコレートを持ち帰った。おれたちにツキがある、と選手たちはころりと暗示にかかった。大会が終わり、ずつとあとになって彼らは不審をおぼえはじめる。あのチョコレート、怪しくないか。準決勝前夜あたりから、紙袋にパチンコ店でなく菓子店の名前が見えやしなかったか。真偽はいまも不明なままである。

伏兵・頭脳の湘南

一回戦で散る

その年の十月、五年後の一九七〇年に開催が決定していたアジアで最初の国際博覧会「大阪万博」のテーマが決まった。「人類の進歩と調和」。一九六四年の東京オリンピック以来のこの国家プロジェクトは、戦後高度経済成長を進め、アメリカにつぐ経済大国となった日本が世界に発信するビッグイベントという位置づけだった。

翌年の正月に開かれる第四十四回全国高校サッカー選手権大会の県予選は、十月から始まった。湘南高は関東大会優勝からいったん三年生が退き（受験を控えた進学校の不文律のような習慣があった）、一、二年生による新チームで臨む。中心となったエースは、関東大会でただ一人の二年生として優勝に貢献した関口真だ。順当に勝ち進み、決勝戦は茅ヶ崎高校。先取点を取るも追いつかれ、苦しい試合運びとなったが、2・1で辛勝し、全国高校サッカー選手権出場が決まった。

本大会まで一ヶ月余り、「二年の夏で退く」という習慣を破り、矢も楯もたまらずという勢いで五人の三年生がカムバックを申し出る。多少のギクシャクはあったものの、チーム力の向上のためには小さな軋轢であった。全国大会へ向けて、ふたたび構成された新チームは組織力の充実を図った。

本大会は、昭和四十一年（一九六六）年一月、大阪、神戸、京都の三会場で全国高

校サッカー選手権大会が開催される。参加する湘南高チームは、二年前に開業したばかりの「夢の超特急」東海道新幹線に乗り、胸を高鳴らせて遠征した。

大会前年の師走の毎日新聞に、大会予想の記事が掲載された。「川口工高（埼玉県）、藤枝東校（静岡県）が有力、実力接近で混戦模様」との大見出しの横に、小見出しがこうあった。

「伏兵・頭脳のチーム湘南」

関東制覇の直後ということで注目されていたのだ。

正月三日、西京極競技場での第一回戦、対戦相手は滋賀県代表の甲賀高校。終始押され気味のゲーム展開となったが、決定的なチャンスはむしろ湘南に多く、とりわけ終了直前、フリーキックのどんぴしゃりのボールを一年生加納正道（四十三回生）がヘッドイングしそこだったのは惜しまれた。延長戦で決着を見ず、両校無得点のまま、抽選となる。チーム全員に関東大会の記憶が蘇った。「幸運よ、ふたたび」の場面であるが、キャプテン広野三夫（四十二回生）は引いた籤をグラウンドに叩きつけて悔しがった。一回戦敗退。翌日の毎日新聞はこう報じる。

「西京極の湘南・甲賀戦は、甲賀が強引な突っ込み、湘南は揺さぶり戦法で相対し

たが、肝心の詰めが悪く、延長に入っても一進一退。攻撃に計画性がなかったのと軟弱なグラウンドのため、双方の持ち味が生かしきれなかったのがもつれた原因だが、チーム力が互角だっただけに、抽選負けした湘南の不運が惜しまれる。」

神奈川新聞に「ヘッディングシュート、惜しくもはずれる」のキャプション付きの証拠写真が掲載された加納はこう述懐する。

「惜しい、と書いてくれています。ボールが私の頭のはるか後ろを通っているのはつきり写っています。あてずっぽうにジャンプしていたのがありあり。とても恥ずかしい思いをしました」

恥ずかしくはあったが、一年生の加納選手にとってさほど悔しいことではなかった。来年も、またその翌年も来られることを疑っていなかったからだ。神奈川県では常勝の湘南だったのだ。しかし、現実はその甘くはなかった。まるで、西京極の抽選負けで癖がついたかのように、そのあとの県内新人戦、高校総体予選と抽選負け。代は変わっていくことになるが、その不運が呼び水となったか、ゆるやかな下降曲線を描く戦歴がつづいていった。

史上初の

女子マナージャー誕生

イギリスはリヴァプール出身の、世界を揺るがした音楽グループ・ビートルズが東京の日本武道館で公演を行なうため来日したのは、湘南サッカーが正月の全国大会で一回戦抽選負けを喫したその昭和四十一年（一九六六）年の六月だった。国民的な騒動となったが、同じ年の九月にも世界的な著名人の初めての来日があった。慶応大学の招きで訪れたフランスの哲学者であり作家のジャン・ポール・サルトルと、女性作家のシモーヌ・ド・ボーヴォワールである。「契約結婚」という関係を公表する二人だったが、ボーヴォワールの代表作『第二の性』の一節「人は女に生まれるのではない、女になる

のだ」という言葉が日本のメディアで大きく取り上げられ、「女性と社会」の話題が一気に沸騰した年でもあった。

それと強引に結びつけるつもりはないけれど、湘南サッカー部に史上初めての女子マネージャーが誕生したのもこの年である。

大正十（一九二一）年に男子校として開校した湘南中学が、学制改革を経て湘南高校となり、男女共学を開始したのは昭和二十五（一九五〇）年だった。が、女子生徒はクラスに数名という時代はずっとつづき、サッカー部に女子マネージャーなど影も形もなかった。したがって、四十四回生の小泉治子は颯爽たるパイオニアということになる。三人兄妹の末っ子であり、長兄（三十九回生小泉親昂）と次兄（四十一回生小泉親種）の背中を追うように湘南高校に入学した治子は、その学校で二人の兄が所属していたサッカーに大いに興味があった。

「中学ではテニス部でしたが、きっと兄たちの影響でしょうね、やるならサッカーしかない」と漠然と考えていました」

けれども、女子サッカーなどない。なんとかしてサッカー部に入部する方法はないものか、と思いつめる。そのころから、とくに野球で少しずつ出始めていた「女子マネージャー」と

いう在りかたに目をつけたが、どうしてよいかわからず、同じクラスのサッカー部員をつかまえては、「わたしマネージャーになりたい」と言い募っていた。一年生の夏休み明けに、それは実を結ぶ。マネージャーが不足している、きみ、やらないか、とクラスメイトから打診されたのだ。即座に引き受けた。

「でも、念願かなっても何をしたらいいかわからず、選手の練習を堂々と見る権利ができたことをよろこび、ただただ部室の前に立っている毎日でした。それでも本人はとてもしあわせでした」

練習内容をノートにつけ、時間を計る必要あればストップウォッチを握り、部室を掃除し、ボールの紐を調達し（当時、ボールは紐で編んでいた）、合宿ではいっしょに泊まれないので、毎日、朝食に早朝から通ったりなどなど、「とにかく一生懸命でしたが、どれだけ選手の役に立ったかは自信ありません」と初代女子マネージャーは振り返る。卒業時に、こう発言した。

「試合に出ている選手は自分だけで試合をやっていると思わないでほしい。補欠の選手もマネージャーもみんなで戦っているので、試合に出ている選手はその代表なのだということを忘れないでほしい」

その発言の背景には、「自分もプレイしたい」という歯がゆい思いの三年間があったのだ。

メキシコ五輪の銅メダル そして大学紛争

東京オリンピックから四年後の昭和四十三（一九六八）年にメキシコオリンピックが開かれた。サッカーの開幕は十月十三日。日本代表は、ザールブリュッケンに短期留学してFWとしての決定力を増強させた釜本邦茂が自他ともに認める攻撃の中心のチームだった。守備で奪ったボールを中盤につなぎ、組み立て、最後はLWの杉山隆一が釜本へボールを合わせる、という筋書きが徹底的に磨かれた。準決勝でハン

ガリーに大敗を喫し、三位決定戦。相手は開催国メキシコ。圧倒的なアウェイの競技場でゲームは始まり、日本は防戦一方となる。しかし、「粘って守ってカウンター」こそ磨いてきた戦術であり、それが面白いように決まって、日本、銅メダル獲得！当時のオリンピックのサッカーでは東ヨーロッパ以外のチームがメダルを取るのには珍しいこと、ましてアジア勢でのメダルなど驚天動地であった。FIFAから派遣されてオリンピックを視察していた「日本サッカー育ての親」デットマール・クラマーは、かつての教え子たちの健闘に、「このように全員が持てる力をすべて出し尽くす光景を見たのは、正直なところ初めてだ」と驚きを隠さなかった。

同じころ、新聞紙上を賑わしたのが大学生の全共闘運動だった。メキシコでサッカーの決勝戦が行われる五日前の国際反戦デーで新宿は大荒れとなる。多くの学生に騒乱罪が適用される。そして翌年の一月、全共闘が東大安田講堂に立てこもり、これを排除しようとする機動隊と攻防が二日間つづいた。

大学紛争は高校へも波及していく。学内問題として紛争が繰り広げられはじめ、警察庁の発表だけでも二十一都道府県、五十六校に及び、神奈川県下でもバリケード封鎖という明らかに大学生に影響を受けた過激なものへと発展する学校も出てき

た。湘南高はどうだったか。ビラが飛び交ったり、闘争的な集会が開かれたり、あるいはバリケード封鎖といった現象は起きなかった。問題意識が膨らむっぽうだった「改革」に関して、教師二十名、生徒百余名の集まりで「総合座談会」が開かれたのが唯一の動きではあった。『湘南五十周年記念誌』によれば、こうある。

「この座談会を通じて謙虚な自己批判を決して失わない湘高生の真摯な発言に接した。高校紛争の中で、ついに紛争の形をとらずに発展を勝ち得た根本の理由を、その姿に見出していたのは職員の等しくする想いだった」。

相工大附属高が 名選手を輩出

関東大会優勝、全国大会出場の実績をあげたあと、湘南サッカーは少なくとも記録に残る形ではめざましい戦績を残せない年がつづいていく。

そうしたなか、神奈川県の実力校として、昇り龍のごとく頭角をあらわしてきたチームがあった。相模工業大学（現・湘南工科大学）附属高校である。ふいにあらわれた、という唐突感がこのチームにあった。それは神奈川県サッカー協会発行（昭和五十三年刊）の『協会創立五十周年記念誌』にも表われている。年代を追って社会人の部、大学の部、高校の部、中学の部と各分野の戦歴が報告されているのだが、高校の部のなかで興味深い記述がある。湘南、小田原、慶応、鎌学、といった名がわかるがわる登場する昭和の年代記がつづくうち、ふいに次の一行となる。

「昭和四十四年、この年は相模工業大学附属高校が次第に地力を出し始めた黄金時代ともいえる」

それまでまったく触れられてもいなかった校名が、いきなり黄金時代！ この唐突感にはわけがある。同校サッカー部の創部は昭和三十九（一九六四）年なのだ。創部五年で強豪の仲間入りということになる。じつは創部当時の同チームと湘南サッカー部は、以下のような理由でまんざら縁がなかったわけではない。新設のサッカー

部の指導を任された倉岡誠親監督は東京教育大で宮原孝雄、鈴木中の後輩だった。その関係もあって卒業後、湘南高校定時制の体育教師となった彼は、初代監督としてまっさらのチームを率いるため昼間は相工大学附属高校のグラウンドに立つことを選んだ。

湘南サッカーでいえば、関東優勝の四十一回生が二年のときだ。鈴木中監督の意向で、彼らは新設サッカー部の練習相手を引き受けた。相工大附属の所在地は藤沢市辻堂の東海岸である。湘南チームはスパイクを背に負い、運動靴で引地川沿いを走って同校へ向かう。そして練習試合を二本ほどやる。7・0や8・0で勝つ。また運動靴に履き替えて川沿いを走って湘南の丘に戻る。ほぼ月に一度のそのメニューをしばらく繰り返し続けた。言ってみれば「胸を貸してやった」相手だったのが、ほんの数年のうちに黄金時代と呼ばれるほどになった。倉岡監督は家庭の事情で急に故郷広島に帰ることになり、「黄金時代」にはすでにいなかったとはいえ、その指導力が基礎を作ったのは間違いないだろう。湘南チームが貸した胸が役に立ったかどうかは定かではない。それよりも、もっと強力な要因があった。一人の選手がチームをがらりと変えるという現実である。相工大附属の黄金時代と書かれた昭和四十四

（一九六九）年に三年生であった（湘南チームでいえば四十五回生）その選手は、一九七〇年代、世界最高峰のリーグといわれたドイツのブンデスリーガで活躍した、日本初のプロサッカー選手・奥寺康彦である。秋田県に生まれ、小学生のときに一家で横浜に転居。中学で始めたサッカーで奥寺はすでに才能のきざしを見せ、相工大附属に進学して大きく開花した。直接対戦した湘南高四十五回生のゴールキーパー山口晴夫のこんな回想が残っている。

「まれにみるスピードだった。しかも、じつに、いやらしいパスを出した。センスが頭抜けていました」

相工大附属卒業後、古河電工に進み、日本代表に選ばれ、ドイツへ渡り、という道のりを進んだ奥寺だが、そのドイツでファンから「東洋のコンピュータ」と絶賛されたパスセンスは、高校時代、つねにライバルであった湘南チームの、気骨のゴールキーパーを大いに嫌がらせたのだ。



神奈川県選拔選手を 国体に送り出す

国民体育大会サッカー競技の高校（少年）の部は、昭和二十一（一九四六）年に第一回が開催され、湘南中学が晴れやかに優勝を飾ったことは第二章でふれたとおりだが、以後、昭和四十四（一九六九）年の第二十四回大会（優勝は埼玉県浦和南高校）まで、都道府県代表は単独校による参加だった。翌年の昭和四十五（一九七〇）年からは選抜チームの参加に変更となって現在に至っている。

選抜制になってからの初代神奈川県チームの監督は鈴木中が任命された（以後三年間）。鈴木は、監督二年目の昭和四十六（一九七一）年には湘南高から二名（四十八回生）を選出した。一人は、中学時代から身体能力の高さで知られ、湘南ではキャプテンを務めた曾我敏昌。スタミナがあり、あたりも強い頼れるディフェンスだった。

もう一人は、ゴールキーパーの瀬戸康弘。入学当時はフィールドプレイヤーだったが、中学時代に走り高跳びの選手だった彼のジャンプ力と俊敏さを鈴木中監督は見抜き、キーパー転向となった。

四十八回生は、この二人の神奈川県選拔選手のほかに、日中親善試合のために結成された藤沢市選抜チームにも二名を送り出すなど、個々の力はかなり高かったが、そこが高校サッカーのふしぎなところというべきか、チームとしての思いがけない力を生み出すのは別の要素が大きく、彼らのチームは輝かしい結果を残すに至らなかった。

国体選拔選手は、五十二回生からも輩出した。小柄ながら、動きの切れがすばしかった八木啓太だ。湘南高では、まさに攻撃の中心選手、国体へは二年生るときと三年生るとき、二年連続で選ばれ、期待どおりの活躍をした。慶応大学でもサッカーをつづけ、さまざまなポジションをこなすオールラウンドプレイヤーとして名を馳せた。



惜しまれて

湘南の巨星墜つ

蹴球鉄人・岩渕二郎が、こんなに早く世を去るとは、だれが予想できただろうか。

まずは、ペガサスのことから。

昭和五十三（一九七八）年の秋深き宵、横浜のとある赤提灯で小さな集まりがあった。四十路前後の、年代を超えた五人の湘南サッカー部OBたちの酒席である。

「こうやって集まるのもいいが、どうだい、酒なんかじゃなくて、サッカーで集まるというのは」

そろそろ身体のことに関心をつけないといけない年齢だ、いい汗をかこうじゃないか。という提案に、全員おおいに盛り上がった。

一週間ほどして、彼らはまもなく古稀を迎えようとしていたガンブチ岩渕二郎の家を訪ね、赤提灯での決起案を告げるとガンブチは、「よくぞ言った」。そして、すぐつづけて、「むろん、おれも仲間に入れろ。おれはCFだ」。有無を言わせない。

初試合は、一ヶ月ほどのちの、暮れのどん詰まりに湘南高校グラウンドで行われた。対戦相手は神奈川四十雀。結果は4・2で勝利。祝勝会と発会式を兼ねて、江ノ島洗心亭に集合する。その会場で、ガンブチは腹案のチーム名を披露する。

「湘南ペガサス」

である。ギリシャ神話に登場する翼のある天馬。その場に居合わせたメンバーたちにとって、「翼のある馬」というのがいかにも岩渕二郎にふさわしく思えたのはふしぎだった（活動の歴史についての詳細は第七章で）。

湘南ペガサスの結成三試合目、対荏原インフィルコとの試合は昭和五十四（一九七九）年の五月に行われた。岩渕はCFとして出場する。前半を終えて、交代。5・2で勝ったその試合を最後まで観戦し、帰りぎわに、

「おれはもう試合をやらないが、試合通知はかならずくれよ」

そう言い置いていった。数年前から体調を崩し、すでにそのときは腎臓を重度に病んでいたのだが、ペガサスの教え子たちには気配を見せない。いや、教え子だけではない。周囲のだれにも、病の重篤を感じ取らせなかった。したがって翌年昭和五十五（一九八〇）年に入り、国立横浜病院（現・国立病院機構横浜医療センター）に入院という知らせには誰もが耳を疑った。そしてその年の三月四日、同病院で急逝する。七十歳と六ヶ月の生涯だった。

告別式は同月七日、葬儀委員長は岩渕の一級先輩の第一回生、岩渕とともに湘南サッカーの礎を築いたOB会初代会長・天野武一。その弔辞を抄録する。

「いま、私はどうしたわけか貴方がお父上に伴われて鎌倉の小学校から旧制の湘南中学に二回生として入学されたころの、少年岩渕君の姿を臉に浮かべております。なぜ浮かぶのでしょうか。戦死した私の弟が貴方と同年で、湘南中学の同級生であり、ともにサッカーに興じていた仲間で、そのころから貴方の男らしい友情が終生忘れられないからとしか考えられませぬ。（中略）母校湘南高校の迎えるところとなって、貴方がサッカーの指導に叱咤激励する声を聞かぬ日はないようになったのでありま

した。貴方は三十年も前の試合の思い出を語るときも、選手一人一人の動きをつぶさに記憶しており、復元して見せるので、これに驚いた人は少なくありませぬ。貴方の指導を受けた後輩たちは、貴方が明治の人間らしく頑固で厳しい指導をしたと申します。ガンブチの愛称はそこに生まれました。が、言うまでもなく、貴方は実に心やさしい人でした。個人的な逸話を申し上げます。戦時中から戦後にかけての食糧難のころ、貴方は突然、郷里（宮城県）から持ってきたと、白米を私の家に届けてくださったことがありました。今の時代からは想像するのがむずかしいですが、その行動の貴さは比類ないもので、家内は数十年経った現在も感激が変わらないと申します。戦死した弟のことを貴方が話するとき、いつも目を真っ赤になさっていたのも印象的です。また、貴方は文筆の才にも富んでおられ、かつては推理小説を書き、『新青年』というその分野で権威のある雑誌の懸賞小説に当選したこともありました。昨年あたり、また創作を計画しているとかで、私（元・最高裁判事）はいろいろと裁判の論理や用語について質問を受け、さらに再会を約していたのですが、病魔ゆえか、ついに果たされませんでした。（中略）名残りは尽きませぬ。終わりに、もうひとつ。貴方は去る一月十五日、湘南高校のグラウンドで行われた蹴球祭において、試

合を見ながら私にこう申されました。すべてのものには始めがあれば終わりがある。まさにそのとおり、相違ありませぬ。」

同年五月十八日、湘南高校第一体育館において『岩渕二郎を偲ぶ会』が開かれ、全国各地から多数の仲間、後輩、教え子のもとより、藤沢市サッカー協会、神奈川県サッカー協会からも参加が相次いだ。その場において、岩渕二郎追悼記念事業として、記念誌『湘南サッカー・半世紀を経て』の発刊と、湘南高校のグラウンドに練習用のシュート板を設置する企画案が賛同を得て、いずれも滞りなく実現した。

高校百校新設計画 サッカー地図に変化

神奈川県の高等学校の構成に変化が起きていたのは、やや遡って昭和四十七（一九七二）年ごろからだ。一九七〇年代に入って公立中学校卒業者が急増し、高校進学率の上昇にとっても追いつける状況ではなくなった。そこで、「十五の春を泣かせるな」というスローガンのもと、「高校百校新設計画」が策定され、実施に移された。

昭和四十八（一九七三）年当時、六十五校あった県立高校を百校増やし、百六十五校にするという目標。藤沢工業高校、旭高校、港南台高校の開校を皮切りに、以後十年以上に渡って、神奈川県は県立高等学校は新設のラッシュとなっていく。同計画により改善された問題はもちろん少なくなかったが、県立高校にとって副作用もあった。学力あるいは大学進学面でいえば、地盤沈下である。それには百校計画にともなう学区（通学区）の縮小も大きく影響していた。一学区内の学校数が増え、学区が細分化される。県立校への学校選択の自由が狭められる。いきおい、進学率を誇る一部私立高校の人气が高まり、躍進が際立つことになった。

神奈川県高校サッカー界にも当然のことながら変化が現れた。学校数が増えれば、予選参加校が増える。競争率は高まる。そんななかで、設備投資や選手集めに

力を注げる私立校が伸びてくるのは明らかだ。強くなれば、「売り」を磨くためにさらに強化を図る。昭和時代の最後の十年間は旭高、鎌倉高、藤沢西高といった県立校が強豪だったが、平成に入り、桐蔭学園や桐光学園の台頭が目立ち、私立校が優勢になっていった。

湘南サッカー部ではどうだったか。中学時代の名選手が学区の壁でいっそう集まりにくくなったと言えなくもないが、結論からすれば影響は最小限であったととらえたい。湘南高のサッカーは湘南高に入ってから、伝統という目に見えないものによって培われていくものであり、身に沁みこませていくものだから、というのがその理由だ。では、伝統とは何か。鈴木中監督は、こう語ったことがある。当時、積極的に地方に遠征に出かけた。どこへ行っても、全国に名を轟かせる名門校が湘南と試合をやりがった。たとえ、さほど強いチームでなかった年でも、それは変わらなかった。まさに伝統の力ということだろう、と。

たしかに、湘南はしばらく苦しい時代をつづけていた。昭和五十八（一九八三）年には、十六年ぶりの関東大会出場を果たしたものの、一回戦で強豪帝京高に0・6という惨敗を喫するなど、山あり谷ありの連続となっていく。が、選手個々人のここ

ろざしは衰退してはいなかった。翌年、奈良で開催された第三十九回国民体育大会に県選抜選手として二年生の水谷隆一郎（六十一回生）が選ばれた。同大会、神奈川選抜チームの目標は、「まずは一回戦突破」と謙虚であった。その目標をあっさりクリアすると、一気に弾みがついた。あれよあれよという間に決勝戦へ。相手は三年連続決勝進出の、サッカー王国静岡選抜チーム。ゲームは、朝から降りしきる雨の中で行われる悪コンディションだったが、開始早々に、静岡の守備陣にふと乱れが生じたスキについて右サイドからのセンタリングに中央で合わせ、先制ゴールとなる。この一点を守り切った神奈川は、三十八年ぶりの覇権を獲得した。三十八年ぶりというのは、第一回大会ぶりということである。第一回大会とは、まだ単独校代表の時代で、優勝は神奈川代表の湘南中学。その三十八年後の後輩の一人が、覇権奪還に寄与したのである。

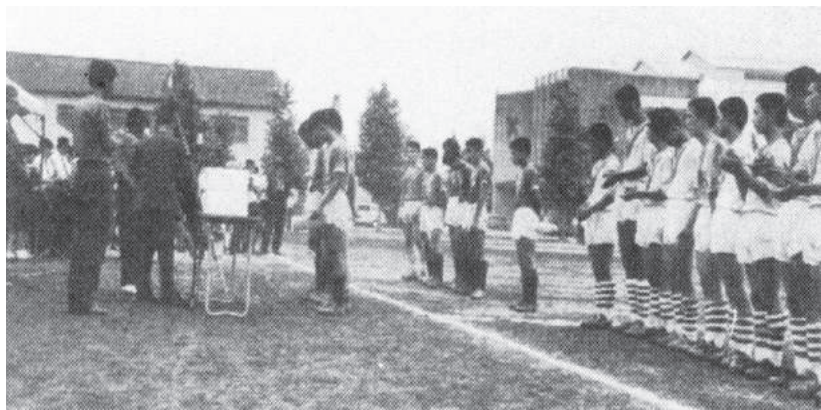


指導陣に 新しいスタッフ

昭和五十九（一九八四）年、湘南サッカー部の指導陣に新しいスタッフが加わった。五十四回生の藤塚久雄が筑波大学を卒業し、湘南高校の体育科の教師に赴任となったのだ。そして、サッカー部の監督に就任する。鈴木中部長・藤塚久雄監督、という新体制の開幕である。藤塚は、サッカー部OBであり湘南高の教員としての監督第一号ということになる。

新体制は発進した。私立校が勢力を強める風潮のなかで大奮起する年は、数年後であった。





関東大会優勝 表彰式・水戸グランドにて [昭和40(1965)年]



学校で全部員 [昭和40 (1965) 年]



正月の高校選手権大会出場 [昭和37 (1962) 年]



国体出場 [昭和37 (1962) 年]



全国高校サッカー選手権大会 第2日

優勝候補川口工も敗退

試合	対戦相手	結果
1	川口工 (H)	0-1 (山形県立)
2	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
3	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
4	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
5	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
6	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
7	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
8	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
9	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
10	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
11	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
12	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
13	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
14	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
15	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
16	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
17	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
18	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
19	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
20	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
21	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
22	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
23	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
24	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
25	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
26	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
27	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
28	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
29	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
30	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
31	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
32	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
33	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
34	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
35	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
36	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
37	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
38	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
39	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
40	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
41	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
42	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
43	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
44	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
45	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
46	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
47	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
48	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
49	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
50	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
51	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
52	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
53	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
54	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
55	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
56	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
57	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
58	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
59	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
60	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
61	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
62	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
63	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
64	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
65	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
66	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
67	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
68	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
69	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
70	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
71	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
72	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
73	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
74	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
75	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
76	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
77	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
78	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
79	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
80	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
81	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
82	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
83	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
84	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
85	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
86	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
87	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
88	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
89	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
90	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
91	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
92	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
93	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
94	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
95	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
96	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
97	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
98	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
99	山形県立 (H)	1-0 (川口工)
100	山形県立 (H)	1-0 (川口工)

高校選手権の会場（西京極）で〔昭和41（1966）年〕



高校選手権出場を決めた2年生・1年生のメンバー〔昭和40（1965）年〕



高校選手権4年ぶり出場の記事〔昭和40（1965）年〕



高校選手権全国大会出場、全部員で記念写真〔昭和40（1965）年〕

180



16年ぶりの関東大会出場プログラム



岩淵二郎を偲ぶ会 湘南高校
[昭和55（1980）年]



16年ぶり関東大会出場 59回生メンバー [昭和58（1983）年]



高校選手権県予選 準決勝敗退 初のテレビ神奈川放送 [昭和53（1978）年]



二十三年ぶりに 全国の舞台へ



昭和五九（一九八四）年～平成八（一九九六）年

初のOB教員 藤塚久雄監督が誕生

最終面接で面接官である畑喜一校長が目の前の若者に言った。昭和五十九（一九八四）年春のことだ。

「ここは新規採用教員の来るところではない」

若者はにわかに身構えた。すると、ひと呼吸おき穏やかな表情になった校長はこうつづける。

「そのことを心して職務に励んでください」

出鼻にガツンの、その激励の言葉をずっと記憶にとどめ、筑波大学を卒業してす

ぐ保健体育科の教師として湘南高校に赴任した藤塚久雄の新生活が始まった。

一年目は、サッカー部と女子バスケットボール部の顧問を兼任した。だが、OBがコーチを引き受けていた女子バスケットの練習にはほとんど顔を出さず、もっぱらグラウンドに立ってサッカー部の練習を手伝った。そして二年目からはサッカー部の専任顧問となる。鈴木中部長・藤塚久雄監督の新体制は、ここから本格的に始まった。

藤塚は湘南高校サッカー部OB（五十四回生）である。鈴木中監督に率いられたチームの、優れた選手だった。中学校（藤沢市立明治中学）時代、全国中学校サッカー大会にFWとして出場したが、高校では冷静な戦術眼を買われ、スリーパーを任せられる。三年生の秋には、全国高校サッカー選手権大会の神奈川県予選で準決勝に進出した。同チームの主将は、のちにJリーグ初代事業部長として活躍した篠塚毅（五十四回生）である。湘南サッカーが初めてテレビ神奈川の中継に登場することになった準決勝戦だったが惜敗、しかし久々のベスト4入りが以後のチームに与えた奮起は大きかった。

さて、こうして現役高校生にとってはOBの兄貴である大学卒業後間もない青年監督は本格的に出航する。鈴木部長は、自身が藤塚とほぼ同じ年頃に湘南高校に赴

任しサッカー部の監督となったが、総監督として存在感あふれていた当時の岩渕二郎と変わらない年齢に差しかかっていた。世代が移って、相似形の体制ということになる。岩渕がそうであったように、経験と人脈を重心にして若き新監督を支える新部長と、熱意あふれる新監督の関係はスムーズに発進していった。

藤塚は、一対一や二対一、五対二の細かいパスワークの連続から長いボールで局面を一気に変えてドンと撃つ、といったグループ戦術のトレーニングを積み重ねていった。指南書としたものがあつた。一九七三年刊の『イングランド・サッカー教程』（アラン・ウェイド著／浅見俊雄訳）だ。影響を受けた人は多く、日本サッカー協会会長（二〇二〇年現在）田嶋幸三も「システムや練習方法が日進月歩であるなかで、光りつづける普遍の戦術の宝庫」と評しているこの書を、選手たちとともに消化吸収していく。新監督として、ひとつのスタイルを築こうという決意で重ねた努力だった。

来年は体育祭準備から できるだけ逃れよう

けれども、結果はそうすぐに表われるものではない。昭和六十一（一九八六）年、インターハイの県予選ベスト十六、選手権四回戦敗退。翌年は選手権予選二次に進出するも優勝候補の一角だった日大藤沢に0・3で敗退。いまひとつ突き抜けられぬもどかしさを味わう。

その試合は湘南高校の体育祭の当日だった。伝統的に名物となっているイベントであり、生徒たちの創意工夫で趣きに富む演技やプログラムが繰り広げられる。選手権予選まで残った三年生メンバーは四人、しかし色別対抗が組まれる体育祭で最上級生はリーダー的存在もこなさなければならぬ。三年生たちはサッカーの練習だけでなく、体育祭の準備にも力を注いだ。

日大藤沢に完敗したあと、後輩の二年生たちはひそかに約束し合った。

「二度とこうならないようにしよう。いいか、来年はみんなできるかぎり体育祭の準備から逃れよう」

そのぶん、サッカーに集中しようという意識が一気に高まった敗戦ではあった。しかし、大きな壁となるチームがある。当時、神奈川県でひとつ頭を抜け出していたのは県立藤沢西高校だった。昭和四十九（一九七四）年創立の同校は、創立当初からサッカーの強豪校に肩を並べ、昭和五十九（一九八四）年の全国高校選手権に出場するほか、高校総体にも複数回出場してきた。

その藤沢西高の昭和六十三（一九八八）年は黄金期といってもよく、沢田謙太郎、小椋哲也、宮澤浩、扇谷健司、中野大輔の五名の国体選手を送り出していた。彼らはのちに柏レイソル、サンフレッチェ広島、ジェフユナイテッド市原、ベルマーレ平塚などのJリーグのプレイヤーとして活躍した選手たちである。

その全盛期の西高に、湘南は何度も苦杯をなめさせられてきた。同年の関東大会の県予選決勝でも対戦し、雨中の秋葉台グラウンドで0・4で完敗する。

「降りしきる雨のなか、こっちはボールを蹴るのがやっとだったのに、彼らは大きく裏に蹴ってガンガン走る、あれよあれよという間に失点が重なり……」

と善木茂雄（六十四回生）が振り返るように、明らかな力負けだった。

熱中症患者のうわごと

「国立に行くぞ」

昭和六十三（一九八八）年のチームは、六十四回生の三年生が八人残り、期するところのあるメンバー構成だった。「もうひとがんばりすれば、全国が見える」。

その選手たちが忘れたい記憶として挙げるのが、藤塚監督の指示による「真夏のランニング」だった。夏休みの午前中練習に定番として取り入れたメニューである。グラウンドから引地川に出て、川沿いを海へと下り、藤沢市立鵜南小学校近くの砂浜を四十分間走る。夏の炎天下だ、かなり過酷ではあった。このチームのキャプテン

を任じられていた二年生・結城亮太（六十五回生）の証言によれば、
「私のすぐ前を走っていた一人の三年生のようすがおかしくなりました。ふらふらつとよろめいて……」

そのまま崩れ落ちる。駆け寄ると薄目をあげ、「救急車を呼んでくれ」と言い、また目を閉じる。明らかな熱中症である。救急車が到着するまでの間、彼は「全国に行くぞ、国立に行くぞ」とうわごとを繰り返している。日ごろから負けず嫌いで有名な選手だったので、いかにもといううわごとではあったが、取り囲んだチームメイトたちはみな肅然となった。

そのランニングに監督が託したものは、もちろんやみくもな根性至上ではない。持久力の強化だが、それは身につけてきたスキルがゲーム後半に差しかかっても余裕を持って発揮できるための持久力である。ひと夏を終えて、監督は手応えを感じていた。「選手たちの立ち姿に変化が認められました。体幹がしつかりし、頼もしくなった」。

横浜三ツ沢球技場に 大歓声があがる

力量的にも精神的にもチームは充実した。そして、それは結果に表われてくる。

全国高校サッカー選手権の県予選が始まった。順調に勝ち上がって、準々決勝で当たったのは藤沢西高。優勝候補の筆頭、数ヶ月前の関東大会予選で完膚なきまでに叩きのめされた相手である。「個々の能力では大きく上回る藤沢西に、湘南は中盤をほぼ支配される」（十一月四日神奈川新聞）、しかし、ここぞという決定的場面を作らせなかった。藤塚監督が思わず天を仰いだシーンもあった。国体選拔選手の一人、のちに柏レイソルやサンフレッチェ広島で活躍することになる藤沢西高のMF沢田謙太郎がフリーで胸トラップする。前にはゴールキーパー一人。しかし、強烈なシュートはバーをかすかに越えていった。

後半十一分、わずかなチャンスをものにしたのは湘南のほうだった。コーナーキッ

クを得る。蹴るのはほかでもない、あの夏の浜のランニングで熱中症を起こし「全国へ行くぞっ」とうわごとを繰り返した山口尚己（六十四回生）である。意表について、浮き球ではなくグラウンダー。ぴったり合わせた若木均（六十四回生・国体選拔選手）がクリーンシュートを決める。じつは、若木はその前日の練習が終わった部室で、「ああ、高校の練習もこれで最後か」と感傷的につぶやいたのをチームメイトに聴かれていた。全員にとって、藤沢西は大敗の記憶の生々しい相手であったのは確かだった。振り払っても頭に染みついていて。だから「今日が最後の練習か……」。だが、その先制点が流れを引き寄せた。虎の子の一点を守り切って、タイムアップ。若木は、自身のシュートによって自身のつぶやきを否定することになったのだ。

つづく準決勝は、県立鎌倉高校との対戦。左右のウイングからの攻撃が有効に決まり、効果的に得点を重ね、守りもがっちり押さえこみ、3・0で完勝する。さあ、いよいよ決勝戦、相手は県立相模原高と決まった。藤塚監督の興味深い回想がある。試合当日、会場（横浜三ツ沢球技場）入りする前に、サブグラウンドの裏の休憩所でスタッフと打合せしている相模原高の監督の横顔がちらりと見えた。

「それがとても暗い表情であるように見えたのです。これはもらった、と直感しま

した」

湘南は前半二十五分、俊足でスキルも高いFW田村直也（六十四回生・国体選拔選手）が左からサイドを突いてセンタリング。ゴール正面で待ち受けていたのは点取り屋のFW木村義幸（六十四回生）、どんぴしゃりのボレーシュートで準決勝に次いで二試合連続の先取点を決める。堅いディフェンスラインが相手の攻撃を危なげなく防ぐ流れのなかで、一瞬のスキをついた鮮やかなカウンターだった。そのあと、お互いに一点ずつ取り合うが、冷静な試合運びを崩さぬまま、ホイッスルが響く。湘南高校の、二十三年ぶりの全国高校サッカー選手権出場が決まった瞬間である。

週刊プレイボーイにも記事 「名門校のトトカルチョ」

思いも寄らぬスキャンダルのことを記しておかなければならない。学校全体に関わるもので、サッカー部の選手権出場の快挙も、あとから思えばじつに危ないところだった。

この年昭和六十三（一九八八）年は、戦後日本の最大といわれた贈収賄事件が起きた。求人広告や人材派遣などのサービスを手がける株式会社リクルートの関連会社リクルートコスモス社の未公開株が贈賄として譲渡され、贈った側のリクルート社関係者と、受け取った側の政治家や官僚が逮捕された。湘南高校に降って湧いた一件とは、そのリクルート事件発覚の四ヶ月後のことだった。といっても、もちろん日本を揺るがす大スキャンダルとは縁もゆかりもない小ネタである。高校生同士が面白半分で行った幼いトトカルチョだった。

十月二十二日から二十七日にかけて行なわれたプロ野球日本シリーズ（西武ライオンズ対中日ドラゴンズ）の勝利チームと勝敗数を当てる（結果は四勝一敗で西武の優勝）賭博で、一口百円。三人の三年生が胴元となって仲間内で遊んでいるうち、思いがけず広がったらしい。経緯は不明だが、県内有数の進学校の不祥事ということ

でNHKの昼のニュースに取り上げられ、校内は一時騒然となった。さいわい、実際の金銭が小銭程度しか動いておらず、参加者もきわめて限られていたため、大事には至らなかった。しかし、ニュースに取り上げられたのが十月二十九日、藤沢西高との高校選手権県予選・準々決勝は五日後の十一月三日である。もし、サッカー部員が賭博に参加し、金銭のやりとりの事実があったなら、出場辞退に追いこまれた可能性は低くなかった。鈴木部長、藤塚監督のヒヤヒヤの度合いは想像に難くない。結果からいえば、サッカー部員は手を染めていなかった。むしろ「学校にかけられた汚名を選手権で晴らすのだ」という鼓舞につながることができた。ただし、災難を蒙った選手はいた。ゴールキーパー永井潤一（六十四回生）だ。トトカルチョに参加したメンバーは謹んで丸刈りにしよう、と部員が自主的に決めたのだったが、運悪くもともと丸刈りにしていた永井のその頭は妙に目立った。サッカー部以外の生徒たちはグラウンドで練習するゴールキーパーを見て、てっきり「あいつ、かなりの金額をやったにちがいない」と信じ、流言が広まった。

決勝戦で相模原高を下し、全国出場を決めたのが十一月十四日、その一週間後の十一月二十二日発行の集英社刊「週刊プレイボーイ」は、このスキャンダルに二

ページを割いた。「名門校のトトカルチョで騒いだのは誰だ」というタイトル、雑誌の性格からして「かわいい悪さをいい大人がガタガタいうのは滑稽」というスタンスの記事だったが、こんなにメディアに取り上げられてしまったのは受験のライバルを貶めようと同学年生からの密告があったのではないか、という、これはこれですいぶん不名誉な憶測も語られた。

藤沢市内のホテルで 壮行会が開かれる

いよいよ、第六十七回全国高校サッカー選手権大会の開幕となった。湘南中学が全国を制した、あの終戦の翌年と時代が異なるのは言うまでもないが、二十三年前

に出場した全国大会とも様相が大いに変わっていた。著しい変化はマスメディアの扱いだった。

ベースボール・マガジン社刊「月刊サッカーマガジン」では特別企画として別冊「全国高校選手権大会ガイド」に出場全校の詳細が掲載される。「毎年東大に多くの合格者を出す進学校ながら、今年度は三年生が八人も残り、浪人覚悟で選手権出場にかけた神奈川県代表の湘南高校は、レギュラーのうち六人が身長一七八センチ以上の大型チームで、とくに守備陣は平均一八〇センチ、身体を張った粘り強い守りが持ち味。今回の予選でも七試合を戦って、失点はわずか二点しか許していない」。

同誌はサッカー専門誌だからまだしも、集英社刊「セブンティーン」というアイドル芸能誌にも四ページの特別記事が組まれた。湘南サッカー部に焦点を合わせた企画である。「スター選手も根性物語もない学校が晴れ舞台に登場」といった記事は、「さらさらアイドルたちの素顔紹介」の筆致そのものだった。そのように、上っ調子な取り上げられ方が多かったが、選手たちが覚めた受け止め方をしていたのがさいわいだった。「テレビ記者からどうしても東大志望と言ってくれ」と求められたり、「言ってもいないのにヘディングが得意のように報じて、さすが頭のいい学校です」

とつまらないまとめ方をされたりで、すっかりシラケていたらしい。

こうして大会の日は迫った。藤沢市内のホテルで壮行会が開かれた。当時、運輸大臣だった石原慎太郎（湘南サッカー部に一時在籍）も列席し、激励の祝辞を述べた。

選手権一回戦を PK戦で制す

昭和六十四（一九八九）年一月二日。全国的に好天で東京・横浜は朝から快晴、気温十三度、ぽかぽかと穏やかではあるが、病に倒れた昭和天皇の容態が思わしくなく、日本国中に緊張感も漂う、そんな正月だった。

東京・西が丘サッカー場など、首都圏八会場でいよいよ全国高校選手権のスター

トだ。一回戦十六試合、そのうちの一試合が、神奈川県代表・湘南高校対奈良県代表・上牧高校だった。会場は横浜三ツ沢競技場。地元とあって湘南側はOBたちも多く駆けつけ、スタンドを埋めた。

前半、シュート数は上牧の一本に対し八本と圧倒的に湘南のペースとなる。が、得点に繋がらない。後半十分に、ようやく実を結ぶ。百メートル十一秒台、チーム一の俊足FW田村直也がカウンターアタック。切れのよいドリブルで相手ディフェンスを抜き去り、ゴール左下に決めるクリーンシュート。先制点だ。それから攻めを重ねて上牧ゴールを襲いつづける。が、追加点ならず。応援スタンドにいやな予感が漂うなか、その予感的中してしまう。ロスタイムに入り、上牧の全員攻撃をブロックしたプレイがハンド。PKで失点。土壇場で追いつかれ、そのままタイムアップ。PK戦に持ち込まれた。

意気上がるのは劇的に追いついた上牧側、そのムードのなか両チーム五人で決着がつかず、サドンデスとなる。結果は7・6で湘南に軍配が上がった。二十三年前のチームは一回戦で敗退しているので、まさに久々の本大会勝利ということになる。

強風の吹く日 ベスト8の夢断たれる

その二回戦、一月三日、川崎等々力競技場。対戦相手は愛知県代表・愛知高校。前日の一回戦で前半二点を奪われ、後半三点を奪い、絵に描いたような逆転勝利をおさめ、その勢いのまま臨んできた相手だ。

愛知は巧みなボールキープと浅いディフェンスラインを持ち味とするチーム。まさにその持ち味に苦しめられた湘南だったが、セットプレイを着実にものにした。前半十三分、MF山口尚己のコーナーキックをDF若木均がヘディングにいく。その若木と競り合った愛知の選手は、のちに日本代表のDFとして活躍した秋田豊選手。競り勝ったのは若木だ、折り返しを受けたMF小林卓麻が右足で決めて先制。後半

十分には、若木のロングスローを受けたMF石井隆臣が相手選手ともつれながら決め、追加点を決める。これで勝負あった。2・0。

翌日の一月四日に三回戦が行われた。相手は「東北の雄」と前評判の高い強豪、岩手県代表・盛岡商業高校である。会場は一回戦と同じ三ツ沢競技場。

風の強い日だった。よく晴れたが、吹きさらしの風にスタンドはみな首をすくめて観戦した。前半、湘南は風上に立ったが有利に試合を運ぶことができない。そうしたなか、盛岡商は三十三分、三十八分と立てつづけにゴールを割ると完全にペースをつかむ。後半に入ると、ますます大きな展開で主導権を握り、タイムアップ前にとどめの一発を見舞い、そのまま終了。三連戦（湘南）と二連戦（盛岡商）の差は大きく、それは選手層の厚さにも通じるといえるが、湘南のベスト8の夢は断たれた。

多くの湘南サッカー部OBたちが観戦し、それぞれの感懷を抱いた正月の三日間だった。四十八回生の細川周平もその一人だ。音楽学者である細川は、二〇〇九年に日系ブラジル人移民をテーマとした著書『遠きにありてつくるもの』（みすず書房）で読売文学賞を受賞している。その細川には『サッカー狂い』（哲学書房）というロングセラーの一冊もあるが、同著の巻末には、高校選手権の正月三日間の記述が添え

られている。いったい何年ぶりの再会かというかつてのチームメイトたちと、「こんなに熱く観戦するなんて」と我ながらおどろきながら声援する。そして三回戦終了の笛が鳴る。細川はこう書く。

「連戦も三日目となると疲労が濃く、足を引きずる選手が目立つようになる。初日には鮮やかに決まったワンツーやフルバックの攻撃参加もちぐはぐに終わり、ゲームは八割方圧倒されていたといってよい。一八〇センチ台を誇るバック陣も空中戦では精彩がなかった。試合終了のホイッスル。0・3。夢の終わり。気の抜けたような応援席。ぼくも負けにこんな落胆するとは思わなかった。」

そして、こうつづける。

「しかしそれもまた幸福の一部なのだ。一体化できるものがこの世のどこかにある、ということがどんなに幸福で幸運なのかということを心に刻んだ三日間だった。」

昭和天皇が 皇居吹上御所で崩御

全国高校サッカー選手権三回戦の三日後の一月七日、日本中に衝撃が走った。

午前六時三十三分、昭和天皇が皇居吹上御所で崩御された。八十七歳、前年の九月十九日に出血されて以来、百十一日目だった。憲法と皇室典範に基づき、皇太子明仁親王が皇位を継承し、即位された。同日十四時三十六分、小渕恵三官房長官が記者会見室で、「平成」と墨で書いた生乾きの二文字を掲げた。以後、三十年間にわたる新元号の発表だった。

天皇崩御によって、第六十七回全国高校サッカー選手権大会の試合日程は変更となり、決勝は三日遅れの一月十日に行われた。千葉県代表・市立船橋高校と静岡県代表・清水市立商業高校が対戦し、清水商業が1・0で勝って栄冠を手にした。

昭和最後となった選手権大会はこうして幕を閉じる。

校舎改築が 正式に決定される

昭和六十四年が、明けて間もなく平成元年となったその年の四月、鈴木中監督が湘南高校体育科教諭から横浜市の県立荏田高校へ教頭として異動となった。二十八年間という異例の長さの湘南高校勤務だった。サッカー部部长という公式の立場はいったん終えることとなるが、二十八年間の教え子との繋がり深く、指導者として湘南サッカー部との縁はその後もつづいた。

選手権出場のメンバーたちが卒業していき、時は一九九〇年代に突入する。

イラクによるクウェート侵攻をきっかけに国際連合が多国籍軍を派遣し、イラク空爆を開始した湾岸戦争の勃発は九十一年一月だった。同年の年末には、ゴルバチョフ大統領の辞任に伴い、ソビエト連邦が崩壊しておよそ七十年の歴史を閉じた。日本はいえ、八〇年代後半に仇花のように盛り上がったバブル景気に陰りが見え、一気に後退して長引く不況に突入していった。

湘南高校の一九九〇年代はどうか。特筆すべき大きな変化といえば校舎の建て替えである。

建築後三十年を経っていた湘南高校の校舎は、雨漏りや外壁の亀裂など傷みが多くみられ、大規模な修理、あるいはいつそ改築の必要性がずっと論じられていた。そして平成二（一九九〇）年一月、県当局によって新神奈川計画が発表され、そのなかで湘南高校の校舎改築が正式に決定される運びとなった。

当初の計画はこうだ。まずグラウンドに新校舎を建設する。授業ができる体勢が整ったら旧校舎を解体する。そして跡地にグラウンドと体育館などの施設を建造するという段取り。

これは猛反発を生んだ。校歌にもある「富士を高く西に仰ぐ丘」の上の校舎ではな

くなることの（おもに卒業生たちの）違和感、それだけではなかった。丘の上にグラウンドが建設されることによって、騒音や埃の害を懸念する近隣住民から強い異議が寄せられる。

これを受け、同年十月、旧校舎を解体し、同じ「丘の上」に新校舎を建設するという最終決定がなされた。それはよかったが、では、旧校舎解体後、新校舎が完成するまでのあいだの授業はどこで？ ということになる。答はひとつしかない。丘の下グラウンドにプレハブ校舎を造り、そこで完成までのあいだ不便をしのぎ、新校舎ができたなら、そっちへ移り、プレハブ校舎は撤去するという手順である。

グラウンド難民は 流浪の旅をつづける

当然のことながら、何百人の人間が時間を過ごす空間ゆえ、その工程は一筋縄ではいかなかった。とりわけ、グラウンドや体育館が使えなくなったことによって、直接の困難に見舞われたのは体育の授業だった。校内ではできないので、藤沢市善行にある県立体育センターの施設を利用することになる。湘南高からはバスをチャーターして、体育センターとのあいだを定期便で繋いだ。往復およそ三十分かかる。この問題を考慮すると、日々の授業の組み立てを大改造しなくてはならなかった。

日々の体育授業だけではない。湘南高校名物の体育祭はどうするか。東奔西走し探しあて、ようやく借用の承諾を得たのは、藤沢市大鋸の運動広場だった。かつて谷間だった地が産業廃棄物の処理場として使われ、それが飽和状態となり役目を終えた跡地に土盛りし、運動広場として再生させた場である。当然、難題はあるが、いくつかをクリアしてどうにか開催を実現できるまでになった。広場の下の空き地に数台のレンタルトイレがずらりと並び、それは体育祭会場というよりも緊急の避難所を思わせた。

九十三年にはプレハブの仮校舎がグラウンドに完成。四月に一斉大移動が行われる。二階建ての四棟が平行に、いわば櫛型に並ぶ構造で、全日制・定時制・通信制を収容するだけに規模も大きく、丘の上の旧校舎から見下ろすと壮観だった。しかし、このあと旧校舎を解体し、新校舎が建設され、移動し、仮校舎が解体されるまで、グラウンドは仮死状態となるわけである。

仮設トイレの並ぶ運動広場で湘南高校体育祭が決行されたのは、九十二年からの三年間に及んだ。体育の授業や体育祭でさえそうだったのだから、運動部に与えた影響は大きかった。サッカー部は練習場を失うグラウンド難民となる。

藤塚監督は精力的に動いた。大清水高校横の大清水グラウンド、善行の荏原製作所内グラウンド、体育センター、秋葉台球技場などを借り受け、転々と流浪の旅暮らしとなったが、結果として練習場がないという理由で活動不能という日が一日もなかったのは敬服に価する。

選手たちも工夫した。練習場への往復の移動時間がとられ、練習に費やす時間が短くなるのを防ぐため、移動はウォーミングアップのランニングと決めた。スパイクと着替えのシャツを背負って黙々とゆく姿は道行く人の目を引いた。

「藤塚監督、そしてOB諸先輩のご尽力のおかげで練習ができるという喜びを部員たちはよく理解し、恩返しは大会で、と意気込んだものです」

六十九回生の石渡弥は回想する。石渡は平成五（一九九三）年の秋に県選抜として国体に参加し、卒業後、筑波大学でサッカー部主将を務めた選手である。

感謝の心で意気込んだグラウンド難民チームは、関東大会の神奈川県予選で勝ち上がり、代表決定戦にまで駒を進めた。が、あと一息のところまで桐光学園に0・1と惜敗し、その後、全国選手権大会も県でベスト8止まり、大きな舞台に立つことは叶わなかった。

長く語り継がれる 「ドーハの悲劇」

平成五（一九九三）年五月十五日、国立競技場で日本プロサッカーリーグ（Ｊリーグ）の開幕戦（ヴェルディ川崎対横浜マリノス）の試合が行われた。ゲームに先立って、セレモニーが開催される。ピッチ上には巨大なＪリーグ旗が、六万の観衆で埋まるスタンドには参加クラブの応援旗が翻った。君が代独唱やレーザー光線の乱舞するなか公式テーマ曲の生演奏などの演出のあと、スポットライトを浴びた川淵三郎チェアマンが立ち、厳かにこう読み上げた。

「開会宣言。スポーツを愛する多くのファンのみなさまに支えられまして、Ｊリーグは今日ここに大きな夢の実現に向かってその第一歩を踏み出します。一九九三年五月十五日、Ｊリーグの開会を宣言します」

同年秋、翌一九九四年にアメリカで開催されるワールドカップのアジア地区予選、日本代表チームはＪリーグ誕生の熱気をそのままに臨んだ。ワールドカップ初出場をなんとしてもこの記念すべき年にと誰もが願った。一次予選を勝ち上がった日本

は最終予選へと進む。いったんは六ヶ国のなかで最下位に沈んだが、北朝鮮と韓国を撃破し、いつきに首位へ。そして十月二十八日、カタールの首都ドーハのアルアリ・スタジアムでイラクとの戦いとなる。勝てば、他会場の試合結果に関わらず出場決定、引き分けの場合でも他会場の結果では可能性ありという有利な条件だったが、刻々と変化する。日本対イラクは１－１で進むが、他会場ではサウジアラビアと韓国が得点を重ねていて、このままでは予選敗退。膠着状態がつづくなか、オフサイドすれすれで飛び出した中山雅史のゴールで歓喜の勝ち越しとなる。その後、イラクの運動量も落ち、ワールドカップ初出場の瞬間が近づいていく。が、落とし穴が待っていた。ロスタイムにイラクにコーナーキックを与える。全員で下がって守るが、ショートコーナーから、センタリング、ヘッドイングの一発が無情にもゴールに吸い込まれる。スローモーションのような一点により日本の初出場は碎かれた。長く語り継がれる「ドーハの悲劇」である。



自校のグラウンドで一度も 練習できなかった世代

中東で日本サッカーの悲劇が起きたころ、湘南高校では旧校舎が跡形もなく消え、新校舎建設へと着々と工事が進行していた。そして平成七（一九九五）年三月二十日、新校舎と多目的ホール（湘南会館）、セミナーハウス（清明会館）および第二体育館が完成し、引き渡しが行われた。この日は騒然たるニュースが日本国中を駆け巡った、まさにその当日だった。東京都心を走る地下鉄の車内に毒ガスがまかれ、多数の死傷者発生。オウム真理教によるテロ「地下鉄サリン事件」である。そののち、あれほど根の深い事件へと真相が明らかになろうとは誰もが予想できなかった春の一日だった。

新校舎は完成した。しかし、グラウンドにはプレハブの仮校舎が建っている。体育

の授業も、体育祭も行えない。ということはサッカー部の練習も行えない日々はまだまだ続き、ようやく翌九十六年三月、グラウンド整備が完了。三年間の改築工事の仕上げとなった。

こうした受難の環境のなかだったが、部員たちは決して戦意を失うことはなかった。高校三年間をまるまる工事期間で過ごした世代がいる。自校のグラウンドで一度も試合はおろか練習すらしたことのなかった世代が。七十一回生の阿見潔はその一人だ。阿見は三年生時にキャプテンとして戦った関東大会県予選を忘れることができない。

一回戦では逗葉高校を2・0で下し、二回戦の弥栄西高校も同じく2・0と退け、三回戦を迎える。相手は横浜市立東高校。開始早々に失点すると浮足立ち、たてつづけに失点を重ねる。前半二十分までに三点のビハインドを負った。しかし、選手のうち誰一人として戦意を失うことなく、粘り強くチャンスを窺った。その粘りが通じ、一点ずつゴールを積み重ね、後半になってとうとう同点に追いつく。さあ、これからだと勢いが上がったわずかな隙をつかれて痛恨の失点。万事休すか、とさすがに何人かは天を仰いだ。しかし、終了のホイッスル寸前で歓喜の同点弾が決まる。PK戦。

息詰まる展開のすえ、湘南が勝ち切った。キャプテン阿見潔はこう振り返る。

「湘南高校サッカー部員として過ごした時間のなかで、これ以上の一体感をおぼえたことは、後にも先にもありません。出場していた選手だけでなく、日々練習をともにしてきた部員全員の思いがひとつとなって掴み取った渾身の勝利でした」

つづく準々決勝では、横浜隼人高校を3・2で破り、準決勝へと進む。相手は桐光学園高校。元日本代表の中村俊輔を筆頭に、のちにJリーグで活躍した選手の多い強豪校だった。この試合で、阿見選手は二枚のイエローカードをもらって不覚の退場。そこまでは0・0の均衡を保っていたが、退場を契機としたかのようにつづげざまに二点を失い、そのままタイムアップ。あと一勝で関東大会出場というゲームに悔いが残った。

十二年間の 藤塚体制にピリオド

平成八（一九九六）年、プレハブの仮校舎が撤去されて、ようやく新しいグラウンドが整備された。この年、藤塚久雄監督は湘南高校体育科の教師から異動となった。選手権で三回戦まで進出したチームを率いた若き名伯楽は去る。勤続十二年だった。同年五月三十日、FIFA理事会は、第十七回目であり二十一世紀初めての二〇〇二年サッカーワールドカップの日韓共同開催を決定した。言うまでもなく日本人のサッカー熱は飛躍的に高まっていった。





高校選手権出場記念テレホンカード [昭和63（1988）年]



高校選手権記事 1回戦 [昭和64（1989）年]



23年ぶり高校選手権出場記事 [昭和63（1988）年]

1989年（昭和64年）1月5日 木曜日

盛岡商に完敗

国見、清水商など勝ち上がる

湘南無念8強逃す

自慢のDF破られ 攻撃の決め手欠く

湘南は前半から盛岡商のDFに苦しめられ、後半には清水商の攻撃に苦しめられ、最終的に8強に落ちた。

ら始動
向け意欲

古栗監督V宣言

YES '89
YOKOHAMA ENRapture SEASON

高校選手権記事 3回戦（昭和64（1989）年）

1989年（昭和64年）1月5日 木曜日

強豪愛知に快勝

湘南次はベスト8だ

攻守に本来の姿

きょう盛岡商と対戦

湘南は前半から盛岡商のDFに苦しめられ、後半には清水商の攻撃に苦しめられ、最終的に8強に落ちた。

高校選手権大会記事 2回戦〔昭和64（1989）年〕



校舎建て替え グランドに仮校舎建設始まる〔平成4（1992）年〕



高校選手権県予選決勝戦 対相模原〔昭和63（1988）年〕



藤塚先生とメンバー 後ろに石渡弥国体選抜選手〔平成4（1992）年〕



高校選手権1回戦 対上牧〔昭和64（1989）年〕



スペイン遠征 はじまる



平成九（一九九七）年～令和二（二〇二〇）年



新監督に

清水好郎が就任

湘南高校サッカー部三年間で、一年ごとに監督が代わったため三人の指導者を経験したという世代がある。

「目まぐるしく環境が変わることには、とまどいや不安もありましたが、私たち自身はむしろその変化を楽しんでいたと思います。もっと強くなるために、自分たちこそ積極的に変わろうと必死にもがいていたことをよく覚えています」と米山俊直（七十三回生）は振り返る。「食事管理、メンタルトレーニング、ブラジル体操などなど、チームのだれかが提案し、できることから自発的に行動に移し……」与えられた

条件を、よい刺激として受け止めるよう努力していた。

その、一年ごとの監督交代とはこういうことだ。

まず、平成元（一九八九）年の全国高校サッカー選手権出場チームを指導した藤塚久雄が七年後の平成八（一九九六）年三月に異動となり、湘南高を去る。急には後釜のない中、監督不在の異常事態はどうしても避けねばならない。その憂慮を理解し、一肌脱ぐことを快諾したのが昭和三十六（一九六一）年から二十八年間、湘南サッカーを率い、多くの教え子に慕われた鈴木中だった。鈴木がその三月にちょうど県立海老名高校校長を最後に定年退職を迎えていた（神奈川県サッカー協会理事長に就任）こともチームにとって幸運だった。六十三回生の須藤和重をOBコーチとして臨時体制を整えた。臨時ではあったが決して「腰掛け仕事」でなかったのは言うまでもない。鈴木中監督は大ベテランらしい包容力で選手に接し、しかし断固として熱く指導し、予定の一年が過ぎる。

そして平成九（一九九七）年四月、待望の新監督が湘南高体育科の教師として赴任してきた。清水好郎、高校サッカー界で全国的に名の売れた指導者の登場だ。

大学卒業後ほどなく赴任した藤沢西高校が、指導者・清水好郎の事実上のスター

トだった。そこで一気にブレイクする。歴史の深い公立校で、サッカーではほとんど無名だった同校を、赴任後すぐ関東大会の県代表に出場させ、そして全国選手権にも。その快進撃はメディアから「鮮やかな奇跡」と取り上げられ、「藤沢西の清水」は注目を浴びた。そうなる、と、中学校の優秀な選手が入学してくる。よいコーチが参加する。好循環で勢いを増していった藤沢西高サッカーは、清水好郎監督の十五年間（一九七八年～一九九三年）で、関東大会四回、高校総体二回、高校選手権二回の出場実績を挙げた。

平成元（一九八九）年に湘南が出場した選手権の県予選、準々決勝で優勝候補筆頭の藤沢西高と当たったのは前述（第五章）のとおりだが、同チームを率いていたのがかならず清水好郎だった。中盤をほとんど支配され攻められっぱなしの、それは湘南にとって覚悟の上のゲーム展開となったが、皮一枚のところ、失点を防ぎつづけた後半、数少ないチャンスをものにして、コーナーキックからゴール。その一点を死守しきってタイムアップとなった。あの代の湘南チームのことを「藤沢西の清水」はもちろん鮮明に覚えている。

「とにかく守りが粘り強い。ぎりぎりのところでクリアする、厄介なチームでした」。

したがって、こっち（藤沢西）が先に点を取ることを大命題にして臨んだが、「たぶん二回しかなかった相手のチャンスのうちの一回を決められた。その取られ方が悪かった……」

清水が湘南の監督を引き受けることになったのは、その痛恨のゲームの八年後ということになる。

私立高の躍進が 顕著になる

平成九（一九九七）年は、日本のサッカーにとって記憶に残る年といえよう。十一月十六日、マレーシアのジョホールバルで行われたフランスW杯アジア最終予選、イ

ランと戦って延長戦（Vゴール方式）を制し、ついに悲願のW杯出場を決めた。その四年前、カタールの首都ドーハでロスタイムにまさかの失点となり、予選敗退となったのが「ドーハの悲劇」。その対句として「ジョホールバルの歓喜」と名づけられた。

歓喜のW杯初出場は、日本に急激なサッカー熱をもたらした。私立高校は一氣に力を注いでくる。それまでは甲子園の高校野球が強力な学校アピールになっていたのだが、そうした野球熱を凌ぐともいわれるほど精力的に選手を集め、指導者をそろえた。九〇年代にわかに顕著となった「私立高全盛時代」の到来である。

高校進学を考える中学生たちにとって、私立人気が向上した要因として見過ごせないものがあつた。「大学進学実績」である。例として東京大学を挙げると、湘南高校からの東大合格者数は昭和五十八（一九八三）年以降、減少傾向が著しくなる。これには昭和五十一（一九七六）年の「横浜国大附属鎌倉中学内申書事件」（内申点の評価方法の変化）や、昭和五十六（一九八一）年の学区制変更（茅ヶ崎・寒川が湘南学区から外れ、鎌倉・藤沢のみとなる）などの影響も大きく、湘南高の進学面の「ブランド力」が相対的に衰退の傾向にあった。公立から私立へと潮が変わっていく象徴のように。

そうしたなか発進したのが「湘南の清水」時代である。「サッカーにおいて私立校の明らかな躍進ということにどう対応するかについて、特別な奇策などは考えませんでした」。つきつめて言えば、それが新任監督の覚悟だった。すなわち、指導者清水好郎の信念をまっすぐ表現すること。

「技術の面では、キックの重要性を説いてきました。ボールは蹴るのではなく、腰で押す、あるいは擦る感覚、ダイレクトキック、止めて蹴る速さなど、私流の考え方を伝えようとかなり無理も要求しました」

選手たちも応えた。前述の七十三回生・米山俊直は「清水先生の指導は斬新だった」と言い、こうつづける。

「新しいことをやっているんだというよろこびは、十代の少年にとっては何にも代えがたいものでした。ほかの生徒たちが体育祭の準備にはしゃいでいるなか、自分たちはグラウンドに立ち、強い緊張感をもって集中しているという実感、あれは、そう、優越感にほかならなかった」

全国高校サッカー選手権をめざし、三年生が十人以上残った。惜しくも出場は果たせなかったが、手応えある実りをしっかりと握って卒業していった世代であったのは

確かだ。戦績を二つ記そう。ひとつは、平成九（一九九七）年、選手権二次予選の初戦。相手は秦野南ヶ丘高校、清水監督が湘南に赴任する直前まで指導していた学校だ。三年生を中心とした湘南はまともりのあるチームだった。守りは危なげなかったが、得点が奪えない。後半のロスタイムに、キーパーの弾いたボールがころころと自陣ゴールに吸い込まれて万事休す。その二年後の平成十一（一九九九）年、関東大会県予選、順当に勝ち進んで準決勝に臨んだ。相手は法政二高。これも堅い守りを貫いたが、PKで一点を奪われ、同じく惜敗。「このチームは、私の指導したなかでピークの実力だと思っています」と清水は言明する。「それを発揮させてやることでできなかったのは、まさに監督の責任。後悔が強く残っている敗北です」。

スペインへの遠征計画が 発案される

ジョホールバルの歓喜から五年後、アジアで初めてのFIFAワールドカップが日韓共同開催として行われた。五月末日からのおよそ一ヶ月間、試合会場やキャンプ地をはじめ日本列島は世界の祭典に沸騰した。ちょうどその平成十四（二〇〇二）年、湘南サッカー部は活動史において前例のない試みに踏み出していた。清水監督の発案による「スペイン遠征」という企画である。

海外遠征というアイデア自体は、赴任してきたときから清水の頭の隅にあった。当時、大学生の国際志向の低下がメディアで多く語られるようになっていた。そうした風潮のなか、広く世界の視野をもつ心意気を高校生のうちから醸成するのは、教育の一環として値打ちあることにちがいない。清水はそう考えていた。さらにいうなら、私立校の躍進と無関係ではない。学力があつてサッカーも夢中でやりたいという中学生にとって、「湘南」が魅力であるための何か、「湘南らしさ」の付加価値。そのひとつとして、「目を海外に向けるサッカー部」ということにアピール力があるの

ではないか。

あくまでも、ひとつのアイデアであり、すぐ実現へ結びついていったわけではなかった。それが、一気に現実的な運びとなったのは、

「二〇〇二年三月、私（清水）は日本サッカー協会の研修で、スペイン・バスク州の都市ビルバオに行き、強い刺激を受けて帰国しました」

という経緯があった。

その研修先はアスレティック・ビルバオ。サン・マメスをホームスタジアムとしているスペインの歴史あるサッカークラブだ。当然、多くの実績を刻んでいるが、最も大きな特徴は、一九一二年に最後の外国人選手がクラブから去って以降、「選手はバスク人に限定する」というスペインで唯一のクラブ方針を守りつづけていることだ。でありながら、リーガ・エスパニョーラ一部を保持していることに各方面からの評価が高い。ここに清水は強い共感をおぼえた。外から選手をとらないということは、持ち駒で育成を継続して成功させているということである。そして……

「有望な選手が（自由に）取れないという湘南高の現実のなかで、集まった選手でみっちり仕上げていくモデルがここバスクにある」

研修で、そのクラブを目の当たりにする。

「施設は牧場の段々畑を思わせるように、八面の天然芝と人工芝、クラブハウス、人工芝の体育館といったぐあいに見事なものでした。育成は十一歳から二歳刻みでカテゴリーを分け、トレーニングが進みます。私はコーチングスタッフにこう訊ねました。『十一歳の子どもたちがこうまで正確にボールが蹴れるのは、特別なキック習得のプログラムがあるのか』。すると、返ってきた答えは、『そんなものはない。みんな親といっしょに幼児のときから蹴っている。だれもが、足全体でボールを扱うことにいつもなじんでいる』」

クラブ全体の雰囲気ということであれば、まさにアットホームであり、自然体。生活のなかにサッカーが当たり前のように根づいている。

「こういう世界を生徒たちにぜひとも味あわせてやりたいと切実に思いました」

帰国後すぐ、スペイン・バスク州ビルバオへの湘南サッカー部遠征の具体的な企画に手をつけ進める。OB会や学校側は企画の華やかさを十分に感じ取ったが、なんといっても前例のないこと、諸手を挙げて賛成とまではいかなかった。当時で一名四十万円ほどかかる費用の面も大きかった。が、清水はあきらめない。OB会こそ



の意気を尊重する。諸般の事情で学校主催の承認はとれないが、それならOB会の主催としようと全面バックアップにまわった。十一月末には保護者の承諾をとり、いよいよ平成十五（二〇〇三）年三月末からの実施が決定される。半信半疑だった生徒たちは歓声をあげた。

困難をクリアして ビルバオへ

ところが、青天の霹靂。まさにいざスペインへと気分が高揚していた三月二十日、中東で戦火が立った。アメリカ合衆国が主体となり、イギリス、オーストラリア、ポーランドなどが加わる有志連合が、イラクに侵攻を開始したのだ。すなわち、第二次

湾岸戦争（イラク戦争）である。日本の高校生がスペインにツアーすることの安全は確保されない事態となり、急遽中止が決定された。

新しい試みは困難がつきものである。それをひとつひとつクリアして辿り着いたかというところに、思ってもみなかった強烈な障害。意気は萎え、企画は頓挫しても不思議ではなかったが、清水の不屈の構え、OBたちの支援、そして何よりも現役選手たちの「ぜったい行きたい！」の気持ちが集結し、父母（保護者）がそれを熱く後押しして、翌年平成十六（二〇〇四）年三月、第一回スペイン遠征は実施となった。生徒の旅費は自己負担（保護者の援助）、OB学生コーチの旅費をOB会が負担するという形をとった。OB会側の団長を鈴木中に委ねた。湘南の丘近くの桜が咲き始めるころ、さあいよいよ、こんどこそスペインへ出発である。

向かう先のバスク地方（スペイン・バスク州）ビルバオのおおまかなプロフィールを記しておこう。バスク地方は二国にまたがり、スペイン・バスクと呼ばれるスペイン領土の四地域、フランス領バスクと呼ばれるフランス領土の三地域からなる。ビルバオはスペイン・バスク州で最も人口の多い都市だ。市街地は山地に囲まれている。二十世紀前半、世界の耳目を集めたスペイン内戦でビルバオは防衛のため要塞化さ

れたが、フランシスコ・フランコの国民党軍により包囲され、陥落。この悲劇はピカソの名画『ゲルニカ』に表わされた。一九三七年四月、フランコ政権を支持するナチス・ドイツが、軍事・交通の要衝であったゲルニカ（ビルバオに近い都市）を空爆。これに抗議したピカソがパリ万博のスペイン館に展示するために制作したのが名画『ゲルニカ』だ。清水監督は生徒たちに、サッカーの背後にあるそうしたヨーロッパ近現代史のひとつを現地で説いた。

やがて内戦は終結し、ビルバオは産業的に発展し、都市が再建される。フランコ独裁政権の終焉と立憲君主制への移行後、スペインの変化の過程でこの都市で民主的な選挙が復活し、バスク民族主義がいつその影響力を表わした。サッカーチーム伝統の「バスク人限定」にはそうした歴史的な背景もある。

第一回湘南サッカー・スペイン遠征は大きなトラブルもなく順調に、そしてきわめて有意義な収穫を得て終了した。最大の収穫は名門中の名門、アスレティック・ビルバオのユースチームとの実戦を経験できたことといえるだろう。同遠征におけるソーシャルサックスとして、嶋貫祐一氏を挙げておかなければならない。読売クラブOBで、日本バスケットボール協会会長である嶋貫氏と清水監督とは日本サッカー協会の研修

以来の親交があったことから、清水は全幅の信頼をおき、氏にスペインでのコーディネイトのすべてを託した。サッカーとの付き合いが長く、バスク地方を熟知している氏が遠征成功の立役者の一人であったことは言うまでもない。

参加した選手は何を得たか。浅野雅人（八十回生）の証言を聞こう。

「遠征の試合では現地の同年代を相手に互角以上の試合ができたといえます。最高の環境でサッカーができ、チームメイトたちのモチベーションもとても高かった」。どんなサッカーを得た？

「試合を行ったすべてのピッチがきわめて上質の芝生です。その芝生を生かしたプレイや、組織にとらわれず個を大事にするサッカーを体験することができました。日本とはちがうサッカー環境を体感することに加え、一流のサッカーを見学できたことも大きな収穫となった」

スペインリーグも観戦した？

「観戦しました。そしてアスレティック・ビルバオの練習も見学しました。選手をとっても近い位置で見ることができ、ふだんから先生方に指導されていた『止める・蹴る』の上手さ・速さには衝撃を覚え、基礎の重要性を強く再認識させられました。帰国の

際に立ち寄ったパリも含め、あの数日間にさまざまな場所を訪れたことは大きな財産となっています」

団長を委ねられた鈴木中が、OB会HPに寄稿した「報告記」の一部を抄録する。

「二〇〇四年三月の春休みを使って、湘南高校サッカー部は歴史上初めての海外遠征・スペイン合宿を執行した。こうした事業は学校の主催ではできないので、サッカー部OB会・父母会が主催する形にしての実施である。私を即製『団長』に、春休みを利用して生徒の希望者が参加し、それを先生がお手伝いするという方法で行われた。後から考えるとかなり無謀な感じがしないでもないが、業者の選定、スケジュール、人の問題など、条件がそろい綿密な計画さえできれば、これからも可能な事業という確信を得た。

百聞は一見にしかず。本場サッカーの指導体系、日本でいえば小中高の年代の少年たちをカテゴリー別に一本化する指導、そして頑なに守っているこの地方特有の「バスケット主義」おらが町のサッカーの本質……。

アスレティック・ビルバオの百年間続いている伝統を受け継ぎ、一度も二部に落ちない誇りあるチームがピラミットの頂点にいて、何度も優勝している。バスケット地方特

有の下部組織ができており、どの町へ行っても芝生のグラウンドを持ち素晴らしい施設がある。そんな施設と組織と、そして強靱で心根の優しいバスケの男たちに接するだけで、サッカーというスポーツのロマンを感じるというものである。そうした環境の中で育った同年代の選手と真剣勝負で試合をする湘南の生徒は、吸収するものがきわめて豊富にあっただろう。生活する宿舍、町並みやスタジアム、本場プロの試合、スタンドの応援、サッカーを通して感じるスペイン・バスケの空気感すべてが糧になったと確信している」

第一回の成功をバネとし、このあとスペイン遠征は二年に一度のペースでOB有志の同行も得て「湘南サッカー名物」として定着していく。

十一年間の清水時代は 第三回遠征をもって終える

数年後の平成二十三（二〇一一）年十一月の湘南高創立九〇周年記念式典で、川井陽一校長（当時）はこう挨拶した。「公立高校を牽引していく役割を果たすとともに、百周年に向けて世界に通用する高校教育を展望し、構築したい」。グローバル志向の表明である。

湘南高創立九〇周年の企画特集を組んだ神奈川新聞は「『日本一』から世界へ」との大きな見出しをつけて、こう報じた。「初代校長の赤木愛太郎が『日本一の学校』をめざした湘南高は、時を経て世界を視野に人材の育成を進めている」。同窓会「湘友会」はこれに呼応して、在校生の海外研修旅行への支援を始めた。

サッカー部スペイン遠征は、期せずしてこうした「グローバル志向」に先鞭をつけたということになる。

この時期、神奈川県の高校にとって、小さくない環境の変化があった。入試制度の変更である。平成十六（二〇〇四）年から、前期選抜と後期選抜に分け、前期は入

試を行わず、調査書と面接のみで合否が決まるようになる。評価も相対評価から絶対評価となった。絶対評価の基準は各学校で決めるため学校によるばらつきも出て問題になった。

サッカーでいえば、平成十六（二〇〇四）年神奈川県でリーグ戦が開始された。後述のように、日本協会の先導によって全国的にリーグ戦が始まっていた。高校の部活動には属さないと決める生徒も現れている。こうした受験制度の変更や学校競技の環境変化のなかで企画され実現されていたスペイン遠征の意義は多面的であったにちがいない。

二〇〇四年に第一回を敢行したスペイン遠征は、計画通り、二年後の二〇〇六年に第二回を、二〇〇八年に第三回を実施した。OBは全面的に協力し（医師となったOBが多忙のなかチームドクターとして同行するなど）、すべて実り多いものとなった。

その第三回遠征中の同年四月一日に人事異動が発令され、スペイン遠征という大きな置き土産を残した熱血監督清水好郎は、十一年間の在任をもって湘南高を去ることになった。

ユース年代の U18リーグシステム

平成二十（二〇〇八）年、清水好郎のあとを受けて湘南サッカー部監督に就任したのは、小林周太郎である。日本大学卒業後、厚木北高校で八年間教鞭をとり、湘南高校に異動となった小林は、中学時代から日産ジュニアユース（現在のマリノス）に所属し、ずっとサッカーを究めてきた青年教師だった。

選手たちに「考えること」を求めつづけた監督。という印象が、指導を受けた選手たちの多くから聞かれる。赴任後初のミーティングから、こう投げかけた。

「君たちの目標はどこにある。エンジョイフットボールとして取り組むのか、チャン

ピオンシップスポーツとして選手権を目指すのか」

そのことを、監督の指針として示すのではなく、「チームとして決めてほしい」と選手たちに促した。考えること、自主であること、の大切さを説いたのだろう。厚木北高校で得た全国区の人脈を生かし、全国区の強豪高校との練習試合が多く組まれた。それは選手たちに「全国」のリアル感を育て、「全員が選手権を目指して秋まで残る」という意識につながった。

その小林が平成二十六（二〇一四）年までの六年間監督を受け持ったあと、引き継いだのは竹谷睦である。桐光学園時代、全国選手権に出場し、大会優秀選手に選ばれ、国士舘大学でも全日本選手権で優勝、ベストDF賞を得て、卒業後、水戸ホーリーホックに所属し、公式戦におよそ二十試合出場した竹谷は、東洋大学サッカー部の指導歴もあった。

U18の育成システム全体の見直しが始まったのは一九九〇年代以降だった。平成八（一九九六）年、サッカー医科学研究会（日本サッカー協会、スポーツ医学委員会・科学研究委員会共催）で「育成期における競技会のあり方」がシンポジウムの議題に

取り上げられ、「ユース年代のリーグシステムの構築」の構想が示された。トーナメントのみではなく、より試合数を増やし、切磋琢磨を積んでいくことが日本サッカーの底上げにつながるという考えである。この動きは日本サッカー協会の第二種（高校生年代）検討委員会でも取り上げられ、同協会の事業としてU18の整備が進められた。神奈川県第二種リーグはレベル別にK1（十チーム）、K2（十チーム）、K3（四十チーム）、K4（それ以外）で構成され、現在に至っている（二〇一九年度の湘南高チームはK3に所属）。

全国高等学校体育連盟（高体連）所属の高校サッカーチームに加えて、日本クラブユースサッカー連盟（JCY）所属のクラブチームが並立していくことになった。二つの連盟の壁を超え、同じ土俵で争われる「高円宮杯」（二〇一一年からスタート）がユース年代の競技会の頂点ということになるが、現実的には二つの連盟の規模には大きな差がある。二〇一八年度の男子サッカーでの数字はこうだ。高体連加盟校三八八〇校・部員数十六万五三五一名に対し、クラブユース連盟一二〇クラブ・三三二一〇名。多種多様な学校のサッカー部、Jリーグの育成組織であるJクラブユース、そして地域クラブユースが共存しているのが現在の日本のユース年代のサッカー

であり、こうした多様性こそが日本サッカー界の特徴といえるだろう。が、やはり高校サッカーの檜舞台は全国高等学校サッカー選手権大会であり、全国高校総体（インターハイ）であることに変わりがない。さらにいえば、メディアに華々しく取り上げられる頂点こそ、「選手権」「冬の国立」「冬の高校サッカー」などと呼ばれてきた正月の選手権大会にはかならない。

平成の閉幕から 次の時代へと

平成天皇は、平成二十八（二〇一六）年、国民へ向けたビデオメッセージにおいて、高齢による衰えで象徴の務めを果たせなくなるとして生前退位の意向を示唆されて

いた。そして三年後の平成三十一（二〇一九）年四月三十日、天皇の地位から退かれ、平成は三十年と四ヶ月で幕を閉じた。明けて五月一日、皇太子徳仁親王が新天皇に即位し、元号は平成から令和に改まった。

湘南サッカー部の指導者、平成二十（二〇〇八）年に就任した小林周太郎から、六年後に引き継いだ竹谷睦までを仮に「小林・竹谷時代」と呼ぶとすれば、この時代はまさに平成の閉幕から令和の開幕の中にあった。

この小林・竹谷時代を戦績的にいえば、二〇一九年までの十二年間で、選手権の神奈川県二次予選に進むこと十回という実績が残る。その実績はそれ以前の時代と（学校数のことなど単純には比較できないとしても）決して遜色ない、というよりむしろ上回るともいえるだろう。清水監督のもとで現役時代を過ごし、卒業後の大学および大学院の五年間、学生コーチとして小林監督を支えた篠塚貴志（八十二回生）は、こう証言する。

「小林先生時代の選手たちは、チームとして懸命に選手権を目指してトレーニングしていました。三年生が選手権予選まで残る意識が植えつけられ、三年の秋までサッカーをつづけるのが当たり前という思いを共有していました」

もちろん、大学進学実績が犠牲になったわけではないことも付記しておこう。

篠塚同様、卒業後OBコーチとして監督を補佐したメンバーの回想に耳を傾けてみる。八十六回生の石川恭一郎は三年生時、主将を務めた。東京学芸大に進学し、サッカーをつづける。その間、教育実習生として湘南高校へ通った期間もあった。

「私が湘南サッカー部に入部した時は、顧問が清水先生から小林先生に代わるタイミングでした。選手権の一次予選を七年ぶりに突破して二次予選に進み、一回戦で前年準優勝の逗葉高を破った試合は忘れられません」

先発で試合に出る機会が増え、初の公式戦となった湘南地区の新人戦では日大藤沢を破って決勝進出し、清水と互角の勝負をした。「その後もベルマーレや流経柏などの有資格チームと練習試合ができ、充実していました。夏合宿では山中湖で一生の記憶に残るくらい走りました。絶対に昨年より良い結果を残せると信じ選手権に臨みましたが、二次予選の初戦で日大藤沢と当たり、0―2で敗れました」。メンバーの一人も辞めずに選手権予選に臨んだ彼らは、「公式戦で良い結果を残せなかったり、出番も限られる苦しい状況であっても最後までいっしょに戦ってくれた仲間たちが今も誇りです」。

もう一人、八十八回生の長大地は、大学時代四年間を通じてOBコーチを務めた。その現役時代の回想記を抄録する。彼らのチームの戦績は、前後数年のなかで光っていた。

「小林先生のご指導のもと、サッカーの試合からエッセンスを抽出したような基本を三年間、日々繰り返し返しました。三年時のU18・K2リーグ（当時）で全試合無失点で優勝し昇格を決めたことは、この練習の成果だと確信しています。三年時の戦績は、関東大会、高校総体、高校選手権ともに県下ベスト16。目標としていた全国の舞台に立つことこそできませんでした。本気で目指し、仲間と切磋琢磨したこと、はかけがえのない経験です。

スペイン遠征の体験もきわめて貴重でした。今までの当たり前が覆される瞬間が凝縮された時間のなかで、やはりサッカーを通じたイベントが何よりも印象に残っています。数々のプロサッカー観戦そして現地チームとの試合、とくにアスレティック・ビルバオの素晴らしい練習施設で、ユースチームと対戦できたことは最高に幸せな時間でした」。

恒例の事業として定着した スペイン遠征

平成十六（二〇〇四）年に第一回が実施された湘南サッカー部スペイン遠征は、清水監督から小林監督へと引き継がれ、オプションとしてロンドンのプレミアリーグ観戦も加わるなど充実を見せる。なによりも各方面の多大な援助によって、春の恒例の事業として定着していった。九十一回生の山根隆史は、「そもそも、湘南高校を受験しようと決めたのも、湘南サッカー部で活躍していた中学時代の先輩からスペイン・イギリス遠征があることについて聞いて、ぜひとも行きたいと考えていたからです」と明言する。彼の印象に残るスペインを聴こう。

「ひとつはスペインのアスレティック・ビルバオのユースチームとの試合。ビルバオ

はバスク州に本拠地を置いており、トップチームはリーガ・エスパニョーラ一部に所属しています。クラブに所属する選手がバスク人に限定されている特殊なチームで、現地の子どもたちはクラブに入るために一生懸命努力をしている。私たちは試合のための練習場でまず度胆を抜かれました。環境のすばらしいこと！何面もの芝生のグラウンドが並び、私たちが試合をしたグラウンドも人工芝の下に土が敷かれている当時の最先端のグラウンドでした。試合の結果はといえば、ボロ負け。電が降る中、湘南の選手は濡れたピッチで足を滑らすがビルバオの選手は涼しい顔で巧みな個人技を見せ、パスをつなぎます。自分の同年代（中には明らかに年下）でここまで体格・技術とにもかなわないとは……悔しいかぎりでした。

もうひとつは、現地でのプロサッカーの観戦。スペイン・イギリスのレベルの高さ、熱狂ぶりは予想をはるかに超えたものでした。正確なパス、球際の強さ、スピード感どれをとっても世界最高レベルで、生で観ることができたのはとても貴重な経験でした。さらに印象的だったのが、観戦客とピッチの距離がきわめて近いこと。当然、熱い。夜遅くのキックオフで時差ぼけも重なり観戦中に居眠りしてしまう湘南生がいたのですが、それに対して地元ファンから——ちゃんと観ろ！——との叱咤が飛

んできました」。

それぞれが自らの 大きな財産として

もうひとり、異なる角度からの回想を記そう。九十四回生の佐藤純は、現役時代のはとんどの時間、膝のけがを抱えてマネージャーとして活動した。公式戦でベンチ入りの試合は三試合、出場はわずか一試合。

「大いに悔いを残す三年間となりましたが、同時に多くの貴重な経験をしました」。

三年生時の回想。

「最高学年でマネージャーとして過ごすなか、チームのことを考える自分と、自分

のサッカーを中心に考える自分とのギャップに悩み、つらい時期がありました。そこで支えてくれたのは、ともに戦ってきた仲間の存在でした。朝練でリコンディショニングを手伝ってくれ、練習のサポートとともにやってくれ、練習後の時間を自分のことに充てられるようにしてくれるなど、自分へのサポートを肌で感じたときに、チームのために自分のできることをしようと強く決意しました。三年の夏に入った時期に自分のサッカーへの考え方が、自分本位のものから、どのような境遇からでも這い上がることができる、という姿を自分の背中で後輩に見せたいというものへと変わりました。八月の中旬に選手として復帰してから選手権予選までの一か月、体がうまく動かずブランクを感じながらも、必死に練習に食らいつき、過ごしました。結果としては、ベンチメンバーには入ることができたものの、試合に出ることができずに二次予選二回戦負けと、チームとしても個人としても満足のいく結果を出せないまま引退を迎えてしまったことに悔しさが残っていますが、マネージャーとしての経験のなかで得たものの、最後に選手として全力になったこと、それらは自分の大きな財産となっています」。

東大ア式蹴球部に 選手輩出の復活

東大ア式蹴球部（通称サッカー部）は、大正十四（一九二五）年に始まったア式蹴球コレッヂリーグで六連覇を達成した強豪チームだった。湘南サッカーは、戦前のOB監督四名のうち三名までがその東大ア式蹴球部出身者であったように、創部当初から縁が深かった。以後も多くの選手を送り出していったが、一九八〇年代あたりから漸減の傾向となり、昭和六十（一九八五）年の大久保将之（五十九回生）を最後に入部者が二十六年間途絶えた。そもそも東大への入学者数が減ったことが要因だった。その傾向に変化が生じたのは二〇一〇年代になってからである。全県学区となり、学力向上進学重点校の指定を受けたこともあって、東大への入学者数が復活し

始めた。さらに湘南サッカー部の活性化もみられ、選手層も厚くなった。その結果、二十六年間のブランクを過ぎたのち、榊原和洋（八十五回生）が入部したのを皮切りに、その後八十八回生から九十一回生まで毎年東大ア式蹴球部に選手を送り出し、それぞれが熱心な活動を繰り広げ、創部以来の縁を引き継いでいる。

グラウンド一世紀 変わるもの・変わらないもの

令和に移って初めての湘南高蹴球祭が、令和二（二〇二〇）年一月五日に開催された。

蹴球祭の経緯については各説が伝えられているが、そのなかのひとつはこうだ。

昭和十六（一九四一）年、太平洋戦争が始まった。湘南中学の時代である。戦火が激しくなり、報道ではいっさい触れられなかったが日本の敗色のきざしも見え始めていたころ、昭和十八（一九四三）年の元旦に、サッカー部員およびOBによるある催しが持たれた。その名は「初蹴会」。戦場へ駆り出される若者にとっては、「これがボールを蹴る最後だ」とのけじめであり、見送る若者にとっては、「ご武運を。いえ、どうぞご無事で」の切実な祈りだったという。この、一回きりのはずだった元旦の「初蹴会」は、戦後復活する。それが「蹴球祭」と名を変え、正月の名物となった。この説が事実であるならば、（戦中の中断はあったとしても）およそ八十年の歴史ある催しということになる。

その令和二（二〇二〇）年一月五日、蹴球祭は冬晴れの日となった。全国高校サッカー選手権の準々決勝が行われる日でもある。神奈川県代表の日大藤沢高校は、ダイクホースの評価があったが、三回戦で仙台育英高校にPK戦で惜敗していた。

蹴球祭は若手の紅白戦から始まって総会に移り、春に行われる九回目となるスペイン遠征の企画の確認が検討される。翌年（二〇二一年）には遠征時に学校交流を

行なっているガストウレータ校（スペイン・バスク地方ビルバオにある私立の名門校）の来日の予定もあることが報告される。つづいて、OBと現役との交歓式。超OBにとっては孫と同年代の選手たちと新年の寿ぎを交わし合う。どこか照れくさそうでもある。

チームを率いる竹谷睦監督は言う。

「学校数も圧倒的に増え、県内の戦いはいっそう熾烈をきわめているのが現状ですが……」全国選手権出場を狙うのはいうまでもない。つねに五十人以上の部員たちは目的意識をしっかりと持っている。

他の学校にない特徴といえば？

「明らかなのは、『伸び率』です。湘南の生徒たちは、どの選手も入部してきたときと卒業時には、これがあの子か、とおどろくほどの違いを見せていきます」

OBたちの指導スタッフの充実もあるが、やはり意識の高さを挙げたいという。フィジカルやテクニクだけでなく、「忍耐力」をはっきり身に着けて卒業していく。今後、高校サッカーの環境は著しく変化を見せていくといわれ、「プロの予備軍」と「学校サッカー」が明確に二分されていくだろうとの指摘もあるが、そうしたなかで

選手たちの活動のスタイルにも何らかの変化が見られてくるのだろう。

好天氣に誘われるように、世代を超えたOBたちが三々五々グラウンドにやってくる。蹴球祭の午後は恒例の親睦ゲームだ。四十代のAI企業の社長が果敢なドリブルをすると、六十代の理学療法士が目を疑うようなタックルで奪う。五十代の公務員がセンタリングを上げると、七十代の元新聞記者がヘッドイングシュートを試みる。いずれもスローモーション映像のようにゆるくおっとりしているが、かつての感覚が蘇るのか本人たちにとってはそれなりに激闘である。

この同じグラウンドで、湘南中学の第二回生・岩渕二郎が新任数学教師の後藤基胤の足技に目をまるくし、「これが英国のアソシエーションフットボールか」と胸をときめかした春の午後から、およそ一世紀経っている。その岩渕二郎が卒業後、後進の指導にあたり、練習している選手の怠慢に気づくと、おもむろにポケットに詰めていた小石のひとつを礫のように当該選手の足元のグラウンドに飛ばし、「待てッ、おろかものッ」と檄を飛ばしたものだ、真偽のほどはあてにならない伝説の光景からも八十年は過ぎている。

日本が戦争を始め、その戦争に敗れた翌年に湘南サッカーは初めて全国制覇をとげた。直後に、学制改革で「中学」から「高校」へ。校舎が火災で焼けた十年後に関東大会優勝、そのあと「高校百校新設計画」で神奈川県の高校の地図は大きく変化する。二十三年ぶりの全国選手権に出場という快事の年は、期せずして昭和から平成へ移る年となった。翌年には老朽化した校舎の全面改築となり、グラウンド難民となったサッカー部は練習場をジブシーのように転々とした。日本のプロサッカーがスタートし、ワールドカップの主催国にもなった。

高校サッカーの様相は大きく変わった。令和二年の蹴球祭の会場となったグラウンドも一世紀前とはまさに隔世の感ということになるだろう。けれども、一個のボールを追っかけて選手たちが（年齢相応にはあっても）激しく競り合うようすは、どこも変わってはいないともいえる。晴れの日も雨の日も、こんなふうにグラウンドは同じ景色を見せてきた。

思いも寄らない パンデミック

こうして令和二（二〇二〇）年正月の蹴球祭風景を、湘南サッカーの百年史に関する記事の結びとする。それが当初から編集部内での決まり事だった。まさかないだろうが、二〇二〇年その年に何か大きな異変でも起きないかぎり、と……。

そのまさかが起きた。新型コロナウイルスという疫病禍である。前年の暮れに世界保健機関（WHO）に報告された同ウイルス感染は世界的に拡大し、二〇二〇年の三月にWHOはパンデミック（世界的大流行）に相当するという認識を示すに至る。夏に開催するはずだった東京オリンピック・パラリンピックは、一年間の延期という異例の決定が三月末に報じられる。

四月十六日からは、日本全国を対象とした非常事態宣言が出された。密閉・密集・

密接を避けるソーシャルディスタンスという気配りを国民が共有していくことになる。欧米ほどではないにしろ、日本も多くの死者を出した。湘南サッカー部OB、外交評論家としてメディアでも切れ味よい発言をつづけていた岡本行夫（三十九回生の命も奪われた（四月二十四日没））。

企業はテレワークを採用し、飲食店は自粛し、芸術やスポーツの催事はことごとく中止となる。ソーシャルディスタンスは、街から人の姿を消してしまった。高等学校も休校となり、当然、部活動はストップされる。サッカーの関東大会も高校総体も戦後初の中止が決まった。湘南高のスペイン遠征も中止となる。

歴史において過去のパンデミックは世界の人びとの生活様式そのものを変えてきたといわれる。コロナはどう変えるのだろうか。

フランスの作家アルベール・カミュの作品、一九四七年に出版された『ペスト』が、年を経てにわかに世界のベストセラーとなる。ペストの流行で封鎖された都市が舞台という作品がコロナ禍の人びとの心をとらえたわけだが、日本でも二〇二〇年四月には文庫版の発行部数が累計百万部を超えた。このノーベル文学賞受賞作家は、貧

しい家に生まれ奨学金を受けながら通った高校で、サッカーに打ち込んだ。プロになってもおかしくないほどの選手だったと伝えられる。「私に人間の倫理と義務を教えてくれたのはスポーツだ」。カミュが高校時代のことについて語った言葉である。

疫病のパンデミックはこれからの高校サッカーの風景にも何らかの変化をもたらすことだろう。だが、創部一世紀を迎えた湘南サッカーには、変遷をつづけてきたなか、新しさを獲得し、次世代へ受け渡してきた歴史がある。次の一世紀へ向けても、大いに変わり、長く継がれるものを生んでいくはずだ。





アスレチックビルバオユースと試合〔平成26（2014）年〕



アスレチックビルバオの試合観戦〔平成26（2014）年〕



バスクの新聞に記載〔平成22（2010）年〕 湘南サッカー部のマークがバスク十字（ラウブル）に似ていると話題に（湘南マークを紹介する中央写真）



提携校ガストゥレータ校との交流会〔平成26（2014）年〕



試合後のパーティ モラ村村長と〔平成26（2014）年〕



ビルバオのシンボル ビスカヤ橋〔平成18（2006）年〕



ビルバオ郊外 宿舎近くのグラウンドで〔平成18（2006）年〕



ガストウレータ校校長と竹谷先生
[平成30（2018）年]



プレンシアのコーチと小林先生
[平成22（2010）年]



清水先生とエイバルクラブ代表
[平成30（2018）年]



湘南高校との試合ポスター
プレンシア [平成28（2016）年]

▽準々決勝
湘南 2 1 1 1 1 1
日大 0 0 0 0 0 0
東 0 0 0 0 0 0
湘南 0 0 0 0 0 0
日大 0 0 0 0 0 0
東 0 0 0 0 0 0

湘南は8強で敗退
○湘南の快進撃がスト
ップした。優勝した198
8年以来9年ぶりに進出
した準々決勝で、東に惜敗
した。

好セーを昇格していたGK
岩村は「勝ったことが最
後まで諦めなかったけど
……」と涙を流した。

今大会は試合連続で最
少失点に留めて勝ち上が
ってきた。「学校全体が盛
り上がった。応援のおかげ
来年、後輩がここを超えて
くれる」。3年生GKは涙
を見せず夢を託した。

東湘南は激戦必至

（12時・横須賀リーフス
タジアム）
県2部リーグ同士の対
決は激戦必至。両チーム
とも身長180センチの選手
が複数いる大型チーム。
中盤の主導権争いが見も
のだ。実績では公立勢で
唯一、県総体4強入りし
た東がリード。2試合9
得点と厚い攻めを見せ
る。湘南は粘り強い守備
で流れを引き寄せ、勝機
をうかがう。

桐光学園	24日15・00日
桐蔭学園	11月1日13・00等
厚木北	24日10・00日
湘南工大付	11月7日13・05二
東	24日12・00日
湘南	11月1日15・00等
向日	24日13・00日

【会場】日は日大藤沢高、
りは横須賀リーフスタジア
ム、等は等々力陸上競技場、
二はニッパツ三ツ沢球技場

東が公立対決制す
○東は湘南との公立対
決を制して4年ぶりの4強
入り。前年16分、DF岩崎
の右クロスでW小山が頭
で合わせて制し、そのま
ま逃げ切った。決勝ゴール
の小山は「優勝のおかげ
。本当にいい試合が合
う」と感謝しきりだった。
次戦は初の決勝進出を懸
け、前回の主将の日本代表と
ぶつかる。小山は「日大
藤沢の、小島選手からハ
ッパをもらって決勝進出
にむかふ。県内屈指のDF
の名を背負って強気に意気込
んだ」。

高校選手権県予選惜しくもベスト8で敗退 [平成27（2015）年]



エイバルユースとの試合前風景 [平成30（2018）年]



OBの風景

OB会

OBチーム

活躍フィールド



OB会

昭和四十（一九六五）年、安保隆文（十六回生）、山口雄司（二十回生）、桑田孝（二十二回生）の呼びかけで、旧制中学OBの集まりが開かれた。この企画は新制高校へと引き継がれ、岩渕二郎（二回生）の定時制高校教員就任以来、定着される。しかし時の流れの中にやがて途絶え、長く中断となる。

昭和五十五（一九八〇）年三月の岩渕二郎急逝により、偲ぶ会が開催された。これを契機に正式なOB会の発足となる。昭和五十六（一九八一）年一月十五日だ。初代会長には満場一致で天野武一（一回生）が選出された。OB会の意義は、現役への物心両面の支援であると同時に、「おなじカマのメシを喰った」者どうしの親睦

である。ゆえに、明文規約を持たず、幹事（ボランティア）の働きにより運営されている。初代・天野武一以後の会長は次の通り。二代・桑田孝（二十二回生）、三代・柳川明信（二十七回生）、四代・井上孝（三十六回生）、五代・牧村英樹（三十七回生）、六代・小泉親昂（三十九回生）。

平成十三（二〇〇一）年五月、本格的なネット時代に先駆けて、現役とOBの交流の場であるホームページ『湘南サッカー』を立ち上げる。元監督・鈴木中の意を受けた浅倉泰（四十五回生）が作成したもので、そのひとつのコンテンツとして鈴木中は『中さんのメール通信』として湘南サッカーに対する熱い思いを発信しつづけている。

平成二十六（二〇一四）年二月には最新のウェブ技術を導入して大幅なりニューアルを行い、湘南高校サッカー部および湘南ベガサス（OBチーム）の歴史アーカイブとして機能に磨きをかけた。高校サッカー部のホームページとしては全国でも稀な存在である。<http://www.shonan-soccer.com/>

平成十六（二〇〇四）年三月から始まった「スペイン遠征」の経緯については第六章でふれたが、OB会としての関わりをいくつか補足する。当初の主催はOB会だが（のちに学校との共催）、その管理を中心となって務めてきた相羽克治（四十一回



生)は毎回選手団に同行してきた。医師(チームドクター)として加納正道(四十三回生)、若木均(六十四回生)も同行した。さらに、語学面からのサポートを森秀樹(四十六回生)が担ってきた。ニューヨーク大学経営大学院卒業(MBA)の森は、歌手としても活動しており、ギターを弾きながら英語の唄を歌うなどのユニークな研修プログラムで生徒たちを実践的に指導した。

OB会は年を重ねるごとに規模が膨らんでくる。その運営は言うまでもなくボランティア活動に支えられている。三十年以上、事務局の会計業務を担ってきた武藤俊一(五十三回生・藤沢市役所に化学職として勤務、環境保全などの仕事に長く携わる)をはじめ、多くの有志の力が大きい。

OBチーム

昭和十年代、神奈川社会人リーグに「湘南OBチーム」として参加、セントジョセフなど外人チームとの親善試合も行った。昭和十五(一九四〇)年には神奈川県選手権大会で優勝。岩渕二郎(二回生)はCFで出場、このチームの最年長だった。戦後昭和二十年代、神奈川リーグ復活で、再び「湘南OBチーム」とし参加。関東大会にも出場した。

昭和三十年代後半からは、若手OBの大学生を中心に「湘南クラブ」が生まれ活動を始める。藤沢リーグなどでゲームを行ない、平成十三(二〇〇一)年ごろまで継続した。同クラブは湘南OBの基礎となる重要なチームといえ、「アンテロープス」(四十二回生・四十五回生で結成)、「湘南ボールゲームクラブ」(四十五回生・五十四回生で結成)などのチームを生む母胎となった。

その「湘南クラブ」から独立する形で平成四(一九九二)年に生まれたのが「トトカルチョ湘南」だ。六十三回生・六十五回生が中心となって結成されたものだが、同チームの名称は、平成元(一九八九)年、全国高校選手権に出場したときの湘南高

のまさかの不祥事(第五章に詳述)のシャレである。が、シャレのわりには戦績が豊かで、平成八(一九九六)年の神奈川県郡市大会で優勝、八百チームの頂点に立った。翌平成九(一九九七)年からは県社会人リーグに加盟し、その後一部昇格を果たした。令和元(二〇一九)年現在も県三部リーグで活動している。

時代を少し遡って、湘南OBチームの最も象徴的なものといえば四十雀リーグで華々しく戦ってきた「湘南ペガサス」を挙げなければならない。昭和五十八(一九七八)年に結成されたもので、やはりガンブチ岩渕二郎が大きく関わっている。誕生ストーリーは第四章でふれているので、その後の活動を抄録しよう。平成三(一九九二)年からは五十歳以上の「湘南ペガサスシニア」が四十雀リーグに別チームとして参加。平成九(一九九七)年から発足した五十雀リーグに「ペガサス50」として、さらに平成十五(二〇〇三)年には六十雀リーグが開始され「ペガサス60」を、平成二十(二〇〇八)年には「ペガサス70」を結成。令和元(二〇一九)年現在、そうした五チームでおよそ百七十名の壮年プレイヤーが、ペガサスの名のもとで意気軒昂にボールを蹴っている。

活躍フィールド

湘南サッカーを経て、社会の各界で大きな足跡を残してきた超OB。

いまでも独自の営為をつづける若手OB。

そうした活躍の全貌を

ここに網羅することはできないながら

その一部を紹介する。

日本のサッカー界で

戦後の国際試合に出場した湘南OB四名の選手について第三章で簡単にふれたが、

ここではその四名の戦歴を紹介する。

OB監督として母校湘南中学を初の全国制覇に導いた大埜正雄（十五回生）は、水戸高校から東北帝大を中退し兵役ののち、東京大学へ進学し運動会ア式蹴球部に所属。東大LB（現役OBの混成チーム）の一員として全日本蹴球選手権大会で優勝。大学卒業後は日産化学工業に入社。昭和二十七（一九五二）年の全香港華人選抜戦で日本代表デビュー。昭和二十九（一九五四）年のワールドカップ・スイス大会予選など国際Aマッチ三試合に出場した。

田村恵（十九回生）は、昭和二十六（一九五一）年の全関西戦で日本代表デビュー。同年三月のニューデリーでの第一回アジア競技大会で全三試合に出場し三位を勝ち取った。

山口雄司（二十回生）は、明治大学に進みサッカー選手をつづける（山口昭一の名前で）。代表デビューは、昭和二十七（一九五二）年の全香港華人選抜戦。その翌年、第三回国際学生競技大会に全日本学生選抜として参加。

小林忠生（二十四回生）は、日本代表として昭和三十一（一九五六）年にメルボルン五輪アジア予選に出場。韓国と一勝一敗の末、抽選で五輪出場権を獲得。十一月

のオリンピック本大会では、開催国のオーストラリア戦に出場したが0・2で敗れた。第三回国際学生競技大会に全日本学生選抜として出場。西ドイツ戦では3・4で敗れたが二得点と活躍した。

フル代表以外での国際舞台での活躍も付記しよう。

昭和二十八（一九五三）年、学生選抜として既述の山口雄司、小林忠生に加えて、小田島三之助（二十五回生）が選出され、ヨーロッパ遠征、ドルトムント大会に出場した。小田島は、早稲田大学卒業後、日立製作所に入社し、関東実業団リーグ、全国社会人大会で優勝二回を経験した。

時代は下って、昭和四十（一九六五）年関東大会優勝のメンバー、四十一回生の福井民雄は慶應義塾大学時代、一年次からレギュラーで、四年次には主将として全日本大学選手権優勝。卒業後は東京海上サッカー部で選手・監督生活十七年。さらに平成十九（二〇〇七）年から十年間慶應義塾体育会サッカー部総監督を務め、平成三十（二〇一八）年からは一般財団法人全日本大学サッカー連盟専務理事として重責を果たしている。その福井民雄の一級下で関東大会優勝メンバーの一員だった関口真（四十二回生）は、大学でも福井と同じ慶應義塾に進み、一年次からレギュ

ラーで活躍、卒業後は住友金属に入社。関西社会人リーグから日本サッカーリーグ二部への昇格に多大な貢献を果たす。その後、プロリーグ発足を見据え、平成三（一九九二）年ブラジルからジーコを招聘するなど、Jリーグの「鹿島アントラーズ」設立スタッフとして尽力した。

慶應義塾大学で活躍する選手は多く、五十二回生の八木啓太もその一人だ。卒業後、サッポロビール社に勤務したのち、平成三十（二〇一八）年から先述の福井民雄の後継者として慶應義塾体育会サッカー部総監督に就任。同大学の三年ぶりの一部復帰に貢献した。

サッカーを分析し、考察するサッカー・ジャーナリストの草分け的存在もいる。四十六回生の湯浅健二だ。昭和五十一（一九七六）年に西ドイツ（当時）のケルン体育大学へ留学後、ドイツサッカー協会公認指導者資格「スペシヤルライセンス（プロサッカーコーチライセンス）」を取得。帰国して昭和五十七（一九八二）年に読売クラブ（現東京ヴェルディ）の専属コーチに就任する。コーチ業としての実績もさることながら、『サッカー監督という仕事』（新潮社）をはじめ、多くの著書によって、サッカー文化の裾野を広め、興行きを深めたことが評価されている。

五十四回生の篠塚毅は、大学卒業後、銀行に勤めニューヨークに赴任する。そして平成四（一九九二）年に社団法人（当時）日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）に入社し、初代事業部長として放送権、協賛権、商品化権の企画・販売を担当。四年後に独立し、各種スポーツクラブの経営アドバイザー、二〇〇二年日韓W杯キャンプ誘致活動に従事した。

平成三（一九九一）年、Jリーグ発足後、現在（二〇二〇年）までのところ、湘南サッカー部OBからプロ選手は輩出していないが、地域に関わってさまざまな活動は繰り広げられている。

あんなOBこんなOB——① ビーチサッカー、湘南SPREAD1545

現在では、FIFAが第三のサッカーと正式に位置づけている「ビーチサッカー」は、その名のとおり砂浜を戦場とするサッカーである。ブラジルを発祥地として広く欧米に広まった。◆櫻井大輔（七十九回生）とビーチサッカーとの出会いは、大学時代、鶴沼で砂浜のサッカー大会（沖縄本大会につながる予選大会）があるとのうわさを聞き、湘南高時

代のチームメイトを誘ってオープン参加したことから始まった。やがて、大学在学中に自身が代表を務めるチームを結成する。「湘南SPREAD1545」。SPREADはこの新スポーツの「輪の広がり」への想いをこめた語だが、1545は「湘南高時代の監督、清水先生が課した練習メニューです」。十五秒間トップスピードで走り、四十五秒間シヨグでつなぎ、また十五秒のダッシュ……それを延々と繰り返す「死のインターバル」だ。

◆慶應義塾大学を卒業し、世界最大のコンサルティング企業に就職。二十八歳のときに独立して、大手企業の業務改革を中心としたコンサル事業に携わっていく。その独立直後のこと、「湘南SPREAD1545」は、JFA主催の全国大会で三位という実績をあげた。以後、三年連続で全国大会に出場している。四学年下の、湘南高時代もずばぬけたスキルのプレイヤーだった渋谷龍一（八十二回生）は、砂浜でもその才能を開花させ、日本代表の候補選手にも選ばれた。◆平成二十六（二〇一四）年、ブラジルで開催されたワールドカップを観戦に行った櫻井は、コパカバーナビーチで目を見はる光景に出くわした。「きれいな白い砂浜に常設ゴールが二十面！ 圧倒的なスケールでした」。鵜沼を日本のコパカバーナに、ビーチサッカーの聖地に。そういう大望が生まれた。現在、藤沢市ビーチサッカー協会理事・神奈川県サッカー協会ビーチサッカー担当・日本ビーチサッカー連盟評議員を務め、普及に全力を注ぐ。

選手を多く育てた指導者もいる。

浅沼早苗（四回生）は、東京高等師範卒後、湘南中学に数学教師として赴任。サッカー部部长として現役の指導を務める。昭和二十（一九四五）年、学習院中等部に異動。在任中に上皇（平成天皇）にサッカーを指導したと伝えられる。

山口晴夫（四十五回生）は、藤沢第一中学校の体育教師を皮切りに綾瀬市立綾北中学校、高座郡寒川町立寒川中学校・同旭が丘中学校で教鞭をとり、サッカー部顧問として指導にあたった。綾北中学校時代には神奈川県中学校サッカー大会で優勝、関東大会を経て、全国大会に出場し、準優勝を果たしたチームを率いた。

中嶋修（四十八回生）は、藤沢市立高浜中学校でサッカー部を指導し、昭和五十五（一九八〇）年には神奈川県中学校総体で準優勝。その後、藤沢市立湘南台中学校で九年間、藤沢市立村岡中学校で四年間、指導をつづけた。平成元（一九八九）年、二十三年ぶりの全国高校選手権に出場した及川憲之（六十四回生）など、湘南高校サッカー部へも複数の教え子を送った。

藤塚久雄（五十四回生）は、第五章でふれたとおり筑波大学卒業後、湘南高校に着任し、高校選手権出場のチームを監督として率いた。その後、各地の国体チーム（神奈川県）のコーチとして指導し、平成十三（二〇〇一）年の「新世紀・みやぎ国体」

では監督としてチームをベスト十六に導いた。

多彩なビジネスの世界で

病気で休学し、七年間の湘南中学生を過ごしたが、学校生活はサッカーも含め楽しいことばかりだったと一〇二歳を迎えた当時に語った片山豊(三回生)は、大学卒業後、日産自動車に入社。時はまさに戦時下で、満州自動車に転勤。終戦を迎えて日産に復帰。「日産フェアレディZの生みの親」でもある自動車一筋の人生に敬意が表され、平成十(一九九八)年、米国の「自動車殿堂」入りとなる。

日本有数の規模で展開する地下街「川崎アゼリア」の社長を歴任したのは白根雄偉(十一回生)。昭和二十二(一九四七)年東京大学法学部を卒業後、神奈川県庁に入庁し、総務部長、理事農政部長を経て副知事を二期務めたのち、昭和五十六(一九八二)年に川崎地下街株式会社(現・川崎アゼリア株式会社)社長に就任した。

湘南中学時代、ゴールキーパーとして活躍した池田宗吉(十九回生)は、海軍兵学校第七十五期生として江田島に学び、そこで終戦を迎えた。早稲田大学に進み、卒

業後、白洋貿易(のちの日商岩井)に入社。昭和六十三(一九八八)年、同社代表取締役副社長に就任。経営の第一線を退いた後も、多くの団体の要職を歴任する。

日本サッカー後援会会長として、同会の発展に貢献した松岡巖(二十二回生)は、昭和二十一(一九四六)年の国体で全国制覇を果たしたメンバーの一人。進学した慶應義塾大学では第一回の天皇杯全日本選手権にキャプテンとして出場し優勝。日立製作所入社後も、実業団チームとして強敵田辺製菓を破って優勝。引退後は社業に専念。同社副社長を務めた。

実業界をフィールドとしたOBは数多いが、同期(四十五回生)で、しかも同業界(建設・不動産業界)で活躍した二人がいる。浅倉泰は、東京工業大学工学部卒業後、「都市計画を学んだので街づくりに携わりたく」東急不動産に入社。宅地開発の計画業務の後、人事・システム開発、ビル買収等不動産関連業務を幅広く経験し、株式会社イーウェル社長。山口洋次郎は、東京都立大学経済学部卒業後、東急不動産に入社してみたら、湘南サッカー部同期の浅倉がここでも同期だった。不動産販売からスタートし、総務・人事・財務等のスタッフ業務に携わったのち、株式会社東急ホームズ社長。金子賜は、早稲田大学理工学部卒業後、フジタ工業(現・フジタ)入社。南米大陸に強い会社、というの

が志望動機だったが、「配属されたのは東京都内の地下鉄、高速道路工事の都市土木でした」。以後、国内都市土木、海外工事、営業、本社土木管理を経て、株式会社フジタ代表取締役副社長。

あんなOBこんなOB——②

野村総研副社長にとつての九・一一

OB会のイベントで司会を務めることの多い沢田ミツル（五十回生）もビジネス界で汗をかいてきた一人だ。早稲田大学卒業後、大手エレクトロニクスメーカー富士通に入社し、営業として多忙をきわめていたが、「買っ立場」に立った発想で仕事をしていきたいと思うようになり、三十五歳のときにキャリアアチェンジを図る。野村総合研究所（野村総研）だ。◆さまざまな企業のシステムコンサルティングを担当していくなか、大転換は四十歳過ぎにやってきた。野村総研の上場準備プロジェクトにも参画していき、さらにコンサルティングやソリューションの事業本部の責任者の道を進んでいくことになる。◆忘れることのできない悲劇が起きたのは、二〇〇一年九月十一日だった。沢田はその直前に、四十五歳で執行役員となっていた。イスラム過激派アルカイダにより、アメリカ合衆国に同時多発テロが発生。旅客機の激突で、ニューヨーク市マンハッタン区に建つワールドトレードセ

ンターは炎上、崩壊する。◆一報に接して驚愕する。三千人におよぶと報じられた生死不明者のなかに二人、野村総研の社員もいた。沢田が命じ、同センターの一〇六階で開かれたカンファレンスに参加していたのだ。二十代と三十代、まだ洋々たる将来のある若きスタッフ二人だった。◆三週間、自宅に帰らず情報を収集し、そしてニューヨークに飛ぶ。現場は想像をはるかに超える修羅場だった。測り知れない悲痛と、取り返しのつかない責任で言葉を失くした。魂を抜き取られたようになって帰国する。たまたま会った機会のあった湘南サッカーOBの一人はこう証言する。「あんなに憔悴した男の姿というものをかつてどこにも見たことがなかった」。◆一年間、現地の捜索に何度も訪れる。ご家族がどれほどつらいか、考えるだけで苦しかった。ずっと、心を尽くして寄り添いつつけようと決意した。その癒えることのない傷みを、以後、経営者としてひとときも離さなかった。代表取締役専務を拝命したのが五十七歳のとき。代表取締役副社長を務め、六十二歳で退任した。

初代OB会長は法曹界で

一章から六章までのなかで随所に登場するガンブリチこと岩淵二郎（二回生）とともに、湘南サッカー部の創部に尽力した天野武一（一回生）は、初代OB会長である。そして

日本の法曹界に長くその名を刻んだ。東京帝国大学法学部を卒業し、検事となる。司法大臣秘書官、東京地検特捜部長、地検検事正、高検検事長等を経て、昭和四十六（一九七二）年、最高裁判所判事に。法務・検察のエースとしてその中枢を歩み、戦後の新憲法・新刑事訴訟法などの基本法の制定に尽力しただけでなく、国民から信頼される検察の実現のため改革に努めた。治安の維持と被疑者の人権とのバランスに配慮した優れた識見は法曹界で広く注目された。

その六十余年後の後輩、元榮太一郎（六十九回生）は個性豊かな活動をつづけている。慶応義塾大学法学部卒業後、司法試験合格。平成十三（二〇〇一）年弁護士登録を経て、アンダーソン・毛利法律事務所入所。その後独立開業し、弁護士ドットコム株式会社（弁護士として初の東証マザーズ上場）を設立。ジャパンベンチャーアワード2013ニュービジネスモデル特別賞受賞。テレビ、ラジオ、新聞、雑誌等、多方面にて活躍し、平成二十八（二〇一六）年参議院議員選挙で初当選（千葉県選挙区）を果たす。

政官界でも

政界を見てみると、平成十一（一九九九）年東京都知事に当選、以後四期を務めた石原慎太郎は二十七回生のOBだ。一橋大学在学中の昭和三十一（一九五六）年、小説『太陽の季節』により芥川賞を当時史上最年少で受賞、文壇に旋風を巻き起こした。昭和四十三（一九六八）年参議院議員選挙に立候補、全国区でトップ当選して政界へ。環境庁長官、運輸大臣歴任。昭和六十四（一九八九）年に自民党総裁選にも出馬した。三十四回生の番場定孝は、二十六歳で藤沢市議、以後県議、県議会議長を歴任した。平成十（一九九八）年、岡崎洋神奈川県知事（当時）が「本県財政の窮状を訴える」の緊急アピールを県民に発表。番場議員は岡崎知事を精力的に補佐し、議員手当等議会費だけで約二億三千万円を一年で削減。議員数も減らして行財政改革の成功に貢献した。

OBこんなOB——③

ママチャリで、たったひとりの選挙活動

校舎の建て替えによる「グラウンド難民」の中心世代である西智（七十一回生）は平成二十七（二〇一五）年の藤沢市議会選挙に初出馬し、初当選を果たした。◆湘南高を卒業し、二年浪人。そしてシステムエンジニア系の専門学校へ通つことを選んだ。修了し、二十三

歳でプログラマーとして就職したが、「三年ほど働くうち、きちんと勉強することの必要性を感じて……」東京理科大学工学部第二部経営工学科を受験、合格し入学する。第二部（夜間）だから、昼は仕事して夜に学ぶ。卒業研究で経営工学科賞を受賞し、IT企業のシステムエンジニアとして実績を積んでいた。◆結婚し、三児の父となっていた三十七歳のとき、はたと思った。「システム作りで顧客の役には立ってきたが、人生はそれでいいのだろうか……」。広く世のため人のために仕事をするべきではないか。現実的に世に物申したいテーマがあった。待機児童問題。わが子が被害を受けていた。陳情という手があるが、歯がゆい。よし、市長は無理でも議員になろう。決断してしまう。妻を数日間かけて説き伏せたが、妻の両親は大反対を示す。三人の小さな子の父でありながらなんたることか。やるなら娘と縁を切ってからにせよ。どうにか、そうはならず説得しきった。◆選挙運動を手伝ってくれたのは湘南高の仲間の数人のみ。基本的に「たった一人の選挙活動」が始まった。藤沢駅前に立つて街頭演説のまねごとをするが、だれも立ち止まらない。そもそも喋るのが大の苦手だったのだ。戦術転換を図る。自転車（ママチャリ）に乗って、市内の公園をまわる、ひとりひとり戦略だ。櫛には「子育て世代応援宣言」と大書してある。これが効果あった。待機児童受難の人びとには響いた。◆仲間とつくったサッカーチーム

の主将を務めていた。選挙直前の日曜日は告示の日、その日は試合があり、主将としては休めないから試合会場へ向かいながら、ジャージの上に櫛をかけた姿で選挙活動を敢行する。◆結果は、得票数三〇五三票。上から数えて十七位の当選。四年後の選挙にも立候補し、安定して再選を果たした。

実業界同様、政官界を活躍フィールドとしたOBは数多いが、ここでも同期（三十九回生）からの三人を紹介する。小泉親昂は、神奈川県庁勤務を経て、昭和四十八（一九七三）年鎌倉市議会議員に立候補し当選。五期の途中で辞職し、平成三（一九九二）年、神奈川県議会議員に当選。県の仕事を四期務めた。飯田志農夫は、昭和四十三（一九六四）年に自治省入省、昭和六十一（一九八六）年より滋賀県教育長、平成三（一九九二）年より大分県副知事、平成六（一九九四）年より自治省消防大学校長を歴任した。岡本行夫は、昭和四十三（一九六八）年に外務省入省。四十五歳で退官後はコンサルタント会社を経営しながら、外交評論家として広く活動。橋本内閣、小泉内閣と二度にわたり首相補佐官をも務め、湾岸戦争、基地移転問題、イラク戦争と、日米外交の難しい時代、その関係修復に奔走した。

少し下って、平成七（一九九五）年に神奈川県議に初当選（以降、連続三期）を果たしたのは水戸将史（五十六回生）。平成十九（二〇〇七）年、民主党より参議院選挙に出馬し、当選。平成二十六（二〇一四）年、衆議院議員に当選。平成三十（二〇一八）年、一般社団法人「人づくり・国創り研究会」を設立。政党に属さず無所属で活動を展開している。

学者も幅広く

あんなOBこんなOB——⑤

ドイツのノーベル財団・フンボルト賞

有機合成化学の研究者である鈴木啓介（四十八回生）は、平成三十（二〇一八）年十二月、日本学士院会員に選ばれた。名実ともにわが国を代表する科学者が生まれるまでの道のりをたどってみよう。◆東京大学に進学したが、時は荒れに荒れた学園紛争の末期だった。自分の歩くべき道が見えず、心底とまどった。その夏の屋久島旅行でダイビングの手ほどきを受け、以後、どんどん南下し、島民三十人ほどの沖縄の離島に長期滞在する日々となっ

たのは、かつての流行の言葉でいえば「自分さがし」だった。◆南の海に洗われてリフレッシュしたかのように、やがて鈴木は有機合成化学の研究に深く踏みこんでいく。世界をミクロのミクロまで分解し、再構成し、人類を救ってきた薬品の数々を始め、衣食住のすべてに関わるものを生み出してきた分野。そのときめきに没頭した。◆幸運は得がたい恩師と巡りあったことだ。日本の有機合成化学の父とも呼ばれ、二〇一八年に他界した東大名誉教授・向山光昭（むかいやまてるあき）氏である。有機合成の基礎研究開発に大きな貢献を果たし、ノーベル賞候補にも挙げられた向山教授が指導する研究室は、当然のことながら学生たちに高い人気が集まっていた。鈴木が幸運だったのは向山教授が無類の「サッカー好き」だったことである。ここで、高校時代ウイングの選手として活躍した鈴木が「実績」はものを言った。向山研究室の狭き門をくぐることはできたのは、まさに「芸（サッカー）は身を助く」だったのだ。恩師のモットーがあった。一〇〇のトライで、実らないのは九十九だ。人のまねをするな。はやりを追うな。実践先行。◆博士課程を修了し、慶応義塾大学の助手を経て、専任講師、助教授と十三年を過ごした。慶大工学部が理工学部で改組されて間もなくのことだった。新しい息吹のなかで、学生たちといっしょに新しい価値を生む努力は新鮮だった。三十六歳のとき、博士研究員（ポスドク）としてスイス連邦共和国連邦工科大学（ETH）に留学。多くの研鑽を積んで帰国後、慶大理工学部教授を経て、東京工業大学理学部教授に就任。六十歳で同大学副学長に就任する。◆研究者生活のなかで数々の受賞歴があるが、ひとつだけ紹介するとすればフンボルト賞だ。ドイツ政府が全



額出資する国際的学術活動の支援機関であり、「ドイツのノーベル財団」ともいわれるアレクサンダー・フォン・フンボルト財団が創設した学術賞。各分野において国際的に活躍する研究者に授与されるこの賞が、二〇〇八年、日本の鈴木啓介に授与された。◆さらに二〇二〇年八月、最新の受賞決定のニュースが報じられた。科学技術の発展に役立つ高い業績を上げた研究者を顕彰する「第六十一回藤原賞」。贈呈式は八月二十七日、学士会館で行われた。

さまざまな分野で多くの学者たちが活躍しているが、実業界の四十五回生、政官界の三十九回生のように、「同期が生んだ三人」を取り上げよう。四十六回生だ。岸本喜久雄は、東京工業大学工学部で学んだ後、昭和五十二（一九七七）年に同大学の助手となり、平成三十（二〇一八）年に教授職として定年を迎えた。この間、ケンブリッジ大学客員研究員、副学長、工学部長、環境・社会理工学院長などを歴任。材料力学や計算力学を専門とし、材料や構造物の強度や信頼性に関する研究を行った。日本学術会議会員、日本機械学会会長や日本工学会会長などに就任し、学会の発展にも広く貢献した。榊原和久は、物理化学の研究手法を有機化学の分野に応用し、機能性物質の開発・合成に取り組んできた。横浜国立大学名誉教授。相馬保

夫は文系で、専門はドイツ近現代史。東京外国語大学名誉教授。『労働者文化と労働運動——ヨーロッパの歴史的経験』（共著）など多くの編著書がある。

海と船の学者もいる。庄司邦昭（四十一回生）。東京大学大学院工学系研究科船舶工学専門課程修了、東京海洋大学教授。退官後、六年間にわたり国土交通省の運輸安全委員会の委員として事故調査と原因究明の仕事に関わり、現在も事故調査の研究執筆をつづける。『ジョージ先生の船の博物館めぐり』などユニークな著書で人気があり、テレビ出演も多い。

表現者として

画業、文筆、工芸、芸能などなど、表現の分野ではどうか。筆頭は、水のある景色、清冽な画面づくりで昭和の画壇に存在感を示した石川滋彦（二回生）。東京美術学校西洋画科に進学し、在学中に帝展入選。その後も文展、光風会展などで作品を発表。戦中は海軍報道班員として南方に赴く。戦後、日本の貨物船に乗っての世界一周旅行をはじめ、たびたび海外へ赴く。海や船を愛し、アムステルダム、ヴェネチア

等水辺の風景を好んで描いた。広く絵画の普及にも尽くし、NHKの絵画教室では懇切丁寧な指導が評判を呼んだ。ベストセラーに『日曜画家の油絵入門』がある。

一九三一（昭和六）年東京高師主催全国大会に出場した松本節（八回）は、美術部にも兼部し、十八歳時に帝展初入賞。その後も絵画をつづけるが、海軍医として一九四四（昭和十九）年に戦死。夭逝の画家の作品は平塚市美術館などに収蔵されている。

文筆では、第四十回毎日児童小説賞、第十二回織田作之助賞を受賞した植松二郎（四十一回生）や、異彩を放つ著述家・細川周平（四十八回生）がいる。

あんなOBこんなOB——⑤

ブラジルの移民と芸能をテーマに読売文学賞

ブラジルを自らの研究の舞台として数年間滞在し、通いつめ、書きためたものが分厚い一冊となって刊行されたのは、平成二十（二〇〇八）年だった。書名は『遠きにありてつくるもの』（みすず書房）。サブタイトルの「日系ブラジル人の思い・ことば・芸能」が示すように、日本人移民の心と情と芸能がテーマである。緻密な調査と深い思索が高く評価さ

れ、第六十回読売文学賞（研究部門）を受賞した。令和二（二〇二〇）年には英訳もでた。

◆著者細川周平（四十八回生）が湘南高を卒業後に進学したのは東京大学理学部生物学科だった。だが同学部を卒業し、次に向かったのは東京芸術大学大学院音楽研究科。「自分は理系ではない、とつすつす思い始めていたところに……」理学部四年生のとき、交換留学制度により食物研究所の研修生として二ヶ月間パリに留学した。「昼間の研修は退屈でしたが、アフターファイブは街に出て……」芝居を見、ミュージカルを堪能し、コンサートを訪れ、たくさん洋書を買った。◆結果的にこの二ヶ月が「文転」をそのかしたことになる。帰国後すぐに舵を切った。高校時代、熱心にサッカー部の練習に励んだが、同時にジャズピアノに熱中し、同好の友人数人と組んで文化祭に出演もしたという下地があったとはいえ、音楽学者というまさに大転換の道へ。大学院修了後、音楽学部の助手を三年間過ごす。資料を渉猟し、考え、調べを重ねる、という方法で音楽学と向き合う日々だ。◆ある正月、藤沢に帰ってきたとき旧友にばったり会い、彼が管理人を務めるアパートに日系ブラジル人家族が住むと知る。湘南高校の近くのアパートだ。その家族と会い、親しくなるうち研究者ところが刺激されていく。これが以後、何年にも及ぶ「ブラジル移民考」のきっかけである。某財団の奨学金に「日系ブラジル人のカラオケ」をテーマに応募し、合格する。ちょうど音楽学部助手の期間が終え、フリーランスの立場となっていた。胸をときめかせて一年間のブラジル滞在だ。取材と調査、ときおりサッカー観戦。大きな収穫を得て、精力的に書き、帰国後も、いくたびも通う。◆実はブラジルと



は一九七〇年ワールドカップ・メキシコ大会で出会っていた。優勝したブラジル・チームは、ペレが大活躍したことで今では神話になっているが、細川はそのチームに圧倒されてしまったのだ。大会はテレビ番組「ダイヤモンド・サッカー」で放送された。今と違って、海外の試合はその番組でしか見ることができない。試合結果は分かっているけど、サッカー部の練習の後には、仲間たちといつもその話題で盛り上がっていたものだ。◆東京工業大学の助教を経て、平成十六（二〇〇四）年、京都にある大学共同利用機関・国際日本文化研究センターの研究者（教授）として迎えられた。『近代日本の音楽百年（全四巻）』で令和二年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

岩手県東北部岩泉町の鍾乳洞「龍泉洞」のほど近くの登り窯で、仙人のような陶芸活動をつづけているのは分田真（四十四回生）だ。横浜国立大学工学部応用化学科卒業後、佐賀県窯業試験場、有田窯業大学校で研修を受ける。有田や唐津で名人たちに師事し、平成二（一九九〇）年、岩手県岩泉町に「亜久亜工房 森水窯」を築造する。煉瓦七千枚、手造りで築いた窯だ。原料は、近傍から掘り出した粘土が主体。土の持つ存在感を表現すべく、日夜、里に籠り煙を出す。

肉体を表現の素材とする芸人・山田仁夫もいる。

あんなOBこんなOB——⑥

異才のショーマン、体躯が表現の素材

バブルと呼ばれた日本経済の一現象が衰えを見せ、やがて崩れていく過程の平成六（一九九四）年、まったく斬新なエンターテインメント空間が、東京の夜の繁華街に誕生した。六本木金魚。バブでありながら、音楽と舞踏と演劇の緊密な演出によるショーが繰り広げられる。シアターレストランという業態の先駆けとして定着しているこの店の創生期、ショーの企画構成から演出、振付にいたるまでを一手に担ったいわば産みの男は、ロッキーという名の芸人だった。破天荒でありながら繊細なショーマンぶりは根強いファンをもっていた。◆ロッキーの本名は山田仁夫（四十回生）。類まれな運動センスとフィジカルの強さで、一年生からレギュラーとしてバックスに起用された。湘南高が県代表として国体に出場したメンバーとなる。卒業後、東京教育大（現筑波大）体育科に進学し、サッカーをつづける。四年生のとき、東京教育大は十六年ぶりの大学選手権制覇を達成したのだが、そのシーズンの得点王が山田仁夫だった。ディフェンスの選手がオーバーラップしてシュートを突き刺すのは、いまでこそ珍しいことではないが、当時ではまったくの型破りだった。◆留年して大学に残る。取り残していた必須科目の「創作ダンス」の授業を受けた。その女性講師が山田のふしぎな発信力に着目した。「あなた、こんどの公演を手伝っ

てくれない?」。レッスンが始まる。「からだというのは踊りにとってこんなに不自由なものであるのか」そう痛感した。◆昭和五十二（一九七七）年、ショーパブの草分けとしていまも語り継がれる「六本木シュガーボーイ」をはじめ、数々の店でショーの構成・演出・役者をこなす中心人物として立ち上げていった。ショーパブが日本に本格的に生まれ、成熟していく過程でひとつの達成点としてあるのが、冒頭の六本木金魚ということになる。◆現在あたためているのは野外のショーだ。雨が降れば雨に濡れ、雪が積もれば雪に埋もれ、満月が出れば満月に化身し、そのなかで肉体がどんな表現を伝えられるかを試していく。

スポーツドクターたち

医師の道に進んだOBも数多いが、ここではスポーツドクター（とりわけサッカーがらみ）を記す。

東大サッカー部で主将を務めた黒沢秀樹（四十一回生）は、北海道で医師の活動を開始する。東大を卒業し、一時企業に籍を置くが辞して、北海道大学医学部に入学。人工関節などの研究で医学博士号を得る。整形外科医として札幌の病院勤務。コンサドーレ札幌のチームドクターも兼ねる。のちに外務省医務官兼参事官として、

アフリカ、メキシコ、ウズベキスタンで海外生活を過ごした。

昭和四十一（一九六六）年の全国高校選手権に出場したメンバーである加納正道（四十三回生）は、進学した東北大学医学部でもサッカー部の主将に。卒業後は東北大学病院をはじめ、多くの公立病院勤務を経て、実家である加納外科医院院長。日本体育協会公認スポーツドクターとして、Jリーグ・ドーピングドクターを務め、モンテディオ山形チームドクターやU17日本代表アメリカ遠征帯同ドクターなども歴任した。

香川大医学部卒、スポーツ整形外科医の鈴木英一（五十五回生）は、Jリーグ、なでしこなどのプロチームのドクター。ローマ大学に留学し、イタリア・セリエAのASローマでの研修を重ねて、湘南ベルマーレ、ノジマステラ相模原のチームドクターを務める。平成二十四（二〇一二）年、ロンドン五輪でベスト4を勝ち取ったチームでのドクターを経験している。

あんなOBこんなOB——⑦

Jリーガーから厚い信頼の整形外科医

母方の祖父が外科医だった。母の姉妹に医学を継ぐ者なく、祖父の期待が孫の自分に強くかかっていることを大沼寧（五十九回生）は感じ取っていた。医学の道を決断したのは高校三年の後半になってからだ。◆夏の関東大会に出場し、無念にも一回戦で帝京高校に大敗したが、同大会の二十人の優秀選手に湘南高校からただ一人選出されたのをはじめ、全国選手権県予選準決勝で敗れて引退する十一月まで、湘南サッカーの主力選手をつづけていた。一年浪人し、山形大学医学部に入学。だれよりも喜んでくれた祖父は、大沼が国家試験を受けたのを見届けるように他界した。◆整形外科を選択したのは、自身のサッカーによるケガが背景にあった。中学で痛めた腰に高校でも悩まされ、大学では靱帯を切つて手術した。はつきり視野に入っていたのは「スポーツドクター」だった。その道の傑人の存在を知る。一九六四年の東京オリンピック時に代々木の選手村の診療所で救護医療に関わり、以後日本オリンピック選手団のチームドクターとして長く携わってきた高澤晴夫氏だ。大沼はその門をたたき、薫陶を受けた。◆が、つづく医局（大学附属病院の人事組織）では、延々と助手暮らしとなる。どの世界でもそうだが、がんじがらめの組織から身抜け出すのは、大きな覚悟がいる。それを決断したのは三十六歳のとき。ドイツ・ベルリンの有名な克蘭ケンハウス（病院）が留学生を公募していることを知り、応募し、採用となる。妻とまだ小さい子ども二人とともに、何のつても知人もいない地に移り住んだ。ブンデスリーガに所属するサッカーチーム「バイエル・レバークーゼン」の本拠地都市の

一流スポーツクリニックに乗り込み、スポーツ整形の修業を申し出る。◆豊富な収穫を身に着けてドイツから帰国し、腕一本を頼りの就職活動に入り、落ち着いた地が、第二の故郷ともいえる山形だった。現在（二〇二〇年）は、山形徳洲会病院副院長。二〇〇五年からモンテディオ山形のチームドクターを務めている。

県サッカー協会、OB会

ふたたびサッカー関係について。神奈川県サッカー協会の仕事に関わってきたOBにふれよう。

東京大学で日本選手権大会優勝、日本鋼管入社後も関東実業団リーグ優勝二回などの実績を残した早川純生（十八回生）は、昭和二十八（一九五三）年から日本協会一級審判員、同三十三（一九五八）年から九年間、国際審判員として活躍後、県サッカー協会審判委員長、昭和四十九（一九七四）年から県サッカー協会理事長として県のサッカー普及発展に貢献した。

東京外語大（サッカー部）在学中、「日本サッカー育ての親」クラマー氏が指導したFIFAコーチングスクールのアシストをした経験のある相羽克治（四十一回生）は、

平成四（一九九二年）、県サッカー協会事務局長に。Jリーグ設立、二〇〇二年日韓W杯にあたっても理事として活動した。

東京大学卒業後、テレビ神奈川に入社、音楽番組「SAKUSAKU」、映画「幼獣マメシバ」「猫侍」などのプロデュースで活躍し、同社取締役、関連会社社長を務めた関佳史（四十八回生）は、令和元（二〇一九）年、神奈川県サッカー協会副会長に就任した。

相羽克治と関佳史は、湘南サッカー部OB会活動においても中心になって運営に関わっている。ここで締めくくりとして、そのOB会の創設に尽力した安保隆文（十五回生）と、発展の基礎を築いた山口晴夫（四十五回生）について記そう。

山口晴夫は実務の中心者だった。会報の発行、総会の実施はもとより、蹴球祭などの催事において計画の打合せに始まり、当日の運営には最後の後片付けを完璧に終わらせるという「雑用」を黙々とこなした。五十二歳の若さで急逝するまで二十余年にわたった、そうした地道な営みがOB会の組織をしっかりと固めていったことはまちがいない。湘南サッカーのレジェンド岩渕二郎が誕生させたOB会という嬰兒を、たっぷり時間をかけて養育したのが山口晴夫といって過言ではない。

安保隆文は、創設に尽力した中心者だった。千葉医大で全国有数の名FWとして活躍。昭和四十三（一九六八）年、鎌倉市サッカー協会を発足させ、初代会長として鎌倉市サッカー界の発展と県サッカー層の拡大に大きく寄与した。湘南サッカー部OB会、初代事務局長。岩渕二郎の逝去後の偲ぶ会開催、追悼記念誌発行にも精根を傾けた。記念誌に寄せた安保隆文の、万感あふれる短文がある。

「昭和五十二年五月、母校グラウンドで多数の後輩が集まり、ボールを蹴り、江ノ島洗心亭にてコンパ。岩渕さんは歌い、踊りました。『月夜の晩に、雀が二匹、お寺の屋根で……』と。お元気でした」

OB会はOBたちの寄稿などによる記念誌を、過去四回発行してきた。列举する。昭和五十六（一九八一）年『湘南サッカー半世紀を越えて——岩渕二郎追悼記念』／平成元（一九八九）年『湘南サッカー実戦譜特集鈴木中先生の二十八年間』／平成十三（二〇〇一）年『創部八十周年——会報のスペシャル版および会員名簿』／平成二十二（二〇一〇）年『創部九十周年』。



西暦	元号	卒回	湘南サッカー部年表（学校含む）戦績○数字は通算出場回数	世相…サッカー界（スポーツ界含む）湘南OB（サッカー部中心）
1940	15	16	8月 第22回中学選手権（兵庫）③一回戦	9月 日独伊三国軍事同盟条約調印
1939	14	15	10月 神宮大会④ 12月 関東大会⑤準優勝	9月 ドイツ、ポーランドへ進撃開始（第2次世界大戦始まる）
1938	13	14	4月 浅沼早苗先生着任（1945年10月）	4月 国家総動員法公布
1937	12	13	10月 神宮大会② 12月 関東大会④	7月 第3回W杯（開催フランス・優勝イタリア）
1936	11	12	春のトーナメント優勝	7月 盧溝橋で日中両軍衝突（日中戦争始まる）
			10月 神宮大会① 12月 関東大会②	
			8月 第19回中学選手権（兵庫）①一回戦	
			10月 神宮大会② 12月 関東大会③	
1935	10	11	4月 藤田得利（6回）監督（1939年）	8月 ベルリン五輪。サッカーで日本が優勝候補スウェーデンに3-2で勝利（ベルリンの奇跡）
1934	9	10	12月 関東大会初出場	2月 皇道派青年将校クーデターを執行（2,26事件）
1933	8	9	2月 校歌発表 作詞 北原白秋 作曲 山田耕作	8月 中学選手権 夏の開催に移行
1932	7	8	秋のリーグ戦優勝 秋、運動場拡張工事（南西側）	5月 第2回W杯（開催イタリア・優勝イタリア）
1931	6	7	5月 県大会準優勝	3月 野球統制令が発令される
			9月 東京文理大会準優勝	5月 海軍青年将校ら、犬飼首相射殺（5,15事件）
			春リーグ戦初優勝	10月 世界恐慌始まる
1930	5	6	3月 香川幹一先生着任（1948年2月）	5月 日本協会FIFA加盟 神奈川県ア式蹴球連盟創設
1929	4	5	天野が東大から若林・野沢をコーチに招く	10月 第9回極東選手権大会（東京）日本が初優勝（○7-2フィリピン、△3-3中華民国）
1928	3	4		7月 第1回サッカーW杯ウルグアイで開催
1927	2	3		
1926	昭和元	2	4月 5か年強化計画開始	12月 大正天皇崩御 昭和へと改元
1925	大正14	1	3月 後藤基胤先生着任（1925年6月）	5月 衆議院議員選挙法改正公布（男子普通選挙実現）
1924	大正13		全校チーム結成 公式戦初参加0-9で二中に敗戦	3月 ラジオ放送開始
1923	大正12		秋 ゴールポスト立つ	9月 関東大震災
1922	大正11		4月 岩渕二郎入学	12月 ソビエト連邦成立
1921	大正10		蹴球部創部	1月 第1回全国高等学校ア式蹴球大会（現…旧制インターハイ）（1948）開催
1920			3月 赤木愛太郎 初代校長着任	9月 関東大震災
			4月 湘南中学 創立	11月 第1回ア式蹴球全国優勝競技大会（現…天皇杯）開催
			天野武一入学	
			蹴球部創部	

西暦	元号	卒回	湘南サッカー部年表（学校含む）戦績○数字は通算出場回数	世相…サッカー界（スポーツ界含む）湘南OB（サッカー部中心）
1961	36	37	10月 第16回国体③（秋田）1回戦	6月 クラマー2度目の来日 全日本が善行で合宿
1960	35	36	5月 鈴木中先生着任（1989年3月）	10月 日本蹴球協会がデッドマール・クラマーを招聘
1959	34	35	7月 関東大会⑪（水戸）準優勝	5月 古河電工、実業団で初の天皇杯制覇
1958	33	34	2月 湘南高校火災でほぼ全焼	6月 第6回W杯（開催スウェーデン・優勝ブラジル）
1957	32	33	10月 浦和高校戦始まる	7月 関東大会再編 新生第1回
1956	31	32	関東大会⑩	11月 小林忠生（24回）湘南OBで初の五輪（メルボルン）出場
1955	30	31	10月 第10回国体 神奈川で開催 湘南サッカー会場	
1954	29	30	7月 第6回東日本大会1回戦	
1953	28	29	12月 宮原孝雄先生着任（1961年4月）	6月 第5回W杯（開催国スイス・優勝西ドイツ）
1952	27	28	7月？第3回東日本大会3回戦	7月 陸海空軍の自衛隊発足
1951	26	27	4月 柳川明信（27回）監督	3月 第1回アジア大会
1950	25	26	4月 岩渕二郎先生定時制に着任（1977年5月）	9月 サンフランシスコ平和条約締結
1949	24	25	10月 関東大会⑦ 早川純生（18回）監督	2月 NHKが、東京地区でテレビの本放送開始
1948	23	24	10月 関東大会⑧	8月 学生選抜ドルトムント遠征 湘南OB3名参加
1947	22	23	11月 赤木校長依願退職	3月 大埜正雄（15回）湘南OBで初のW杯（スイス）予選出場
	21	22	11月 第3回国体②（福岡）準優勝	2月 第5回W杯（開催国スイス・優勝西ドイツ）
	20	21	8月 硬式野球部夏の甲子園で優勝	6月 第4回W杯（開催ブラジル・優勝ウルグアイ）
	19	20	11月 第1回国体（中学）①（兵庫）優勝	9月 日本FIFAに再加盟
	18	19	大埜正雄（15回）監督	2月 田村恵（19回）湘南OBで初の日本代表
	17	18	4月 新制湘南高校誕生	
	16	17	8月 榑原神宮体育大会出場（全国3位）	11月 国体が高校の部となる
			秋ころから部活動再開	11月 湯川秀樹にノーベル物理学賞決定（日本人初）
			10月 神宮大会⑤ 12月 関東大会⑥初優勝	6月 朝鮮戦争始まる
			4月 報国農場土地拡張 12月 関東⑦連覇優勝	11月 湯川秀樹にノーベル物理学賞決定（日本人初）
				8月 第2次世界大戦終わる
				4月 プロ野球最開
				11月 日本国憲法公布
				11月 第1回国体 中学の部
				5月 日本国憲法施行
				12月 高校選手権冬開催に移行

西暦	元号	卒回	湘南サッカー部 年表 (学校含む) 戦績○数字は通算出場回数	世相…サッカー界 (スポーツ界含む) 湘南OB (サッカー部中心)
1981	56	57	1月 OB会発足	5月 日本オリンピック委員会がモスクワ五輪不参加を決定
1982	57	58	4月 鎌倉・藤沢学区の小学区に変更	7月 英チャールズ皇太子とダイアナが結婚
1983	58	59	6月 関東大会⑦(東京)1回戦 大沼寧(59回)、関東大会優秀選手	4月 東京デイズニールランド、浦安にオープン
1984	59	60	11月 選手権県予選準優勝 4月 藤塚久雄先生着任(1996年3月)	7月 ロス五輪開幕、米のカール・ルイスが陸上で四冠獲得
1985	60	61	10月 国体選抜に水谷隆一郎(61回)選出 神奈川県が初優勝	8月 日航機が御巣鷹山に墜落
1986	61	62		5月 第13回W杯(開催メキシコ・優勝アルゼンチン)
1987	62	63		4月 国鉄が分割・民営化され、Jリーグが発足
1988	63	64	6月 関東大会⑧(栃木)1回戦	
1989	平成元	65	10月 国体選抜に田村直也・若木均(64回)選出 1月 第67回高校選手権(首都圏)⑥ベスト16	1月 昭和天皇崩御、「平成」へ
1990	2	66		5月 中国で天安門事件
1991	3	67		6月 第14回W杯(開催イタリア・優勝西ドイツ)
1992	4	68	4月 校舎改築工事開始	10月 東西両ドイツ、国家統一
1993	5	69	5月 関東県予選 ベスト4	2月 バブル経済崩壊
1994	6	70	10月 国体選抜に石渡弥(69回)選出	12月 ソ連最高会議、ソ連消滅を宣言
1995	7	71	5月 関東県予選ベスト4	
1996	8	72	3月 校舎改築工事完了 3月 藤塚久雄先生離任 鈴木中先生暫定監督	3月 オウム真理教事件
1997	9	73	4月 清水好郎先生着任(2008年3月)	1月 阪神淡路大震災
1998	10	74	5月 関東県予選ベスト4	6月 第15回W杯(開催米国・優勝ブラジル)
				10月 日本が広島アジアカップで初優勝
				5月 Jリーグ開始
				6月 皇太子徳仁親王、小和田雅子さんと結婚の儀
				6月 アメリカW杯予選、日本がイラク戦ロスタイムの失点により得点差で敗退(ドーハの悲劇)
				7月 アトランタ五輪。28年ぶり出場の日本が優勝候補ブラジルに1-0で勝利(マイアミの奇跡)
				11月 フランスW杯アジア第3代表決定戦でイラン代表に勝利(ジョホールバルの歓喜)
				6月 第16回W杯(開催フランス・優勝フランス)W杯初出場の日本は3連敗でグループリーグ敗退。
				9月 中田英寿がイタリア・セリエAでデビュー
				9月 シドニー五輪開催
				9月 米国で9・11同時多発テロ
				5月 第17回W杯(開催日韓・優勝ブラジル)日本が初のベスト16入り
				12月 テレビ地上デジタル放送開始
2000	11	75	5月 関東県予選ベスト4	
2001	12	76		
2002	13	77	中学校の評価が相対評価から絶対評価に	
2003	14	78	3月 スペイン遠征中止(イラク戦争のため) 高校入試制度変更、前期入試導入 浦高戦廃止	

大会名の表記					西暦	元号	卒回	湘南サッカー部 年表 (学校含む) 戦績○数字は通算出場回数	世相…サッカー界 (スポーツ界含む) 湘南OB (サッカー部中心)
正式名称	略称	開始年	開催時期						
全国中等学校蹴球選手権大会	中学選手権	1918年開始	冬 8月開催		2004	16	80	3月 スペイン遠征①	4月 高校世代のリーグ戦開始
全国高校サッカー選手権大会	高校選手権	1948年	12月、1月開催		2005	17	81	全県学区に変更	8月 アテネ五輪開幕、日本メダル数史上最多
明治神宮競技大会	神宮大会	1924年～1943年	11月		2006	18	82	3月 スペイン遠征②	10月 新潟中越地震
国民体育大会サッカー競技高等学校の部	国体	1946年開始	秋開催		2007	19	83	5月 関東県予選ベスト8	6月 第18回W杯(開催ドイツ・優勝イタリア)日本は1分2敗でグループリーグ敗退
※第一回国民体育大会サッカー競技中等学校の部	国体	1946年11月	2回以降は高校		2008	20	84	3月 スペイン遠征③	10月 国体少年の部 U16に移行
全国高等学校総合体育大会サッカー競技	総体	1966年開始	8月開催		2009	21	85	4月 小林周太郎先生着任(2014年3月)	9月 米証券4位のリーマン・ブラザーズが経営破綻(リーマン・ショック)
関東府県対抗中等学校選手権大会	関東大会	1933年開始	12月開催		2010	22	86	3月 スペイン遠征④	9月 民主党政権誕生
関東高等学校サッカー大会	関東大会	1958年開始	6月、7月開催		2011	23	87	3月 スペイン遠征⑤	6月 第19回W杯(開催南アフリカ共和国・優勝スペイン)根岸英一(28回・合唱部)ノーベル賞受賞
					2012	24	88	3月 スペイン遠征⑥	3月 東日本大震災。東京電力福島第1原発爆発
					2013	25	89	3月 スペイン遠征⑦	6月 ドイツ女子W杯。日本(なでしこジャパン)が初優勝
					2014	26	90	4月 竹谷睦先生着任	7月 ロンドン五輪。サッカー男子は4位、女子が銀メダル
					2015	27	91	10月 選手権県予選ベスト8	9月 2020年五輪は東京開催に決定
					2016	28	92	3月 スペイン遠征	6月 第20回W杯(開催ブラジル・優勝ドイツ)日本は1分2敗でグループリーグ敗退
					2017	29	93	4月 高谷哲二先生着任	12月 鈴木啓介(48回)学士院賞受賞(化学)
					2018	30	94	5月 関東県予選ベスト8	
					2019	令和1	95	3月 スペイン遠征⑧	11月 トランプ、米大統領選挙で民主党のヒラリー・クリントンを破り勝利
					2020	2	96	3月 スペイン遠征中止(新型コロナウイルスのため)	6月 第21回W杯(開催ロシア・優勝フランス)日本が3度目のベスト16入り
※平成以降は 県大会ベスト8以上を記載									4月 新元号を「令和」と公表 明仁天皇退位
									4月 新型コロナ、世界中でパンデミックに
									4月 関東大会・高校総体中止決定

湘南サッカー部【戦績】 大正14年から令和2年までの記録

1925 (大正14) 年

部長、金持先生、全校チーム編成さる

●第1回県下中学校蹴球大会 (於横浜三中)
(12月下旬)

一回戦 県立二中 9-0 湘南中

1926 (大正15) 年

●冬季リーグ戦 (第1回) 10月開始

湘南 不戦勝 神工

湘南 2-0 鎌倉

湘南 不戦勝 関東学院

湘南 6-0 浅野中

湘南 2-1 三中

湘南 0-1 師範

湘南 0-1 二中

順位 1位 2位 湘南

●高師主催全国中等学校蹴球大会
(9月下旬) 初出場

一回戦 湘南 5-0 立正中

二回戦 湘南 1-3 成城中

1927 (昭和2) 年

●高師主催全国中学大会

一回戦 湘南 2-0 藤岡中 (群馬)
二回戦 湘南 0-2 高師附中 (優勝校)

●県リーグ戦 (第2回)

湘南 0-4 師範

湘南 4-2 関東学院

湘南 1-3 三中

順位 1位 湘南 5-0 神工
3位 湘南 0-6 二中
5位 湘南 3-0 浅野
7位 湘南 4-0 鎌倉
関東学院 8位 神工

1928 (昭和3) 年

●高師主催全国中学大会

一回戦 湘南 2-1 浦和

二回戦 湘南 6-1 札幌一中

三回戦 湘南 0-5 高師附中

●県リーグ戦 (2部制となる)

湘南 0-1 師範

湘南 6-1 関東学院

グループ2位に止まる 鎌倉

1930 (昭和5) 年

●県蹴球連盟県下中学校大会

一回戦 湘南 7-1 関東学院

準決勝 湘南 3-1 二中

決勝 湘南 3-1 師範

●全国大会 (文理大主催)

一回戦 湘南 不戦勝 水戸中

二回戦 湘南 4-0 今市中

三回戦 湘南 15-0 府立園芸

四回戦 湘南 5-0 横浜二中

準決勝 湘南 4-2 府立五中

決勝 湘南 1-3 附中

●県リーグ戦

湘南 10-5 関東学院

湘南 3-2 三中

湘南 10-0 神工

湘南 3-1 二中

●中学選手権関東予選

二回戦 湘南 7-0 二中

準決勝 湘南 2-2 青山師範

●横浜高師主催近県中学校大会

一回戦 湘南 10-0 東亜商業

二回戦 湘南 4-1 府立園芸

湘南 3-1 二中

1931 (昭和6) 年

●県春季大会

湘南 5-0 師範

湘南 4-1 二中

●東京大会

準決勝 湘南 0-1 関東学院

決勝 湘南 1-0 浜松一中

再 湘南 0-0 志太中

湘南 0-1 志太中

1932 (昭和7) 年

●県春季大会

一回戦 湘南 6-2 浅野

二回戦 湘南 3-1 二中

●東京大会

決勝 湘南 1-4 師範

一回戦 湘南 9-0 埼玉商

1939 (昭和14) 年

●山神静子選 (中学選手権)

一回戦 湘南 4-1 浜松

二回戦 湘南 3-2 蕨崎中

三回戦 湘南 3-0 二中

●第21回全国中等学校蹴球選手権大会

一回戦 湘南 5-0 高松中

二回戦 湘南 4-2 青山師範

準決勝 湘南 2-2 聖峰中

(抽選負け)

●第10回明治神宮国民体育大会

一回戦 湘南 6-0 高松商

二回戦 湘南 5-2 聖峰中

準決勝 湘南 2-3 明星商業

●第7回関東府県対抗中等学校蹴球選手権大会

一回戦 湘南 2-0 水戸商

準決勝 湘南 1-0 浦和

決勝 湘南 0-1 豊島師範

1940 (昭和15) 年

●春季県大会

決勝 湘南 5-0 小田原中

●山神静子選 (中学選手権予選)

一回戦 湘南 5-0 甲府中

二回戦 湘南 3-1 志太中

準決勝 湘南 4-0 甲府商

決勝 湘南 2-0 蕨崎中

●第22回全国中等学校選手権大会

一回戦 湘南 1-8 普成中

●第11回明治神宮国民体育大会

二回戦 湘南 1-0 仙台中

準決勝 湘南 1-3 明星商業

1933 (昭和8) 年

●県リーグ戦

湘南 9-0 三中

湘南 3-0 小田原

湘南 3-4 関東

(グループ2位)

三位決定戦 湘南 3-0 二中

1935 (昭和10) 年

●第2回関東府県対抗中学校蹴球選手権大会

一回戦 湘南 0-2 府中五中

●県リーグ戦

湘南 7-0 三中

湘南 4-1 小田原

湘南 1-0 師範

湘南 1-1 関東学院

1936 (昭和11) 年

部長 香川幹一

●春季県下トーナメント

一回戦 湘南 7-0 川崎中

二回戦 湘南 6-1 小田原

●山神静子選 (中学選手権予選)

決勝 湘南 3-2 師範

一回戦 湘南 3-0 甲府中

二回戦 湘南 2-0 志太中

三回戦 湘南 0-2 蕨崎中

●県リーグ戦

湘南 4-1 関東学院

湘南 5-2 師範

湘南 1-0 二中

湘南 2-1 小田原

●神宮大会

一回戦 湘南 3-0 茨城師範

二回戦 湘南 0-6 蕨崎中

1937 (昭和12) 年

●春季大会

一回戦 湘南 5-1 神工

二回戦 湘南 3-0 師範

決勝 湘南 4-3 三中

●山神静子選 (中学選手権予選)

一回戦 湘南 1-0 浜松一中

二回戦 湘南 3-1 蕨崎中

三回戦 湘南 2-1 静岡中

●第19回全国中等学校蹴球選手権大会

一回戦 湘南 1-7 埼玉師範

●第9回明治神宮体育大会

一回戦 湘南 7-1 千葉師範

二回戦 湘南 0-12 青山師範

●県リーグ戦 (優勝)

湘南 3-1 師範

湘南 9-1 川崎中

湘南 0-0 関東学院

湘南 0-0 二中



湘南サッカー部【戦績】 大正14年から令和2年までの記録

●第8回	関東中学蹴球選手権大会（優勝）	一回戦	湘南	10-0	水戸商業
準決勝	湘南	6-2	浦和中		
決勝	湘南	2-1	明倫中		
1941（昭和16）年	●県春季大会及びリーグ戦（優勝）	●第9回	関東中学蹴球選手権大会（優勝）	暁星 浦和に勝ち	
準決勝	湘南	4-0	豊島師範		
決勝	湘南	1-0	青山師範		
1942（昭和17）年	●春季毎日新聞トーナメント大会（優勝）	●山神静子選（中学選手権予選）	一回戦	湘南	2-0
決勝	湘南	2-1	甲府商		
準決勝	湘南	0-3	修道中		
1946（昭和21）年	●復興第1回県下蹴球大会（優勝）	●国体地区予選	湘南	2-0	浦和中
一回戦	湘南	6-0	蕨崎中		
一回戦	湘南	1-0	仙台一中		
●第1回国民体育大会サッカー競技中等学校の部	決勝	湘南	3-2	神戸一中	

※ここから新制高校				
1948（昭和23）年				
●国体地区予選				
湘南	5-1	東京付属中		
●第3回国国民体育大会サッカー競技高等学校の部				
一回戦	湘南	2-1	鹿児島	
準決勝	湘南	6-1	仙台第一	
決勝	湘南	0-1	広島高師付属	
1949（昭和24）年				
●国体県予選で小田原高に敗退				
●県高校リーグ戦（一部）				
湘南	不戦勝	鎌倉師範		
湘南	2-0	横浜三高		
湘南	5-1	小田原高		
湘南	2-0	横浜一高		
●第1回関東高校蹴球選手権大会				
（宇都宮）				
一回戦	湘南	6-1	大田原高	
二回戦	湘南	1-3	春日部高	
●高校選手権県予選				
準決勝	湘南	2-1	鎌倉高	
決勝	湘南	2-3	小田原高	
1950（昭和25）年				
●県春季選手権大会				
一回戦	湘南	2-4	希望ヶ丘高 （横浜一高）	
●国体県予選				
一回戦	湘南	6-0	川崎高	
二回戦	湘南	6-0	慶応高	

準決勝	湘南	1-2	小田原高
三位決定戦	湘南	4-0	Y校
●県下春季リーグ戦（一部）	湘南	2-0	鎌倉高
●第2回関東高校選手権大会（大宮）	湘南	2-0	横浜三高
	湘南	5-2	希望ヶ丘高
	湘南	0-1	小田原高
1951（昭和26）年			
●県春季選手権大会	湘南	1-5	宇都宮高
一回戦	湘南	4-0	鎌倉学園
二回戦	湘南	1-4	小田原高
●国体県予選	湘南	1-0	Y校
一回戦	湘南	3-0	厚木高
二回戦	湘南	4-0	神奈川工
準決勝	湘南	2-1	小田原高
決勝	湘南	1-2	北園高
●国体南関東予選	湘南	3-0	Y校
●県下リーグ戦（一部）	湘南	0-3	小田原高
	湘南	0-0	希望ヶ丘高
	湘南	0-1	鎌倉学園
●高校選手権県予選	湘南	1-0	鎌倉学園
一回戦	湘南	4-1	Y校
二回戦	湘南	2-3	翠嵐高
準決勝	湘南		

●第3回関東高校蹴球選手権大会 (湘南高G)	一回戦	湘南	2-0	千葉一高
	二回戦	湘南	0-1	真岡高
1954(昭和29)年	●国体県予選			
	一回戦	湘南	0-2	小田原高
		湘南	1-2	小田原高
			(再試合)	
●第3回東日本大会	一回戦	湘南	6-2	本荘高
	二回戦	湘南	2-1	館林高
	三回戦	湘南	0-4	教大附
1955(昭和30)年	●県下新人戦			
	一回戦	湘南	0-4	小田原高
●国体県予選	一回戦	湘南	5-0	栄光学園
	二回戦	湘南	4-0	Y校
	三回戦	湘南	4-0	法政二高
	準決勝	湘南	抽選勝	茅ヶ崎高
	決勝	湘南	5-0	翠嵐
1956(昭和31)年	●第8回関東高校蹴球選手権大会			出場
1959(昭和34)年	●新人戦			優勝
1960(昭和35)年	●第3回関東高等学校サッカー大会			(準優勝)

決勝	湘南	1－2	市立浦和		
1961（昭和36）年	●国体県予選（優勝）	決勝	湘南	1－0	慶応高
●第16回国民体育大会サッカー競技高等学校の部	一回戦	湘南	1－2	鶴岡工	
●高校選手権県予選（優勝）	決勝	湘南	1－0	小田原高	
●第40回全国高等学校サッカー選手権大会	一回戦	湘南	0－5	修道高	
1962（昭和37）年	●関東大会予選	決勝	湘南	3－1	小田原高
●第5回関東高等学校サッカー大会	一回戦	湘南	1－2	浦和	
●国体県予選（優勝）	決勝	湘南	3－0	鎌学	
●第17回国民体育大会サッカー競技高等学校の部	一回戦	湘南	1－2	徳島商	
●高校選手権県予選	準々決勝	湘南	0－2	慶応	
1963（昭和38）年	●関東大会県予選	決勝リーグ	第4位		
●国体県予選	準決勝	鎌学に敗れる			
●高校選手権県予選	準々決勝	湘南	0－3	鎌学	
1964（昭和39）年					

●県下新人戦	湘南	1-1	鎌学
●関東大会県予選（代表）	湘南	6-0	藤沢
●第7回関東高等学校サッカー大会出場	●全国総体県予選（優勝）	湘南	3-2 藤沢
●国体県予選（第2位）	湘南	0-2	鎌学
●高校選手権	湘南	1-4	鎌学
1965（昭和40）年	●県下新人戦（優勝）	湘南	7-0 小田原
●関東大会県予選 準優勝（代表）	●第8回関東高等学校サッカー大会（優勝）	湘南	1-0 帝京
●国体県予選	湘南	0-2	慶応
●高校選手権県予選（優勝）	湘南	2-1	茅ヶ崎
●第44回全国高等学校サッカー選手権大会一回戦（抽選負け）	湘南	0-0	甲賀
1966（昭和41）年	●県下新人戦	湘南	1-1 相工大附
●関東大会県予選（代表）	湘南	4-0	相工大附
●第9回関東高等学校サッカー大会二回戦	湘南	1-2	宇都宮学園

●全国総体県予選	湘南	0-0	相工大附
●国体県予選	湘南	2-3	鎌倉
●高校選手権（県予選）	湘南	2勝3敗	
予選リーグ			
●1967（昭和42）年			
●県下新人戦	湘南	0-2	相工大附
●三回戦	湘南	1-0	鎌倉
●関東大会予選（代表）	湘南	0-3	相工大附
決勝リーグ	湘南	3-0	関東学院
●第10回関東高等学校サッカー大会	湘南	1-3	館林
●一回戦	湘南	2-5	磯子工
●四回戦	湘南	0-3	鎌倉
●国体県予選	湘南	0-2	浅野
●準々決勝	湘南	0-2	浅野
●高校選手権県予選	湘南	1-3	城北工
●二回戦	湘南	1-4	三崎水産
●一回戦	湘南	0-0	多摩
●全国総体県予選	湘南	1-3	城北工
●二回戦	湘南	1-3	城北工
●国体県予選	湘南	1-3	城北工

●三回戦	湘南	2-4	藤沢
●高校選手権県予選	湘南	1-2	向の岡
●ブロック決勝	湘南	1-2	向の岡
●1969（昭和44）年			
●県下新人戦	湘南	0-1	相工大附
●準々決勝	湘南	1-2	Y校
●二回戦	湘南	0-1	多摩
●全国総体県予選	湘南	1-4	相工大附
●一回戦	湘南	1-4	相工大附
●決勝	湘南	1-4	相工大附
●1970（昭和45）年			
●県下新人戦 予選リーグ負け			
●関東大会県予選 決勝リーグ負け			
●1971（昭和46）年			
●関東大会県予選	湘南	0-5	多摩
●一回戦	湘南	0-6	大和
●高校選手権県予選	湘南	0-3	北陵
●一回戦	湘南	0-3	北陵
●1972（昭和47）年			
●関東大会県予選	湘南	1-2	日大
●三回戦	湘南	0-1	向の岡工
●全国総体県予選	湘南	0-1	向の岡工
●三回戦	湘南	0-1	向の岡工

●国体、県選抜選手に、曾我敏昌君、瀬戸康弘君選ばれ、ベスト8進出			
●高校選手権県予選	湘南	1-2	厚木
●一回戦	湘南	1-2	厚木
●1973（昭和48）年			
●県下新人戦	湘南	0-2	関東六浦
●二回戦	湘南	0-2	鎌倉
●全国総体県予選	湘南	1-2	向の岡工
●三回戦 日野に敗れる	湘南	1-2	向の岡工
●高校選手権予選	湘南	1-2	向の岡工
●二回戦	湘南	1-2	向の岡工
●1974（昭和49）年			
●関東大会県予選（ブロック決勝）	湘南	1-2	鎌倉
●全国総体県予選（ブロック準決勝）	湘南	0-2	県須工
●一回戦	湘南	0-2	相工大附
●決勝	湘南	0-2	相工大附
●1975（昭和50）年			
●県下新人戦	湘南	0-4	鎌倉
●一回戦	湘南	0-4	鎌倉
●全国総体県予選	湘南	0-4	鎌倉
●四回戦	湘南	0-4	鎌倉
●高校選手権県予選	湘南	3-3	生田
●一次予選	湘南	3-3	生田

●1976（昭和51）年			
●県下新人戦	湘南	1-4	緑ヶ丘
●一回戦	湘南	1-4	緑ヶ丘
●国体県選抜メンバーに八木啓太君選ばれる			
●高校選手権県予選（ベスト8）	湘南	2-3	旭
●1977（昭和52）年			
●県下新人戦	湘南	0-1	港南台
●一回戦	湘南	0-1	港南台
●関東大会県予選	湘南	0-1	茅ヶ崎
●四回戦	湘南	0-1	茅ヶ崎
●全国総体県予選	湘南	1-2	県横須賀
●二回戦	湘南	1-2	県横須賀
●高校選手権県予選（ベスト8）	湘南	0-2	日大
●1978（昭和53）年			
●県下新人戦（ベスト4） 第三位			
●全国総体県予選 第三位			
●高校選手権県予選（ベスト4）	湘南	0-1	旭
●準決勝	湘南	0-1	旭
●初のテレビ神奈川中継			
●1979（昭和54）年			
●県下新人戦 地区予選	湘南	0-1	藤沢西
●全国選手権県予選 一次予選	湘南	0-1	藤沢西
●1980（昭和55）年			
●県新人戦中央大会（ベスト8）	湘南	0-1	日大藤沢
●準々決勝	湘南	0-1	日大藤沢
●関東大会予選（ベスト8）	湘南	0-1	日大藤沢

●準々決勝	湘南	0-2	相工大附属
●全国総体県予選（ベスト16）	湘南	0-0	富岡（PK負け）
●高校選手権県予選（ベスト8）	湘南	0-6	鎌倉
●準々決勝	湘南	0-6	鎌倉
●1981（昭和56）年			
●県新人戦中央大会	湘南	0-1	藤沢西
●関東大会県予選（ベスト16）	湘南	0-1	旭
●全国総体県予選（ベスト16）	湘南	0-3	日大
●高校選手権県予選 2回戦敗退	湘南	0-3	日大
●1982（昭和57）年			
●静岡サッカーフェスティバル	湘南	2勝2負2分け	
●付属定期戦	湘南	0-1	付属
●浦高定期戦	湘南	1-2	浦和
●高校総体県予選（2回戦）	湘南	0-1	翠嵐
●高校選手権 地区予選（準決勝）	湘南	1-4	大和
●新人戦中央大会	湘南	0-3	相工大附
●1983（昭和58）年			
●新人戦中央大会（1回戦）	湘南	0-1	伊志田
●静岡フェスティバル	湘南	0-1	伊志田

●3勝1負1分			
●付属定期戦	湘南	7-0	付属
●関東大会予選（決勝）	湘南	7-0	付属
●相工大に負け（準優勝で代表となる）			
●第26回関東高校サッカー大会	湘南	0-6	帝京
●一回戦	湘南	0-6	帝京
●高校選手権予選（準優勝）	湘南	1-2	鎌倉
●1984（昭和59）年			
●新人戦中央大会（3回戦）	湘南	0-1	金沢
●静岡フェスティバル	湘南	0-1	金沢
●3勝1負1分			
●付属定期戦	湘南	2-1	付属
●関東大会予選（3回戦）	湘南	0-1	日大
●総体県予選（2回戦）	湘南	1-2	厚木
●高校選手権 一次予選（4回戦）	湘南	0-1	日大
●浦高戦	湘南	0-0	浦和
●1985（昭和60）年			
●新人戦中央大会（1回戦）	湘南	0-0	桐陰
●静岡遠征	湘南	0-0	桐陰
●3勝2負1分			
●付属定期戦	湘南	1-3	桐陰

湘南サッカー部【戦績】 大正14年から令和2年までの記録

●関東大会予選 (3回戦)	湘南 1-0	付属
●総体県予選 (3回戦)	湘南 0-2	藤沢北
●高校選手権予選 (3回戦)	湘南 0-1	大清水
●浦高戦	湘南 1-2	相工大附
●浦高戦	湘南 0-2	浦和

1988 (昭和63) 年	湘南	0-3	日大藤沢
●新人戦中央大会	湘南	1-2	桐蔭
●準決勝	湘南	4勝4敗	
●静岡遠征	湘南	2-0	付属
●付属定期戦 (40回)	湘南	0-4	藤沢西
●関東大会予選 (決勝)	湘南	1-2	武南 (埼玉)
(代表となる)	湘南	0-2	藤沢北
●第31回関東高校サッカー大会	湘南	2-1	県相模原
●高校選手権予選 (決勝)	湘南	1-1	上牧
(代表となる)	湘南	2-0	愛知
●選手権 ベスト16	湘南	0-3	盛岡商業
●一回戦	湘南	0-1	向上
●PK勝	湘南	0-0	鎌倉
●二回戦	湘南	0-1	
●三回戦	湘南	0-1	
●総体県予選 (ベスト8)	湘南	0-0	
●六回戦	湘南	0-0	
●高校選手権予選 (ベスト16)	湘南	0-1	
●関東大会県予選 (ベスト16)	湘南	0-1	
●三回戦	湘南	0-1	
●一回戦	湘南	0-1	
●PK勝	湘南	0-1	
●選手権 ベスト16	湘南	0-1	
(代表となる)	湘南	0-1	
●一回戦	湘南	0-1	
●PK勝	湘南	0-1	
●二回戦	湘南	0-1	
●三回戦	湘南	0-1	
●総体県予選 (ベスト8)	湘南	0-1	
●六回戦	湘南	0-1	
●高校選手権予選 (ベスト16)	湘南	0-1	

●新人戦中央大会 (65回生)	湘南 0-3	大清水
二回戦	湘南 0-4	荏田
1990 (平成2) 年		
●関東大会県予選	湘南 2-5	県相模原
二回戦	湘南 1-3	鎌倉学園
●総体県予選	湘南 0-1	川崎南
●高校選手権予選	湘南 1-2	逗葉
●新人戦中央大会 (66回生)		
二回戦	湘南 1-2	逗葉
1991 (平成3) 年		
●関東大会県予選 (ベスト32)	湘南 0-1	向上
二次二回戦	湘南 0-1	向上
●総体県予選	湘南 1-3	旭
四回戦	湘南 0-1	桐蔭学園
●高校選手権予選		
三回戦	湘南 0-1	桐蔭学園
●新人戦 (67回生)		
地区予選	敗退	
1992 (平成4) 年		
●関東大会県予選		
不出場		
●総体県予選		
五回戦	湘南 0-0	鎌倉
●高校選手権予選 (PK負け)		
(ベスト16)		

●新人戦中央大会 (68回生)	湘南 1-3	大清水
四回戦	湘南 0-4	藤沢西
1993 (平成5) 年		
●関東大会県予選 (ベスト4)	湘南 0-1	桐光学園
準決勝	湘南 0-1	
●総体県予選	湘南 0-1	大磯
五回戦	湘南 0-1	
●高校選手権予選 (ベスト16)	湘南 0-3	藤沢西
●二次一回戦	湘南 0-3	
●新人戦中央大会 (69回生)	湘南 0-2	茅ヶ崎北陵
二回戦	湘南 0-2	
1994 (平成6) 年		
●関東大会県予選	湘南 1-3	西湘
二次一回戦	湘南 1-3	
●総体県予選	湘南 0-0	港南台
四回戦	湘南 0-0	
(PK負け)		
●高校選手権予選	湘南 1-2	伊志田
二回戦	湘南 1-2	
●新人戦中央大会 (70回生)	湘南 0-1	港南台
一回戦	湘南 0-1	
1995 (平成7) 年		
●関東大会県予選 (ベスト4)	湘南 0-2	桐光学園
準決勝	湘南 0-2	
●総体県予選	湘南 1-2	弥栄西
五回戦	湘南 1-2	
●高校選手権予選	湘南 1-3	大船
二回戦	湘南 1-3	
●新人戦中央大会 (71回生)	湘南 1-3	

二回戦	湘南	0-1	向上
1996(平成8)年			
●関東大会県予選	湘南	0-2	厚木南
●総体県予選	湘南	0-1	大船
●全国選手権予選	湘南	0-0	清水ヶ丘
三回戦	湘南	0-0	
●新人戦中央大会	(PK負け)		
二回戦	湘南	0-1	武相
1997(平成9)年			
●関東大会県予選	湘南	1-1	武相
二回戦	湘南	1-1	
●総体県予選	(PK負け)		
五回戦	湘南	0-0	湘南工科
●高校選手権予選	(PK負け)		
二回戦	湘南	0-1	秦野南が丘
●新人戦中央大会	(73回生)		
二回戦	湘南	0-0	淵野辺
1998(平成10)年			
●関東大会県予選	湘南	0-1	川和
一回戦	湘南	0-1	
●総体県予選	湘南	0-1	金井
二回戦	湘南	0-4	
●高校選手権予選	湘南	1-3	向上
二回戦	湘南	1-3	
●新人戦中央大会	(74回生)		

●新人戦中央大会 (72回生)	湘南 0-1	武相
●二次一回戦	湘南 0-1	武相
●新人戦中央大会 (73回生)	湘南 0-1	秦野南が丘
●二次一回戦	湘南 0-1	秦野南が丘
●新人戦中央大会 (74回生)	湘南 0-1	武相
●二次一回戦	湘南 0-1	武相
●新人戦中央大会 (75回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (76回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (77回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (78回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (79回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (80回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (81回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (82回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (83回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (84回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (85回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (86回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (87回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (88回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (89回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (90回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (91回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (92回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (93回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (94回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (95回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (96回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (97回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (98回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (99回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台
●新人戦中央大会 (100回生)	湘南 0-1	港南台
●二次一回戦	湘南 0-1	港南台

湘南サッカー部【戦績】 大正14年から令和2年までの記録

●関東大会県予選	湘南	0-1	東海大相模
●総体県予選	湘南	0-1	保土ヶ谷
●高校選手権予選	湘南	5-6	横浜南
●新人戦中央大会(78回生)	湘南	2-4	横浜商工
●三回戦	湘南	2-4	横浜商工
2003(平成15)年			
●関東大会県予選(ブロック決勝)	湘南	0-1	光明相模原
●四回戦	湘南	0-1	光明相模原
●総体県予選	湘南	1-2	日大藤沢
●六回戦	湘南	1-2	日大藤沢
●高校選手権予選	湘南	0-2	慶応
●三回戦	湘南	0-2	慶応
●新人戦中央大会(79回生)	湘南	0-2	金井
●二回戦	湘南	0-2	金井
2004(平成16)年			
●関東大会県予選	湘南	0-3	茅ヶ崎北陵
●一回戦	湘南	0-3	茅ヶ崎北陵
●総体県予選(ブロック決勝)	湘南	0-1	小田原
●五回戦	湘南	0-1	小田原
●高校選手権予選	湘南	1-4	武相
●四回戦	湘南	1-4	武相
●新人戦(80回生) 地区予選敗退	湘南	1-4	武相
2005(平成17)年			
●関東大会県予選	出場できず		
●総体県予選			

●二回戦	湘南	0-3	秦野南ヶ丘
●高校選手権予選	湘南	0-3	秦野南ヶ丘
●四回戦	湘南	0-3	厚木北
●新人戦中央大会(81回生)	湘南	0-3	法政二
●三回戦	湘南	0-3	法政二
2006(平成18)年			
●関東大会県予選(ベスト8)	湘南	1-2	秦野
●五回戦	湘南	1-2	秦野
●総体県予選	湘南	2-4	日大藤沢
●高校選手権予選	湘南	0-3	横浜翠嵐
●二回戦	湘南	0-3	横浜翠嵐
●新人戦中央大会(82回生)	湘南	0-1	旭
●三回戦	湘南	0-1	旭
2007(平成19)年			
●関東大会県予選	湘南	0-0	横浜隼人
●一回戦	湘南	0-0	横浜隼人
●総体県予選	湘南	0-3	淵野辺
●三回戦	湘南	0-3	淵野辺
●高校選手権予選	湘南	1-2	藤沢西
●二回戦	湘南	1-2	藤沢西
●新人戦中央大会(83回生)	湘南	0-1	湘南学院
●一回戦	湘南	0-1	湘南学院
2008(平成20)年			
●関東大会県予選	湘南	0-2	藤沢西
●二回戦	湘南	0-2	藤沢西
●総体県予選	湘南	1-2	武相
●三回戦	湘南	1-2	武相

●高校選手権予選(ベスト28)	湘南	0-1	横須賀
●二次二回戦	湘南	0-1	横須賀
●新人戦中央大会(84回生)	湘南	1-2	横浜創英
●二回戦	湘南	1-2	横浜創英
2009(平成21)年			
●関東大会県予選	湘南	1-2	座間
●三回戦	湘南	1-2	座間
●総体県予選	湘南	1-2	湘南工科
●二次一回戦	湘南	1-2	湘南工科
●高校選手権予選	湘南	0-2	日大藤沢
●二次一回戦	湘南	0-2	日大藤沢
●新人戦中央大会(85回生)	湘南	0-7	桐光学園
●一回戦	湘南	0-7	桐光学園
2010(平成22)年			
●関東大会県予選	湘南	0-1	海老名
●二回戦	湘南	0-1	海老名
●総体県予選	湘南	0-2	横浜創英
●三回戦	湘南	0-2	横浜創英
●高校選手権予選	湘南	0-2	鎌倉
●四回戦	湘南	0-2	鎌倉
●新人戦中央大会(86回生)	湘南	1-1	川崎北
●二回戦	湘南	1-1	川崎北
(PK負け)			
2011(平成23)年			
●関東大会県予選	湘南	1-3	市立東
●五回戦	湘南	1-3	市立東
●総体県予選(ベスト16)	湘南	0-1	桐蔭学園
●三回戦	湘南	0-1	桐蔭学園

●高校選手権予選(ベスト16)	湘南	0-2	向上
●三回戦	湘南	0-2	向上
●新人戦地区予選 免除(87回生)	湘南	0-2	向上
2012(平成24)年			
●関東大会県予選(ベスト16)	湘南	1-1	藤沢清流
●三回戦	湘南	1-1	藤沢清流
(PK負け)			
●総体県予選(ベスト16)	湘南	0-2	桐蔭学園(延長)
●三回戦	湘南	0-2	桐蔭学園(延長)
●高校選手権予選(ベスト16)	湘南	0-2	向上
●三回戦	湘南	0-2	向上
●新人戦地区予選 免除(88回生)	湘南	0-2	向上

●関東大会県予選(ベスト16)	湘南	0-3	桐蔭学園
●三回戦	湘南	0-3	桐蔭学園
●総体県予選(ベスト16)	湘南	0-2	日大藤沢
●三回戦	湘南	0-2	日大藤沢
●高校選手権予選(ベスト8)	湘南	0-1	市立東
●準々決勝	湘南	0-1	市立東
●新人戦地区予選 免除(91回生)	湘南	0-1	市立東
2016(平成28)年			
●関東大会県予選(ベスト8)	湘南	1-5	桐蔭学園
●準々決勝	湘南	1-5	桐蔭学園
●総体県予選	湘南	0-3	川崎市立橘
●二次一回戦	湘南	0-3	川崎市立橘
●高校選手権予選	湘南	0-0	秦野
●一次四回戦	湘南	0-0	秦野
(PK負け)			
●新人戦地区シード決め(92回生)	湘南	0-3	藤沢西
●決勝	湘南	0-3	藤沢西

●総体県予選	湘南	1-2	鎌倉
●二次一回戦	湘南	1-2	鎌倉
●高校選手権予選	湘南	2-3	東海大相模
●二次二回戦	湘南	2-3	東海大相模
●新人戦地区シード決め(94回生)	湘南	0-1	七里ガ浜
●準々決勝	湘南	0-1	七里ガ浜
2019(平成31)年			
●関東大会県予選	湘南	0-1	弥栄
●三回戦	湘南	0-1	弥栄
●総体県予選	湘南	1-3	厚木北
●二次一回戦	湘南	1-3	厚木北
●高校選手権予選	湘南	2-2	日大
●二次一回戦	湘南	2-2	日大
(PK負け)			
●新人戦地区シード決め(95回生)	湘南	1-1	鎌倉
●決勝	湘南	1-1	鎌倉
(PK勝ち)			

2013(平成25)年			
●関東大会県予選	湘南	0-1	秦野総合
●四回戦	湘南	0-1	秦野総合
●総体県予選	湘南	0-1	慶応
●二回戦	湘南	0-1	慶応
●高校選手権予選	湘南	0-1	百合ヶ丘
●二次一回戦	湘南	0-1	百合ヶ丘

2017(平成29)年			
●関東大会県予選	湘南	2-3	湘南学院
●四回戦	湘南	2-3	湘南学院
●総体県予選	湘南	1-2	星槎国際
●二次一回戦	湘南	1-2	星槎国際
●高校選手権予選	湘南	2-3	桐蔭学園
●二次二回戦	湘南	2-3	桐蔭学園
●新人戦地区シード決め(93回生)	湘南	0-1	鎌倉
●決勝	湘南	0-1	鎌倉

2020(令和2)年			
●関東大会県予選	中止		
●総体県予選	中止		
●高校選手権予選	中止		
●一次ブロック決勝	湘南	0-0	市ヶ尾
(PK負け)			

2014(平成26)年			
●関東大会県予選	湘南	2-4	湘南学院
●二回戦	湘南	2-4	湘南学院
●総体県予選	湘南	0-3	逗葉
●三回戦	湘南	0-3	逗葉
●高校選手権予選(ベスト16)	湘南	0-1	向上
●三回戦	湘南	0-1	向上
●新人戦地区予選免除(90回生)	湘南	0-1	向上
2015(平成27)年			

2018(平成30)年			
●関東大会県予選	湘南	1-3	向上
●三回戦	湘南	1-3	向上

※湘南 通算戦績			
高校選手権／出場6回、ベスト4 1回			
国体／出場4回、優勝1回、準優勝1回			
関東大会／出場19回、優勝3回、準優勝2回			

参考文献・資料

●湘南高等学校記念誌委員会編

- 『湘南10周年誌』(一九三二)／『湘南30周年誌』(一九五二)／『湘南50周年誌』(一九七二)／
『湘南60周年誌』(一九八二)／『湘南70周年誌』(一九九二)／『湘南80周年誌』(二〇〇二)／
『湘南90周年誌』(二〇一二)

●湘南サッカー部OB会編

- 『湘南サッカー 半世紀を越えて』(一九八二)
『湘南サッカー部OB会報』(一九八二)
『湘南サッカー実戦誌』(一九八九)
『湘南サッカー部OB会報 80周年記念特号』(二〇〇二)
『湘南サッカー部会報 90周年特集号』(二〇一二)
『中さんの絵本』(二〇一二) 鈴木中著

『藤沢市史 第一巻―第七巻』藤沢市史編さん委員会編

『県協会創立50周年記念誌』(一九七八) 神奈川県サッカー協会

『高校サッカー100年』全国高等学校体育連盟サッカー専門部編(講談社)

『日本サッカー史 日本代表の90年』後藤博生著(筑衛社)

『日本サッカー史 日本代表の90年 資料編』後藤博生著(筑衛社)

『デッドマール・クラマー』中条一雄著(ベースボール・マガジン社)

『フットボールの社会史』F. P. マグーン著 忍足欣四郎訳(岩波書店)

『20世紀全記録』(講談社)

『20世紀の怪きを讀く』(毎日新聞社)

●協力 神奈川県新聞社 テレビ神奈川(公財)日本サッカー協会(一社) 神奈川県サッカー協会

●湘南サッカー部HP <http://shonan-soccer.com>

湘南蹴球百年誌編纂委員会

関 佳史(編集責任)／相沢 克治／中嶋 修／沢田 ミツル／若木 均／西 智／篠塚 貴志

湘南蹴球百年誌

2021年 10月20日 初版第1刷発行

発行——湘南サッカー部OB会
編集——湘南蹴球百年誌編纂委員会
文——植松二郎
ブックデザイン——柳原デザイン室
印刷・製本——株式会社 シナノ

*本書の無断複写・複製・転載を禁じます

© SHONAN SOCCER CLUB OB. 2021 Printed in Japan



松本節「ひまわりと雲」1937年 油彩・キャンパス 平塚市美術館蔵

遠くを見る

画・松本節（八回生）—— 第7章 296ページ

二十九歳の海軍医は

火山島沖から還らなかったが

手には絵筆

足にはボール

そのよろこびとともに

変わらず遠くを見ている